

紀 要 第 41 号

(論文)

東北地方・縄文晩期の土偶 (7)

1~24

金子 昭彦

東北地方北部における平安時代の雑穀利用に関する考古学的研究

25~44

福島 正和

岩手県における近・現代の白炭窯の系譜

45~64

阿部 勝則

(研究ノート)

東北北部における縄文時代草創期の爪形文系土器について

65~78

一板橋Ⅱ遺跡・鹿糠浜Ⅰ遺跡の出土事例の検討一

野中 裕貴

令和4年3月

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

序

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、出土資料の整理と記録保存を目的として調査報告書を刊行してまいりました。

また、これら資料の活用を図るため普及啓発事業や考古学関連分野の調査研究にも努めております。昭和56年以降、研鑽の成果を広く公開するために紀要を刊行してまいりましたが、このたび第41号を発刊する運びとなりました。

本紀要には、論文等4編を収録いたしました。これらは、職員等が業務の合間に、個々の研究成果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として、また地域史や社会教育の資料として広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、紀要の作成にあたり、ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター
所長 斎藤 邦雄

例 言

- 1 この紀要は、埋蔵文化財の調査及び研究事業の一環として、考古学及び考古学関連分野の研究を推奨し、考古学をはじめとする学術振興に寄与するとともに、埋蔵文化財保護思想の普及を図ることを目的として作成したものである。
- 2 本紀要には、論文3編、研究ノート1編を収録している。
- 3 引用図面は、各執筆者がそれぞれ許可を得て掲載している。
- 4 本年度の編集委員の構成は、次のとおりである。

編集委員	主任文化財専門員	福島	正和
編集委員	主任文化財専門員	村木	敬

東北地方・縄文晩期の土偶（7）

－青森県^{そとめやち}五月女菴、^{かわらたい}川原平（1）遺跡ほか、その後の多出報告遺跡－

金子 昭彦

東北地方・縄文時代晩期土偶のデータ・ベース化の一環として、今回は、(6)脱稿後管見にした二十点以上報告遺跡を取り上げた。青森県五月女菴、川原平(1)遺跡では二百点以上報告されている。川原平(1)遺跡は、遺跡範囲を全掘した貴重な例であり、後期末～晩期初頭の全体の分かる資料に恵まれ、漆付着土偶もある。そのほか、岩手県千菊（隣接する中村遺跡含む）、杉の堂遺跡、宮城県北小松遺跡報告土偶を表にした。

1. はじめに

前稿(6)(金子 2016a)脱稿後、青森県五所川原市五月女菴遺跡、同 西目屋村川原平(1)遺跡の報告書が刊行された。青森県で200点以上土偶を出土する晩期の遺跡が、これまで八戸市是川中居遺跡しかなかったのが、一気に二遺跡増えることになったのである。立地も含め、これまでの印象の変更を求める遺跡であることは間違いない。また、川原平(1)遺跡では、これまで類例の少なかった後期末の全体の分かる資料に恵まれ、さらに、遺跡を全掘した調査例としても貴重である。表にして資料化することが急がれた理由である。ついでに、その他の(6)脱稿後に報告された資料や遺漏分も含めて悉皆的に収集資料化するつもりだったが、今回筆者が担当する岩手県立博物館のテーマ展の準備期間に完全に重なってしまい、さらに12月に開催された（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの埋蔵文化財発掘調査技術講習会の講師を引き受け、とてもそこまで手が回らなくなり、本稿(6)脱稿後に管見にした、20点以上土偶が報告された遺跡しか扱えなかった。なお、図の出典は、カッコ内の表番号をもとに表の掲載箇所を参照願いたい。

2. 表の見方

記載要綱は、(1)～(6)と同じである。大綱は(1)冒頭に記し、(2)～(6)冒頭で補足している。なお、資料は、明らかに当該期から外れる場合は表から除外した。

形態名は、原則として金子(2003)による。部位は、完全に残っていれば◎、欠けているが半分まで残っていれば○、それ以下ならば△で示した。接合欄の記号。△は、詳細は不明だが、接合していると思われるもの。○は、すぐそばの破片が接合したのではなく、廃棄後に割れたとは考えられないもの。◎は、それが3片以上接合したもの。●は、接合によって完形に近く復元されたもの。★は、遠距離（20m以上）接合。■は、以上が複合した特筆すべき接合で、詳細は備考欄に記した。

付着物の欄。表面に塗布する赤色付着物は、痕跡的なもの（不明含む）を○、多いものを◎、全面塗布のものを●とした。漆もこの欄に記した。黒色付着物は、塗布箇所が割口か否かに注意した。

“女性”とは“女性的特徴の有無”の意である。ここでは、遮光器土偶など、類例が多くよく知られている類型については、女性器の有無だけ記し（有る場合、▼と記す）、類例がほとんどないものに対してだけ、上記の特徴が認められる場合、全て記したいと思うが、縄文土偶は乳房を持つのが普通なので、特に大きいものだけ記す。乳、線（正中線の意）等と略記し、複数認められる場合は◎、三つ以上の場合●と記し、備考欄に内容を略記する。なお、腰部に見られるパンツ状区画は、裸体表現（屈折像土偶など）や大きな乳房を持つ土偶（前葉の大型遮光器土偶など）に伴う場合がほとんどで、何らかの“女性的特徴”を表現している可能性が高いので、検討の対象に含めた（ある場合

“バ”と記す)。

掲載箇所欄で文献名を引用する際、発行機関・発行年(西暦)で示しているが、発行年は下二桁のみを記し、発行機関は、次のように略称している。〇〇県の教育委員会→県教、〇〇県の埋蔵文化財センター→県埋、〇〇市町村の教育委員会→〇〇(市町村名)、市町村名が長い場合は最初の二文字。

備考欄で類例を引用した際の数字は、本稿(1)~(6)の表番号(通して付けている)である。

3. 青森県五月女苑、川原平(1)遺跡ほか、その後の多出報告遺跡

(1)青森県五所川原市五月女苑遺跡

・五月女苑遺跡内容確認調査(第13表4583)(五所川原市教育委員会 2006)

下記の調査の前に内容確認調査が二度行われ(下記報告書第1分冊:p.3)、二度目の調査報告書(五所川原市教育委員会 2006)が岩手県立博物館にあり見ることができた。土器、石器以外では、x字形土偶1点、土製勾玉(両端刻目長形)1点、有孔土製品、動物遺存体などが出土し、縄文土器の出土時期は、下記と変わらないようである。

・五月女苑遺跡(第13表4584~4781)(所川原市教育委員会 2017)

市名と報告書の図版番号が長いため、表の掲載箇所欄は略記せざるを得ず、書名(五所川原市教育委員会 2017)は割愛し、図〇・〇の「図」は省略して、その後の数字のみ記した。

「遺物集中区」と呼ばれた捨て場は、六地点に分かれて確認されたため、「第1~6遺物集中区」と分け(第2、3、6遺物集中区はさらに東西に細分)出土品も別々に報告されている。本稿でも、「出土位置」欄に略記した。地点差を期待してのことであるが、大きな違いはなかったようである。ただし、大洞A1式土器の掲載が多い第4遺物集中区には、確かに大洞A1式期の土偶が多いように見える。

図Ⅲ-2-4-14の27は、文様から後期中葉と判断して割愛した。図Ⅲ-2-1-191の10(註1)、図Ⅲ-2-2-2の14(註2)は、後期後葉と判断して割愛した。図Ⅲ-2-4-17の61、62の破片は、当該期の土偶と判断しにくいので割愛した。図Ⅲ-3-1-65の1は、中期土偶の可能性が高いので割愛した。図Ⅲ-3-1-65の5、6は、後期後葉(瘤付土器第I段階?)と思われるので割愛した。図Ⅲ-3-1-65の2~4は、小片でかつ後期の可能性が高いので割愛することにした。図Ⅲ-3-2-35の2は、後期中~後葉の可能性が高いので割愛した。図Ⅲ-3-3-10の12は、当該期とする根拠がないので割愛した。図Ⅲ-3-4-38の3は、土偶ではないと思われるので割愛した(土器の一部か装身具)。図Ⅲ-3-5-8の10、11は、後期後葉以前と思われるので割愛した。図Ⅲ-3-6-34の1は、当該期の土偶とする根拠が全くないので割愛した。図Ⅲ-4-4-1~の5、11、43、53、61~65、100も同様である。図Ⅲ-4-4-1~の12、14、18、47、51、54、96、118、119、127、133、139は、後期後葉と思われるので割愛した。図Ⅲ-4-4-1~の34、35、131、134、135は、後期後葉の腕と判断して割愛した。図Ⅲ-4-4-4の70は、袋状土器なので割愛した。

土偶は322点出土したそうだが、掲載は240点に留まっている(報告書第2分冊:p.420)。掲載品で判断する限り、土偶は、概ね下記出土土器の傾向に比例しているようである。大型遮光器系列土偶やx字形土偶、結髪土偶も存在するが、優品は少なく、独特のものも多い(第1図5)。第1図10の脚の屈曲の極めて弱い屈折像土偶は、北海道系であろう。第1図1は、出土状況と文様から大洞B2式期と判断される(報告書第2分冊:p.422)大型遮光器系列でない土偶である。大洞A1式期の肩パット土偶も出土している(第13表4761)。

北海道系と言えば、x字形土偶のように抽象的ではあるが、胴長で、より人に近いプロポーションを持つ類(x字形×小遮)も目立ち、下北半島ではあるが、同じく北海道に近い二枚橋(2)遺跡と共通

する（本稿(5)）。首に刻目隆帯のめぐる土偶が見られ（第1図14）、宇鉄遺跡出土の肩パット土偶に共通し（本稿(5)第7表3305）、これは津軽半島北部の地域性なのかもしれない。

頭頂部が突起状に突出する特徴的な黥面土偶があり（第13表4619、4633）、類例が鶴田町船沢から出土している（本稿(2)=第2表1216）。そちらでは「刺突文？」と位置づけてしまったが、いずれにしる頭部のみで全容は不明である。

本遺跡は、土砂採取に伴って8,200㎡調査され、その後保存目的のため1,790㎡確認調査された。縄文時代後期後葉～晩期後葉の集落跡が主として発見され、墓地（人骨7体出土）と捨て場等が検出されている。石製玉の製作ほか、ベンガラ生産や漆器製作も行われている。黄褐色粘土のマウンドを持つ墓等の成果により保存されることとなった。奈良時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の島跡も検出され、弥生時代中期後葉、古墳時代初頭（後北C2-D式）の土器片、中世の陶磁器片も出土している。

縄文土器は、僅かな中期前葉のほか、後期中葉（十腰内Ⅱ～Ⅲ式）、後期後葉（瘤付土器第Ⅱ段階）～晩期後葉（大洞A1式）が出土し、大洞C2式が最も多く、次いでその前後で、晩期初頭以前は比較的少ないが瘤付土器第Ⅱ段階は比較的多い。位置的に北海道系土器も各時期存在する。

土偶関連遺物は、土面16点（「浅鉢」とされた1点も追加）、人面付土器3点、人面形突起1点、岩偶2点？、岩版2点？、土版3点、動物形突起2点、動物形土製品1点出土し、大洞C2～A1式期と後期後葉～末に偏っている。晩期前葉は、土器の出土は多いのに岩版に代表される関連遺物は少ない。

石剣類は129点出土したそうだが、石棒・石刀が多く、いわゆる石剣は少ないそうである（報告書第2分冊：p.313）。石冠9点、土冠2点出土した。内面渦状土製品が3点出土し、全て椀形で晩期前半の可能性が高い（金子 2011b）。

土製耳飾は58点出土し、掲載品を見る限り、土器、土偶、土面の出土が多い大洞C2～A1式期でほとんどを占めるはずのC2ネジ形（金子 2009a）が非常に少ない。大型のクラゲ状や鼓状、蓋状に代表される極小の片端大系列が多く、土製耳飾に関しては晩期前半が主体を占めていると考える（金子 2009a）。弧状土製品は2点出土し、報告書第2分冊図Ⅲ-3-2-33の1は第二段階（大洞BC1～2式期）、同図Ⅲ-4-3-8の97は第四段階（大洞C2式前半期）か（金子 2009b）。菱形環状土製品は2点出土し（報告書第2分冊図Ⅲ-4-3-10の118、121）、両方とも第Ⅰa段階か（金子 2010c）。ボタン状石製品1点（報告書第2分冊図Ⅲ-3-1-62の17）は、第Ⅲb段階で大洞C2式古期か（金子 2010b）。その他、玉象嵌土製品、菱形環状土製品類似品（報告書第2分冊図Ⅲ-4-3-10の120）や鏢形土製品類似品（報告書第2分冊図Ⅲ-4-3-10の111～113）（金子 2011b）、環状や貫通孔を持ち装身具と考えられる出土品が多数ある。

玉類の出土も多く、土製玉類は385点出土し（丸玉187、管玉62、勾玉51）（報告書第2分冊：p.326）、大洞C2～A1式期に特徴的な瓢箪小玉（金子 2006）も51点掲載されている。同じ頃の可能性が高い両端刻目長形土製勾玉（金子 2016c：p.238）も20点ほど掲載され、二点掲載されている三角玉（報告書第2分冊図Ⅲ-4-6-5の84、85）は、弧型で大洞C1～2式古期か（金子 2011b）。その他の類型も含め土製玉類が多いこと自体が、大洞C2～A1式期の出土品が多いことを示唆する可能性が高い。石製玉類は784点出土しており（丸玉759、管玉21、勾玉4）（報告書第2分冊：p.332）、未成品を加えると6,392点に及び、遺跡内で緑色凝灰岩製丸玉を中心に製作が行われていたが、ヒスイ製品も多い（100点以上）（報告書第2分冊：p.540）。

その他、漆櫛1点、サメ歯（アオザメ）8点、貝輪や骨角製装身具などが出土している。集落は、大洞A1式期の出土遺物が比較的多いのにも関わらず、ここで突然途絶しており、「大洞A1

式の良好な遺物包含層が検出された内陸部にある岩井・大沼遺跡（本稿(2)第5表601－引用者註）へ集落が移動した可能性」（報告書第1分冊：p.2）は十分首肯できる。

・五月女遺跡5次調査（第13表4782～4787）（五所川原市教育委員会 2021）

本書も、図番号が長いので、掲載欄の書名は発行年のみとし「21」と略記した。

土砂採取事業に伴って約756㎡調査され、調査範囲は上述の調査区の東側に直交する方向に延びるが、調査区は飛び飛びに三地点に分かれる。

表4782～4784は、そのうちの1区（126㎡）から出土した。1区からは、縄文時代晩期後葉を中心にした集落跡が検出され、掲載土器は、大洞A1式（津軽系）を主体とし、後期中葉、晩期前葉、大洞A2～A¹式古期土器も見られる。報告書図Ⅲ-2-13の2、3は、後期後葉土偶の脚と思われるので割愛した。

4785～4787は、3区（457㎡）から出土した。3区からは、縄文時代後期後葉～晩期（中葉の墓）、古代の集落跡が検出された。掲載土器は、やはり大洞A1式（津軽系）が多いが、後期中葉、後期後葉から晩期後葉（大洞A2式）まで多時期に亘る。報告書図Ⅲ-2-64の4、5は、後期後葉土偶の腕、脚と思われるので、6は土偶とする根拠が弱いので割愛した。

(2)青森県西目屋村川原平(1)遺跡

津軽ダムの建設に伴って、後期末～晩期の拠点集落跡15,790㎡が全面調査された。後期末～晩期前葉の人面付土器が特徴的である。なお、試掘調査で出土した土偶は、本稿(6)で取り上げている。

・川原平(1)遺跡遺跡南端（第13表4788～4817）（青森県教育委員会 2016a）

遺跡南端に相当するC区の平成23、25年度（一部）調査区の報告で、捨て場を主体とするが、土器埋設遺構や石棺墓なども検出された。僅かに、縄文時代前期末、中期後葉、後期前葉（十腰内I式）、後葉（十腰内IV式）、弥生土器？、土師器も出土しているが、ほとんどが縄文時代後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期後葉（大洞A1式）の土器である。後期末～大洞B1式が多数を占め、次いで大洞C1式で、それ以外の時期は少なく、特に大洞BC2式がほとんどないことは特筆すべき点である。こうした消長は、一般的な晩期の拠点集落と逆で（金子 2017：p.330）、山間にあるという立地の特殊性に起因するものであろうか。

土偶は39点掲載され、時期は出土土器の傾向にほぼ合致する。人面付土器が多く、6点以上出土している。なお、表の人面付土器の残存率は、土器全体のものである。岩版約6点（以上）、石剣類約43点、円盤状石製品64点掲載されている。出土時期の傾向から、やはり土製耳飾の出土は多く、34点掲載され、無文環状のものが多く、報告書遺物図191-10は、ネジ前系列である（金子 2010d：p.135、2009a）。報告書遺物図204-5は、石製耳飾（耳栓）であろう。土製花卉丸玉は5点掲載され、やはりⅡa～b段階がほとんどだが（瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階）遺物図195-9は、第Ⅲ段階（大洞B2～C1式期）の可能性がある（金子 2011c）。第三段階（大洞C1式期）の弧状土製品（金子 2009b）1点、イモガイ殻頂部様の装身具1点掲載され、その他、赤色小型土製玉が8点（勾玉2、丸玉6）、小型石製丸玉類7点（ヒスイ2点）、その他の石製装身具類数点、木製櫛3点などが掲載され、コハクの出土が報告されている。

遺物図版184の5、6は、「土偶の部品」とされているが、実感が持てなかったのが割愛した。遺物図版188の1、4、6、7、8、9～11も同様で、当該期の土偶の部位という確証が持てなかったのが割愛した。第13表4801～4805の「一部は図184-1（本表4800）と同一個体と思われる」とされている（報告書：p.159）。

・川原平(1)遺跡北西隅（平成25年度調査区）（第13表4818～4823）（青森県教育委員会 2016b）

平成25年度調査区（遺跡のある台地の北西隅）の報告で、縄文時代中期後半の集落跡のほか、当該期では、後期末～晩期前半の墓域、晩期後半の盛土遺構が検出されている。これまでと同様、縄文時代後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期後葉（大洞A1式）の土器が掲載されているが、大洞A1式が最も多く、後期末～晩期初頭、大洞C1式は少なく、大洞BC2式、C2式は比較的多いといえようか。聖山式が出土している。出土量も比較的小さいせいか、土・石製品の出土も少ない。

6点出土した土偶は、3点以上が大洞A1式期であり、表4823は、「刺突文土偶」とされているが結髪土偶である。大洞BC2式期の大型遮光器土偶の破片が点在して出土している。岩版1点（大洞A1式期）、正中線中空土版1点（瘤付土器第Ⅳ段階）、石剣類10点、円盤状石製品53点が出土した。土製花卉丸玉1点は、第Ⅲ段階か（金子 2011c）。石製玉は、配石土坑墓を中心に37点、土製丸玉が1点出土している。

図129の3は、土偶に見えないので（瘤付土器の破片？）割愛した。

・川原平(1)遺跡平場地区・クラック地区（第13表4824～4832）（青森県教育委員会 2017a）

平成25～27年度調査区のうち遺跡の中央に相当する平場地区・クラック地区の報告である（4,258㎡）。平場地区では、後期末～晩期後葉の建物跡や盛土遺構が検出された。クラック地区は、平場地区の北側に隣接し、溝状の落ち込み部分に後期後葉～晩期前葉の捨て場が形成されている。一連の報告は、出土地点・層位別に遺物を掲載し、原典である報告書としては一つの見識だとは思いますが、読みづらく探しづらいことは否めない。特に本書の場合は、遺物の種類ごとのまとめがないため、例えば円盤状石製品が何点出土したかわからないのである（表から数え上げるしかない）。異種類の遺物のセット関係が見通せていない現状では、たとえ良好な層位的出土資料であっても、まず遺物の種類ごと（土器、土製品など）に分けてから地点・層位別に並べた方が利用しやすいと考える。

掲載土器は、これまで同様後期末～晩期後葉だが、後期後葉まで廻りそうな瘤が多く貼付される土器が見える（報告書：図211の写真図版147-13）。ただし、報告書の図や写真では文様が良く見えず、中門亮太氏の編年では、5期相当資料に瘤が比較的多用される資料も含まれており、若干の懸念も残る（中門 2013：第15図1）。平場地区は、小片が主体のため不明瞭だが、大洞A1式がほとんどで、後期末～晩期初頭も非常に少ない。これに対し、クラック地区は、後期末～晩期初頭がほとんどを占め、大洞B2式も見られるが、それ以外は非常に少なく、中期後半土器も僅かに出土している。

土偶は、8点掲載され、出土土器と同じく、後期末と晩期後葉が主体を占める。報告書図157-2は、天地逆に掲載されているが、結髪土偶の胴部であろう。人面付土器は約5点、岩版は7点以上で晩期後葉が主体を占める。以下、数え間違いがあると思われるので不正確だが、石剣類約15点、円盤状石製品約174点、独鈷石3点（「青竜刀形石器」とされる写真105-7含む）、図147-1は、石冠であろうか。これを含めて石冠は2点か（図146-3）。クラック地点では、時期によるものか、土製耳飾が9点出土し、石製丸玉も2点掲載されている。

・川原平(1)遺跡東捨て場・北東捨て場（第13表4833～4869）（青森県教育委員会 2017b）

遺跡の東端に存在する、東捨て場、北東捨て場地区の報告である。報告書の写真が暗くて文様等を確認できないのが残念である。なお、写真のみ掲載の資料は、本稿の方針により割愛している。図97-13は、土偶ではなく弧状土製品（金子 2009b）なので割愛した。

掲載土器は比較的小さいが、これまでと同様、縄文時代後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期後葉（大洞A1式）の土器が見られ、大洞C1式、次いで後期末～晩期初頭が比較的多い。本報告書も出土点数が記されておらず、また写真掲載が基本のため、以下数え間違いが多いと思われる。41点？掲載された土偶は、土器の傾向をある程度は反映しているが、大洞C2式期が意外に多いようである。

人面付土器2点以上、岩版20点以上（礫石器と区別しがたいものがある）、石剣類27点、円盤状石製品多数（数百点）掲載されている。その他、約7点掲載された土製耳飾は、後期末～晩期初頭が主体だが、晩期中～後葉の蓋状系列（金子 2009a）も出土している（報告書：図98-15）。その他、「ケムシ形土製品」とされた第三段階？の弧状土製品（金子 2009b）の欠損品が1点（報告書：図97-13）、第Ⅲ段階（大洞B2～C 1 式期）（金子 2011c）の土製花卉丸玉1点（報告書：図97-8）、土製勾玉？1点、石製勾玉2点、第Ⅲ a 段階（大洞C 1 式期）？のボタン状石製品1点（報告書：図49-12）などが掲載され、漆塗櫛などが出土している。

以下、上記点数に含めなかった関連遺物。図28の写36-3の突起は、片面人面、片面獣面とあるが、理解できないので割愛した。写129-8の動物突起は、図がなく詳細不明で、また晩期ではないので割愛することにした。図34-39は土版とされているが、理解できないので割愛した。写62-4の岩版は、比較的残りの良い正中線を持つ3類のようである（赤色付着物）。報告書で「線刻礫」とされたものの多くは、線刻というより擦痕であり砥石などと考えられ、割愛した。

・川原平(1)遺跡北捨て場（第13表4870～4908）（青森県教育委員会 2017c）

遺跡北端にある北捨て場地区の報告である。掲載土器は、これまでとほぼ同じで、僅かな中期後葉があり、大洞BC2式が少なく、大洞C 2 式も少ないが、それ以外の後期末～晩期後葉は、ほぼ同じくらい出土している印象を受ける（報告書：p.34）。今回は、明確に後期後葉土器が出土している（報告書：写真108-12）。「土偶は36点が出土した」とあるが（報告書：p.51）、それ以上掲載されている。掲載土器の傾向を概ね反映している。岩版は4点以上出土している。石剣類は約38点、石冠1点、土冠1点（施文されているが、不鮮明で時期不明）掲載されている。11点出土した土製耳飾は、やはり後期末～晩期前葉が主体だが、それ以降のものも出土している（報告書：図27-45、47、50）（金子 2009a）。報告書図27-58の土製装身具は、おそらく猪牙製の組み合わせ型腕輪（金子 2016c：第3図10、11）を模倣したものと推測され、興味深い。その他、スプーン状土製品1点、円盤状石製品600点以上出土しているようである。なお、完形および接合による完形に復された石剣類について紹介されている（報告書：p.116）。

・川原平(1)遺跡西捨て場（第13表4909～5071）（青森県教育委員会 2017d）

遺跡の西端に位置する西捨て場の報告である。段丘崖に位置し、下部は湧水を伴い、有機質遺物も多量に出土し、そのせいか赤色顔料の残存も良いようである。掲載土器は、これまでと同様、僅かな中期（報告書：p.237）、後期後葉のほかは、後期末～晩期後葉だが、大洞B2～C 1 式が多く、大洞A1式は少ない。

川原平(1)遺跡の場合は、土器の出土傾向から、五月女菴遺跡と異なり、掲載資料は、明らかに該当しない資料以外、できるだけ割愛しない方針だが、図80の49は、色調も当該期の土偶と異なり赤褐色で土偶にも見えないため、割愛した。図93の210、図95の234も、観察表では土偶に分類されているが、とても土偶とは思えないので割愛した。

157点出土した土偶（「亀形土偶」除く）は、土器の出土傾向を反映し、遮光器土偶が多い。第5図6と7は、非常によく似ている。背中の方文様は異なるが、正面の装飾が酷似していることから時期が異なるとは考えにくい。出土例の少ない大洞C1式新时期以降の小型遮光器土偶である。

土面1点、人面土器1点、正中線中空土版1点？、美々4型中空動物形土製品1点？ 33点以上掲載された岩版は、土器の出土傾向と異なり5類も比較的多い。石剣類約35点、石冠2点？、独銚石2点？掲載され、円盤状石製品は約4,000点出土しているようである（報告書：p.151）。

土製耳飾りは、約30点出土し、後期末～晩期後葉まで満遍なくある。花卉丸玉は、7点掲載され

（報告書：図93-196、199、201、204～207）、第Ⅱ～Ⅲ段階に相当し（金子 2011c）、土器の出土傾向に合致する。弧型（大洞C1～C2式古期）の三角玉（金子 2011b）1点も掲載されている（報告書：図94-221）。陰刻2b類（大洞C1式新期）の鏢形土製品（金子 2011b）が1点掲載され、鏢形製品は、漆製品（報告書：写279-5）、鹿角製品（図186-11、12）も出土している。土製品の編年が当てはまるか不明だが、漆製品は張り出し形突起類（大洞BC1式期）、鹿角製品は、張り出し形突起類（大洞BC1式期）と中間類（大洞BC2式古期）の可能性がある。長菱形（大洞B2～C1式期）の菱形環状石製品（金子 2010c）1点（報告書：図145-18）、Ⅱa段階（大洞BC1式期）とⅢa段階（大洞C1式期）のボタン状石製品（金子 2010b）が掲載されている（報告書：図146-11、15）。石製玉は多く、30点以上掲載され、孔の開けられた装身具と推測される石製品も多い。その他、漆耳飾2点、漆櫛38点、漆腕輪38点出土し、骨角牙製の装身具も数点掲載されている。

以下、上記点数に含めなかった関連遺物。図132-4の岩版？、図135-2は、図ではよくわからず、写真もないようなので割愛した。図135-4～6、図136-9、図137-1、図142-6は、磨石等の礫石器との違いが不明瞭なので、図136-11は垂飾品の未成品と考えて、割愛した。図138-11も同様に、厚さも不均質で磨石等の礫石器との違いが不明瞭なので割愛した。図138-2は、写真も観察表もなく、不整形で岩版らしくないので割愛した。図138-6は、激しい擦痕が認められるが、不整形で部厚いので割愛した。図139-4は、擦痕のみの破片のため割愛した。図138-9、図140-7、8、11～13は、「岩版？」としたものとほとんど違いはないが、岩版にしては小さく（概ね5cm以下）、装身具の未成品の可能性も高いので割愛した。図141以降の該当例についても同様である。図143-4は、5cm以上あるが、円形で厚く岩版とするには違和感があるので割愛した。「写真257の人の身体、横顔、足、二枚貝などを模したもの」（報告書：p.151）は、写真を見る限り、「そのようにも見える」域を超えないので割愛した。図94-223、224は、「土版」とされているが理解できないので割愛した。図95-230～234は、「亀形土偶」（土製品）とされているが、細片のため、図と写真ではよくわからず割愛した。

・川原平(4)遺跡（第13表5072～5074）（青森県教育委員会 2016）

川原平(1)遺跡の東側に隣接するB地区の報告で、この地区は、遺跡内の他の地区より高所の川原平(1)遺跡と同じ段丘面に位置し、便宜的に別の遺跡とされてはいるが（間に沢があるため？）、報告者も述べるとおり（p.195）、川原平(1)遺跡の続きであることは明白なので、本稿で扱った。縄文時代晩期の土坑墓群と土器埋設遺構群が注目されるが、縄文時代中期の集落跡も検出された。

掲載土器は、後期末は川原平(1)遺跡とあまり変わらないが、大洞B1～C2式が少なく、大洞A1式が多く、これまで見られなかった、大洞A2式～A'新式がある。土偶3点、岩版2点以上、石剣類16点、独銚石3点、円盤状石製品266点出土している。167点出土した石製玉のうち、155点が土坑から出土しており、そのうち29点がヒスイ製である。

(3)その他の遺跡

上記二遺跡以外で、本稿(6)脱稿後に報告された遺跡のうち管見にした、20点以上土偶が報告されている三遺跡とその関連遺跡（中村）のみを表入力した。

・岩手県北上市中村遺跡（第13表5075～5077）（（公財）岩手県文化振興事業団 2017）

下記、千苺遺跡と同じ自然堤防の北側に隣接し（間に小さな沢？ 現在は市道で区切られている）、同じ築堤事業により21,870㎡調査された。遺跡自体は、奈良～平安時代の集落跡（住居136）を主体とするが、他の時期でも、南側には、隣接する千苺遺跡からの続きが見られる。遺構は検出されなかったが、縄文時代中期後葉、後期前～中葉、晩期前葉？、晩期後葉～弥生時代中期の遺物が出土している。当該期掲載土器は、それほど多くないが、大洞A1～青木畑式がほとんどを占め、それ

以前（大洞C1式?）、それ以降は僅かである。

・岩手県北上市千刈遺跡（第13表5078～5113）（（公財）岩手県文化振興事業団 2016）

遺物図版131のd32、33は、後期後半の土偶と判断して割愛した。

堤防建設により27,368㎡調査され、縄文時代中期後半の集落跡（住居2）、晩期後葉～弥生時代中期の集落跡（住居4、土坑墓7）、奈良～平安時代の集落跡（住居89）、中世の居館跡などが検出された。縄文時代後期前～後葉、晩期前半の土器も、散発的に出土している。

当該期土器は、大洞A1～青木畑式がほとんどを占め、谷起島式は少なく、弥生時代中期中～後葉はさらに少なく、大洞B1、2、C1～2式は非常に少ない。

関連遺物は、動物形土製品1点、土版4点である。動物形土製品は縄文時代後期の可能性も残すが、出土土器の偏りから当該期に帰属する可能性が高い。その他、動物（クマ）形突起の可能性のあるものが3点出土しているが（報告書d51、52、56）、定かではない。

石剣類は42点出土したとされるが、図が掲載された19点を見る限り未成品や?のつくものばかりで、典型例は僅かである。長い独銚石1点が出土している。

その他、土製耳栓2点は角張っており、大洞A1式期のC2ネジ形系列と思われる（金子 2009a、2010d）。土製玉類は2点で、1点（報告書d45）が第IV段階（大洞C2～A1式期）の花弁丸玉（金子 2011c）、1点（同d46）が同時期と思われる瓢箪小玉である（金子 2006：p.29）。石製玉類10点は、弥生時代前期を中心にした時期とされ（報告書：p.413）、碧玉製管玉2点、勾玉2点、平玉6点で、滑石製が多い。その他、スプーン状土製品が3点、土製紡錘車1点出土しており、石器類では、石鏃と磨製石斧の未成品および加工具が多い。

・岩手県奥州市杉の堂遺跡（第13表5114～5137）（（公財）岩手県文化振興事業団 2020）

岩手県では古くから著名な晩期の遺跡だが、実測図を伴って報告されたことがほとんどなく、本稿でも、これまで表に出来なかった。

国道拡幅により1,160㎡調査し、縄文時代晩期、古代の集落跡が主として検出されたが、縄文時代早期、中期、弥生土器も出土している。

当該期土器は、大洞B2～BC2式、C2～A1式が多く、大洞C1、A2～A'式古期は比較的少ないが、大洞A'式新期～弥生時代中期中葉土器も出土している。

土偶は25点出土したが、第123図d18は、大洞A'式土器の脚であるため割愛した。

土版6?点、石剣類42点、石冠2?点、独銚石1点、円盤状石製品83点出土している。土坑から舟形土製品（ミニチュア土器?）が1点出土した。

・宮城県旧田尻町北小松遺跡（第13表5138～5172）（宮城県教育委員会 2021）

複雑に開析された低丘陵とそれに取り囲まれた沖積地からなり、丘陵裾を中心に遺構、遺物が発見されている。調査は圃場整備に伴い、水路、農道予定地を主体としているため、トレンチ状の調査区が長く続く形になっている。調査は継続して行われ、ここで取り上げる報告は平成22年度のもので、それ以前の報告分に関しては、本稿(6)第9表に示し、晩期後半を中心にした土偶が45点ある。なお、「土偶とその情報」研究会の宮城大会シンポジウム集成資料（1996）には、同じく晩期後半を中心にした土偶が4点掲載されている（本稿(2)）。

この調査では、晩期中葉から弥生時代前期にかけての集落跡が主として検出された。出土土器は、縄文時代早期中葉以後多時期にわたるが、後期後葉～晩期末が主で、中でも大洞A1～2式が最も多く、次いで大洞C2式である。

土偶は、掲載土器の割合に比して後期と思われるものが多い。報告書第244図1は、当該期の土偶

ではないので割愛した。動物形の付いた大洞A1式土器が注目される（第125図1）。

4. 小括

東北地方の当該期の土偶多出遺跡は、大洞C2～A1式期に多く（金子 2017）、今回取り上げた遺跡にも当てはまる。東北北部太平洋側では、これに加え大洞BC2式期にも多出遺跡がある（金子 2017）。今回取り上げた五月女菴、川原平(1)遺跡は、いずれも日本海側で、やはり当てはまらないが、土器自体も岩手県などと比べて出土量があまり多くないことに気づいた。その意味するところについては今後の検討が必要だが、いずれにしる繁栄期に土偶が多いことは確実であろう。

遺跡全体を調査した川原平(1)遺跡については、今後さまざまな検討を加えていく価値があるが、地点ごとの動向を見ても、やはり土器の出土量の多い時期の土偶が多いことは確かである。そうした点で、これまで不明だった後期末～晩期初頭の土偶様相が明らかになることがまず期待される。

次の晩期前～中葉は、やはり遮光器土偶が主体となるが、太平洋側に比べ劣品が多いのが気になる。第4図2などは、大型にも関わらず、かなり出来が悪く、まるで関東・中部地方の遮光器系土偶のよう（金子 2020）、加えて、どういう意味なのか、額に仮面を被るかのような獣面が見られる。これに比べれば第4図1は、かなりよい出来だが、それでも何となく違和感を持ち、それは製作技法に如実に現れている。大型遮光器土偶であるにも関わらず、獣面例と同じく、全身中空ではなく腕が中空になっていないのである。

次の晩期中～後葉は、より顕著に地域性が現れ、それは、より北海道に近い五月女菴遺跡に顕著である。x字形土偶に似て抽象的だが、より“ひとがた”に近い類型（表では、x字形×小型遮光器土偶を略記）がその代表である。

そのほか、川原平(1)遺跡では、表面に漆付着とされる例が注目される（第5図6、7ほか）。

千苺遺跡も、岩手県にも関わらず劣品が目立つ。優品ばかりの九年橋遺跡から北北東に約4kmしか離れていないにも関わらずである。確かに時期は九年橋遺跡より後が主体だが、大洞A1式期は重なる。通常の優品は第13表5101くらいしか見当たらず、中には大型なのに板状ものもある（第6図6）。こうした特徴は、岩手県でも最南部の旧大東町大洞地、水無遺跡に類似するが（本稿(6)第12表）、なぜそれほど南でもない千苺遺跡にそうした特徴が見られるのか分からない。ちなみに、大洞地、水無遺跡の様相は、今回取り上げた北小松遺跡にも共通するもので、東北地方の中で一般的に南に行くほど劣品の割合が多くなる。なお、青森県南部～岩手県北部を中心に、北に向かっても同様である。

杉の堂遺跡で興味深い大型遮光器土偶が見られた（第6図8）。脇の下の胴部に文様が施されておらず単純に磨かれているのである。同様の例は、岩手県岩手町高梨遺跡例にも見られる（第6図9）。うっかり、施文する前に腕を胴部に接続してしまったために、こうした取り扱いをするのだろうか。金子(2018)では、使用方法に関係し「ここを磨いて面とすることで、何かに据え付けやすくする」（p.38）のではないかと解釈してみたが、そのまま据え付ければよく、あえて磨く必要性は薄いであろう。

註

- (1)類例として、岩手県上鷹生遺跡例が挙げられ(助岩手県文化振興事業団 1997：第193図2099)、上鷹例の場合は尻上の文様から後期後葉瘤付土器第I段階の可能性がある(金子 2016b：p.2)。
- (2)図では平板に見え、文様意匠からx字形土偶への近似を看取してしまうが、写真を見るときと立体的で、上述の岩手県上鷹生遺跡例(助岩手県文化振興事業団 1997：第193図2099)に近く、立体的で丸い乳房、臍の貼付も、後期後葉の方に近い。胴部の文様意匠は、この時期それほど一般的ではないが、似たものがないわけでもない(金子 2016b：第4図6)。
- (3)屈折像B類土偶のうち、岩手県宇登遺跡例のような腕脚に文様が限定される段階に比定されるものと思われる(金子 2021)。本例は立像姿態である可能性が高いが、「屈折像B類」には元々立像姿態も併存し、このことは「屈折像B類」が後に立像が主体の結髪土偶に変化することからも裏づけられる。
- (4)円く貼付された乳房からやや離れた上方に隆帯が斜行しており(第1図12)、これは、一般的な結髪土偶の乳房表現(胸の隆帯)が重複して施されたのか、あるいは頭部の装飾なのだろうか。
- (5)総括報告書(青森県教育委員会 2017e)の「遺物接合関係」を見ると(図18)、60m以上の遠距離接合のようだが、それが同一個体と見なした破片同士なのか実際に接合しているのか読み取れない。
- (6)共存土器から後期末葉と推測されている(報告書第1分冊：p.186)。
- (7)左腕の破損部に黒色付着物(「アスファルトであろうか」)。
- (8)土坑覆土上層中心に一带で破片が出土し、報告書に詳しい記載がある(p.148、302)。
- (9)「表裏面に漆を塗布」(報告書：p.139)。肩から背中にかけて続く平行沈線。背中央円形沈線。乳房円形貼付。
- (10)正中線I字状沈線、▼(女性器)磨消縄文で魚眼状文状に三叉文を配し間に縦沈線を挟むものだが、同じ文様が背面にも見られ女性器ではないかもしれない。口横三叉文。乳房が隆帯状であることや、後頭部突起頂部に刻目列が施されることもあり、全体の印象がミミヅク土偶にやや似る。本稿第3図1。
- (11)宮城県田柄貝塚に類例がある。宮城県教育委員会(1986)の第5図15=金子(2016b)の第5図4。
- (12)「4グリッドにまたがってバラバラの状態で出土」「膝頭の上部分が欠損しているため、腕部が付着していたと考えられる(報告書：p.96)。一つのグリッドは隣接しない。背中に入組文、隙間に三叉文。焼成良好。丸顔。後頭部結髪。縄文。被熱痕あり。
- (13)「欠損部3箇所にアスファルト」と観察表にあるが、図には首しか示されていないようである。
- (14)三つの出土地点の破片が接合し、一つ隣接していないグリッドがある。
- (15)「脚部のみで閉塞された中空の作り」(報告書第2分冊：p.401)で、部位を接続する際、大型遮光器土偶のようには中空部分を連続させようとしなかったことがわかる。

参考文献

- 青森県教育委員会 2016a『川原平(1)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第564集
2016b『川原平(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第565集
2016『川原平(4)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第566集
2017a『川原平(1)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第576集
2017b『川原平(1)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第577集
2017c『川原平(1)遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第578集
2017d『川原平(1)遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第579集
2017e『川原平(1)遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第580集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『上鷹生遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第253集
(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2016『千苺遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第652集
2017『中村遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第671集
2020『杉の堂遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第716集
金子昭彦 2003「土偶はどれだけ壊れているか」『日本考古学』第15号 日本考古学会
金子昭彦 2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年」『古代』第114号 早稲田大学考古学会
金子昭彦 2006「東北地方北部における縄文晩期の『装飾品』(1)」『紀要』XXV (助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
金子昭彦 2009a「縄文晩期・東北北部の土製耳飾」『縄文時代』第20号 縄文時代文化研究会
金子昭彦 2009b「東北地方・縄文晩期における弧状土製品」『物質文化』87号 物質文化研究会
金子昭彦 2010a「東北地方・縄文晩期の土偶(1)」『紀要』XXIX (助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
金子昭彦 2010b「北日本・縄文晩期のボタン状製品」『岩手考古学』第21号 岩手考古学会
金子昭彦 2010c「東北北部・縄文晩期の菱形環状製品」『青森県考古学』第18号 青森県考古学会

第13表 多出遺跡補遺(1) (※註の内容は本文註の後に)

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					残存率	現長 cm	接合 赤	付着物 黒	つくり (製作痕)	女性	出土 位置	遺 跡 立地 評価	掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕										
4583	青	五月女苑	x字形	C2 ?		△	◎	◎	1/3	5			小型板状		集石	砂丘	掘点 III-2-1-99-16	調?円形貼付。無文? 足突起除刻 無	
4584	青	五月女苑	小遮?	C1古?			○		小片	2					集石	砂丘	掘点 III-2-1-99-16	B突起状。裁痕列	
4585	青	五月女苑	大遮?	BC2 ?			○	△	小片	2.8			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-1-205-40		
4586	青	五月女苑	大遮	C1古			△	△	小片	5.5	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-1	摩滅。部位境裁痕列。磨消縄文	
4587	青	五月女苑	大遮	C1古	△				小片	1/10	9	△	中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-2	摩滅。部位境裁痕列。磨消縄文	
4588	青	五月女苑	大遮	BC2			△	△	小片	8.5	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-3	摩滅。部位境裁痕列。腰に文様帯(ノ字文)	
4589	青	五月女苑	大遮	BC2			△		小片	5.8			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-4	摩滅。部位境裁痕列。腰に文様帯(ノ字文)	
4590	青	五月女苑	大遮	C1古	△	△			小片	7.4			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-5	摩滅。部位境裁痕列。磨消縄文	
4591	青	五月女苑	大遮	BC2 ?			△		細片	3.8			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-6	摩滅。裁痕列	
4592	青	五月女苑	大遮	BC2			△	△	小片	7.4	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-7	摩滅。部位境裁痕列	
4593	青	五月女苑	大遮	C1古??				△	小片	4			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-8		
4594	青	五月女苑	?	後後?				△	小片	8	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-9	摩滅。異形土器? 多重円文? 足無?	
4595	青	五月女苑	大遮	~C1古	△				細片	3.8			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-10	摩滅。陰帯上に刺突列	
4596	青	五月女苑	大遮	BC2			△		小片	4.4			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-11	摩滅。部位境裁痕列	
4597	青	五月女苑	大遮	BC2 ?		△			細片	5.2	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-12-12	摩滅。貫通孔。裁痕列。刺突。磨消縄文	
4598	青	五月女苑	大遮	BC2 ?	△				小片	9	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-13	摩滅。頭頂部にB突起	
4599	青	五月女苑	大遮	BC2 ?	△				小片	5.5	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-14	摩滅。後頭部剥落。裁痕列	
4600	青	五月女苑	大遮?	BC ?			?		細片	2.4			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-15	摩滅。ノ字文?	
4601	青	五月女苑	大遮	BC ?			?		小片	5	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-16	摩滅。磨消縄文	
4602	青	五月女苑	大遮	C1古?	△				細片	3 ?	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-17	摩滅。肩。陰帯上に刺突列。磨消縄文	
4603	青	五月女苑	大遮	BC2 ?				△	小片	4			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-18		
4604	青	五月女苑	大遮	~C1古				△	細片	3.5			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-19	摩滅	
4605	青	五月女苑	大遮	BC2 ?	△		△		小片	7.5	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-13-20	摩滅。陰帯上に刺突列。磨消縄文	
4606	青	五月女苑	x字形	C2中?		◎	◎	◎	2/5	3.8	無		小型板状		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-21	足に除刻無。正中線(沈線)系列?	
4607	青	五月女苑	x字×小遮	C2 II ?	◎	◎	◎	◎	略完	11.7	△	割口	小型板状		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-22	右乳房アスファルト。正中線雲形文	
4608	青	五月女苑	x字形	C2中?	◎	◎	◎	◎	4/5	8.8		割口	小型板状		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-23	右胸にアスファルト。無文。正中線系列?	
4609	青	五月女苑	x字×小遮	C2 III ?	◎	◎	◎	◎	3/10	5.7	△		小型板状		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-24	眼沈線。正中線刺痕列。雲形文?	
4610	青	五月女苑	x字×小遮	C2 II ?	△	○	○		1/5	6.6	△		小型板状?		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-25	摩滅。片面剥落。雲形文	
4611	青	五月女苑	結髪	A1	◎	◎	◎		3/10	8			股刺突		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-26	乳~肩陰帯上工字系三角文。パンツ縄文	
4612	青	五月女苑	結髪	A1	◎	◎	◎		1/5	6.7	△		股刺突		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-28	乳房丸。胸に逆三角沈線文。肩沈線	
4613	青	五月女苑	x字形	C2中?	◎	◎	◎	◎	5/6	6.2	△		小型板状		集石	砂丘	掘点 III-2-4-14-29	縁取文系列(多重線)。正中刺痕列	
4614	青	五月女苑	結髪?	A2 ?			△		小片	4.8					集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-30	二重沈線? 刺突充填	
4615	青	五月女苑	大遮系統	A1	○	○	○	○	1/5	6.8	△	割口	中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-31	摩滅。頭頂と胸にアスファルト。口三叉文	
4616	青	五月女苑	大遮系統	A1		△		○	1/10	5			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-32	肩に工字文。指先刻目列	
4617	青	五月女苑	大遮系統?	A1		△			小片	2.4					集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-33	工字文・刺突多。乳房?	
4618	青	五月女苑	大遮系統?	C2中?	○				小片	5.3					集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-35	目刺痕列。三口状	
4619	青	五月女苑	後期以来	B1 ?	○				1/8?	5.4			深い刺突		集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-36	頭頂と耳に刺突。齧面。弧状眉刻目列	
4620	青	五月女苑	?	B1?A1?	○	△			不明	9	△		中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-37	口貫通孔。頬にI字状文。胸刺突多。摩滅	
4621	青	五月女苑	小遮???	C1 ?	○				小片	3.4	△		頭頂刺突		集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-38	遮光器眼?? 刺突多。摩滅	
4622	青	五月女苑	大遮系統	A1 ?	○				小片	2.8			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-15-39	鼻貼付。口沈線刺突列。後頭平行線	
4623	青	五月女苑	結髪??	後葉?			部位不明		小片	3.4			表裏刺突		集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-40	後期中葉土偶の肩? 摩滅	
4624	青	五月女苑	後期以来	後後?	○				1/3?	9.8			摩滅		集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-41	平行線による。首下弧線。背中入組文	
4625	青	五月女苑	屈折像B	C2中		○	○	△	1/5	6.6				◎	集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-42	パンツ。正中線刺痕列。縄文	
4626	青	五月女苑	結髪	A1	?				細片	2.2			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-43	「胸」。結髪? 工字文	
4627	青	五月女苑	小遮?	C1古?			○		小片	4.5			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-44	部位境沈線間に弧状の沈線。手陰刻無	
4628	青	五月女苑	後期以来?	後後?		○	○	○	不明	13.5	△		輪積中空	バ?	集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-45	全体摩滅	
4629	青	五月女苑	?	A1 ?	○				不明	6	△				集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-46	土版型土面顔。目刺痕列。頬工字陰刻	
4630	青	五月女苑	?	C2 ?	○				不明	5					集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-47	全体摩滅。眉鼻口連結陰帯。目貼付	
4631	青	五月女苑	大逆出模倣	~A1	○				1/7	7.8					集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-48	三つ口状。後頭部工字状除刻	
4632	青	五月女苑	小遮	C1古?	○	○	◎	◎	2/3	12.8	△			線	集石	砂丘	掘点 III-2-4-16-49	大遮模倣。正中陰帯。手B突起。裁痕列	
4633	青	五月女苑	後期以来	B1 ?	○				不明	5.5					集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-50	後頭部両耳深い刺突。齧面。	
4634	青	五月女苑	小遮?	C1古?	△				細片	6.4	△				集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-51	顔割離? 頭頂。耳B突起	
4635	青	五月女苑	大遮系統	C2 V ?			○		小片	3.6			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-52	磨消縄文(横位連続)	
4636	青	五月女苑	??	C2古?			△		小片	3.8					集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-53	部位不明。全体摩滅。C字入組文	
4637	青	五月女苑	大遮系統	A1	△		○		小片	5			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-54	全体摩滅。入組工字文。指先刻目列	
4638	青	五月女苑	註3	C2 II ?			△		不明	9.5			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-55	全体摩滅。下と同一? 脚下半C字入組文?	
4639	青	五月女苑	註3	C2 II ?			△		不明	3.8					集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-56	全体摩滅。4638と同一? 脚下半入組文	
4640	青	五月女苑	屈折像A?	後後?			△		不明	4.7			空洞あり		集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-57	膝縄文帯。爪先刻目列	
4641	青	五月女苑	大遮??	B2??		△	○		不明	5.5			中空	バ?	集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-58	足へら形。パンツ区画?	
4642	青	五月女苑	刺突文祖形?	不明		?			小片	5.5			中空		集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-59	刺突文多	
4643	青	五月女苑	大遮系統?	C2中~				△	小片	1.3			足中実		集石	砂丘	掘点 III-2-4-17-60	足角張った小判形?	
4644	青	五月女苑	大遮	BC1 ?		△			小片	6.6			中空		1集	砂丘	掘点 III-3-1-65-7	磨消縄文(方形)。裁痕列無。手陰刻少	
4645	青	五月女苑	後期以来?	後末?	○	○			不明	4				線	1集	砂丘	掘点 III-3-1-65-8	正中Y字沈線。耳貫通孔。頭頂目短沈線	
4646	青	五月女苑	x字形?	C2後半?			○		小片	1.5			小型板状		1集	砂丘	掘点 III-3-1-65-9	全体に摩滅。直線的。手B突起除刻無	
4647	青	五月女苑	大遮?	BC1 ?	△				小片	3.3			中空		2西	砂丘	掘点 III-3-2-17-1	頭頂開口? 頭頂B突起刻目列	
4648	青	五月女苑	大遮祖形?	B2古?	△	◎			不明	8			頭空洞		2東	砂丘	掘点 III-3-2-35-1	★体内管状隙間。背中6字?方形文	
4649	青	五月女苑	x字×小遮	C2後半?	△	◎	◎	◎	4/5	7	△		小型板状	◎	3東	砂丘	掘点 III-3-3-15-1	縁取文系。長身。正中刺痕列。▼刺突?	
4650	青	五月女苑	小型無文	不明	◎	◎	◎	◎	不明	3.9					3集	砂丘	掘点 III-3-3-16-2	いかり肩。後期?	
4651	青	五月女苑	結髪?	A1 ?		△	△		小片	3.8	△		中空		3集	砂丘	掘点 III-3-3-16-3	腰部に多重線。大遮系統?	
4652	青	五月女苑	小遮??	C1??			△		小片	3			中空		4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-1	粗雑。ケズリ調整	
4653	青	五月女苑	小遮??	C1新?			○		小片	3					4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-2	裁痕列無。指先刻目列	
4654	青	五月女苑	大遮系統	A1			○		小片	3			中空		4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-4	「胸」。肩に多重線	
4655	青	五月女苑	大遮系統?	A1		△			細片	2			中空		4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-5	刺突文祖形? 「腰」。首下陰帯上工字文	
4656	青	五月女苑	大遮系統?	A1		△	△	△	1/7	8	△	割口	中空		4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-6	結髪土偶? 付着部? 工字文系入組文	
4657	青	五月女苑	小遮??	~C1?	○	◎	◎	◎	不明	9	△		腹		4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-7	粗雑。乳腹突出。頭頂B突起	
4658	青	五月女苑	小型無文?	不明		△	○	○	不明	10	△	?			4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-8	後期? 大きく剥離	
4659	青	五月女苑	結髪	A1	◎	△	△		1/6	4.5					4集	砂丘	掘点 III-3-4-38-9	胸V沈線。背中心工字文。乳丸貼付	
4660	青	五月女苑	大遮系統?	A1 ?		△			細片	1.8					5集	砂丘	掘点 III-3-5-8-1	「腰」。工字文。縄文	
4661	青	五月女苑	大遮系統?	不明		部位不明			細片	2.8			中空		5集	砂丘	掘点 III-3-5-8-2	大遮? 全体摩滅。沈線文	
4662	青	五月女苑	大遮系統?	~A1			△		細片	1.3			足中実		5集	砂丘	掘点 III-3-5-8-3	足楕円形	
4663	青	五月女苑	大遮系統	A1 ?		△			小片	2.8					5集	砂丘	掘点 III-3-5-8-4	肩平行線	

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					残存率	現長 cm	接合 赤	付着物 黒	つくり (製作痕)	女性	出土 位置	遺跡 立地	遺跡 評価	掲載箇所	備考
					頭	胸	腰	腕	脚											
4664	青	五月女苑	刺突文祖形?	不明					小片	4.5			中空		5集	砂丘	拠点	Ⅲ-3-5-8-5	結髪土偶? 背中? 刺突文	
4665	青	五月女苑	大遮	~C1古	部				細片	4			中空		5集	砂丘	拠点	Ⅲ-3-5-8-6	BC2~。全体摩滅。肩2条陰帯刺突列	
4666	青	五月女苑	結髪??	A1??					細片	2.7			中空		5集	砂丘	拠点	Ⅲ-3-5-8-7	「大遮」。腰? 刺突文?	
4667	青	五月女苑	大遮系統?	A1??					細片	3.4			中空		5集	砂丘	拠点	Ⅲ-3-5-8-8	結髪土偶? 全体に摩滅。陰帯に刺突列	
4668	青	五月女苑	屈折像B?	C2?					小片	5.5					5集	砂丘	拠点	Ⅲ-3-5-8-9	全体に摩滅。ふくらはぎ突出。足へラ形	
4669	青	五月女苑	x字形	C2前半	◎	◎	◎	◎	略完	5			小型板状	線	6西	砂丘	拠点	Ⅲ-3-6-7-1	正中線系列。正中刺裂列。脚大きく開く	
4670	青	五月女苑	刺突文祖形	A1?					1/5	2.4	△	?	中空	線	6東	砂丘	拠点	Ⅲ-3-6-34-2	腰縄文地工字文。胴表刺突多。正文文様	
4671	青	五月女苑	結髪??	A1??					細片	3			中空?			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-1	全体に摩滅。刺突文	
4672	青	五月女苑	刺突文祖形?	A1?		△			不明	3.6						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-2	全体に摩滅。肩パット状陰帯に多重線	
4673	青	五月女苑	小遮??	不明					小片	2.3						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-3	粗雑。肩との境? に沈線	
4674	青	五月女苑	小遮	BC2?					小片	2.6			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-4	全体に摩滅	
4675	青	五月女苑	結髪??	A1??					細片	1.8			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-6	刺突多	
4676	青	五月女苑	大遮	C1古		△			1/10	6	△		中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-7	全体に摩滅。腕垂直垂下。磨消縄文	
4677	青	五月女苑	x字変形	C2?		◎	◎	◎	5/9	8.8			小型板状	◎		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-8	▼B突起。正中刺裂列。側面沈線刺裂列	
4678	青	五月女苑	x字形	C2?		△			1/3	3.8			小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-9	縁取文系列。表裏側面沈線。陰刺無	
4679	青	五月女苑	屈折像B?	C2?					1/6	6.6		割口	中隙間?	◎		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-10	▼線パツ。背中黒付。縄文。★虎穴	
4680	青	五月女苑	屈折像B?	C2?					小片	5.2	△					砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-13	膝に円文。ミガキ光沢。1172 類例	
4681	青	五月女苑	大遮	C1古?	△				小片	3.6	△		中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-15	全体摩滅。耳突起	
4682	青	五月女苑	x字変形?	C2?	◎	◎	◎	◎	完形	5.7			胴横貫通			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-16	貼付多立体的。肛門孔。装身具? 63 g	
4683	青	五月女苑	大遮系統	C2中~					小片	2.6	△		中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-17	脚太い。爪先刺目列	
4684	青	五月女苑	小遮系統?	A1?					不明	5						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-1-19	腰に渦巻文。大遮系統??	
4685	青	五月女苑	x字形	C2?	◎	◎	◎	◎	5/9	5.4	△		小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-20	正中線系列。正中刺目列。腕水平	
4686	青	五月女苑	結髪?	A1?					1/7	3.5				バ?		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-21	腰脇に多重文。縄文	
4687	青	五月女苑	?	不明					不明	2.5						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-22	結髪変形?? 台状脚無文 土偶?	
4688	青	五月女苑	?	不明					不明	2.5						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-23	小遮系統C2? 後期? 多重線。端凹	
4689	青	五月女苑	屈折像B?	C2?					小片	11.2		割口				砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-24	脚黒付。胎土粗。ふくらはぎ表現。無文	
4690	青	五月女苑	大遮	C1古		△			1/10	9.1	△		割口	中空		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-25	腕垂直。肩黒付。磨消縄文。黒色研磨	
4691	青	五月女苑	大遮	BC1?		△			1/9	7.4			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-26	大遮もどき? 肩水平。磨消縄文。手B突起	
4692	青	五月女苑	大遮	C1古?					細片	4.2	△		中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-27	岡天地逆。全体摩滅。部位境裁列無文。鼻? 乳貼付。四肢陰刺無。20 g	
4693	青	五月女苑	x字形	C2?	◎	◎	◎	◎	完形	5			小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-28		
4694	青	五月女苑	大遮系統	A1?					小片	2			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-29	全体摩滅。「肩」。沈線文	
4695	青	五月女苑	小遮異形	~C1古	◎	◎	◎	◎	7/9	11.4	△		頭頂凹。→	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-30	★口~後頭貫通孔。正中沈線。蔓状文	
4696	青	五月女苑	屈折像B	C2?		◎	◎	◎	3/10	5.2			立像姿態?	●		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-31	乳大。正中刺裂列。パンツ。縦に欠損	
4697	青	五月女苑	?	不明					不明	2.3						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-32		
4698	青	五月女苑	?	不明					不明	2.2						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-2-33	「腕」	
4699	青	五月女苑	大遮	~BC2	△				小片	5.2			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-36	摩滅。後頭部。裁裂列。縄文地蛇行沈線	
4700	青	五月女苑	大遮	~C1古		△			細片	4			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-37	下腹左。渦巻裁裂列	
4701	青	五月女苑	大遮系統	A1?					1/8	3.8	△	割口	中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-38	股下貫通孔? 縄文地工字文	
4702	青	五月女苑	大遮系統	A1					小片	3.5	△		中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-39	「肩」。工字文	
4703	青	五月女苑	x字×小遮	~A1?	◎				1/8	5			板状?			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-40	頭頂、後頭、耳に突起。4724 類例?	
4704	青	五月女苑	大遮系統	A1?	△				小片	3.1						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-41	頭頂突起。黒色研磨。九年橋遺跡に類例	
4705	青	五月女苑	x字形	C2?					小片	2			小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-42	「頭」。無文陰刺無	
4706	青	五月女苑	結髪?	A1?					不明	8.2	△			◎		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-44	正中沈線。パンツ。縄文。註4	
4707	青	五月女苑	小型無文	不明	◎	◎	◎	◎	完形	1						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-45		
4708	青	五月女苑	屈折像B?	C2?					1/7	2.8						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-46	岡天地逆。パンツ内縄文	
4709	青	五月女苑	大遮系統	A1?	△				小片	3						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-48	頭頂突起。九年橋遺跡に類例	
4710	青	五月女苑	x字形?	C2?					小片	2.8			小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-49	「頭」。片面摩滅	
4711	青	五月女苑	大遮系統?	~A1					不明	7						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-50	全体摩滅。弧状眉に鼻連結。側頭突起列	
4712	青	五月女苑	後期以来	~後末	◎				2/7	5.8			板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-52	全体摩滅。正中刺裂列。首下三文。	
4713	青	五月女苑	後期以来	後末前後					小片	4.6						砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-55	膝頭表現。爪先短沈線列	
4714	青	五月女苑	屈折像B	C2?		◎	◎	◎	1/10	10.4			肛門深穿孔	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-56	全体剥離摩滅。正中刺裂列	
4715	青	五月女苑	小遮系統?	C2?	◎	◎	◎	◎	不明	4.2			★乳房連結	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-57	裏摩滅。正中刺裂列。胴部全体文様	
4716	青	五月女苑	刺突文祖形?	A1?					細片	3.8			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-58	結髪土偶? 貫通孔。刺突	
4717	青	五月女苑	結髪?	A1?					小片	4			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-59	二条沈線。刺突多	
4718	青	五月女苑	屈折像B	C2					1/8	4.8				◎		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-3-60	全体摩滅。正中刺裂列。パンツ。縄文	
4719	青	五月女苑	大遮	B2?	△				小片	5	◎		中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-66	黒色研磨。弧状眉。口貫通孔。頸弧線	
4720	青	五月女苑	大遮	BC2		△			小片	3.8			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-67	胸▼陰帯刺突列。山字文。縄文	
4721	青	五月女苑	大遮??	~C1古					細片	1.5			中空			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-68	二条陰帯上に刺突列	
4722	青	五月女苑	大遮	BC1?	△	◎			1/9	6.4			中空製作痕			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-69	乳小さめ裁裂列無。磨消縄文(方形)	
4723	青	五月女苑	x字×小遮	C2	◎	◎	◎	◎	不明	9			板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-71	正中刺裂列。頭頂凹。胴部縄文地文様	
4724	青	五月女苑	x字形	C2	◎	◎	◎	◎	4/5	11.5	△	◎	小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-72	正中線系列。正中刺裂列。頭複雑突起	
4725	青	五月女苑	x字変形	C2?	◎	◎	◎	◎	一欠	5.6	△		小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-73	腕水平。胸縁帯縄文	
4726	青	五月女苑	x字形	C2?		◎	◎	◎	3/5	12.2			小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-74	正中線系列。正中刺裂列。脚水平	
4727	青	五月女苑	小型無文	C2?	△	◎	◎	◎	不明	7	△		小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-75	四肢B突起(X字形と同じ)	
4728	青	五月女苑	x字形	C2?		△			1/2	5.4			小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-76	岡天地逆。正中線系列。正中刺裂列	
4729	青	五月女苑	x字形	C2?		◎	◎	◎	1/3	5			小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-77	正中刺裂列	
4730	青	五月女苑	小型無文	不明	△	◎	◎	◎	不明	6.4	△		小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-78	正中沈線。四肢突起状でない	
4731	青	五月女苑	x字形	C2?		△	◎	◎	2/3	4.2			小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-79	正中線系列? 正中刺裂列。全体摩滅	
4732	青	五月女苑	x字形	C2?	△	◎	◎	◎	5/6	2.8			小型板状	線		砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-80	正中線系列? 正中刺裂列。側縁沈線	
4733	青	五月女苑	x字形	C2?	◎	◎	◎	◎	一欠	5			小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-81	正中線系列? 無文	
4734	青	五月女苑	x字形	C2?	◎	◎	◎	◎	略完	4.4			小型板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-82	正中線系列? 無文	
4735	青	五月女苑	x字×小遮?	C2?	◎				不明	4.2			板状			砂丘	拠点	Ⅲ-4-4-4-83	四面B突起貫く沈線	
4736	青	五月女苑	小型無文	不明	◎	◎			不明	3.2		</								

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					現長 cm	接合 赤黒	付着物 黒	つくり (製作痕)	女性	出土 位置	遺跡 所在地	掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腕	脚									
4745	青	五月女苑	屈折像B?	C2?	△					小片	4						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-93	首輪状に隆帯刻目列。類似1185、3305
4746	青	五月女苑	?	?	○					不明	2.4						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-94	鼻の位置→大遺系統? 粗雑。鼻貼付
4747	青	五月女苑	大遺系統	A1	○					1/9	6.2				胴中空?		砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-95	全体摩滅。角状突起に多重線
4748	青	五月女苑	小遺	C1古?	◎	◎	◎	◎	◎	7/10	6.4		割口				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-97	胴長系列。首に黒付。文様多。腰突出
4749	青	五月女苑	小遺?	C1古?	○					1/8	3.6		割口				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-98	腕首に黒付。黒色研磨。背中入組文
4750	青	五月女苑	後期以来	～後末?	△	○	△	△	△	3/10	2.5						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-99	vネック系列。背中入組文?
4751	青	五月女苑	屈折像B	C2中?	○	◎	◎	◎	◎	1/4	7.6						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-101	正中刺痕、パンツ内縄文。▼線。屈曲弱
4752	青	五月女苑	小型無文?	不明	○	◎	◎	◎	◎	不明	5.2						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-102	全体摩滅激しい。乳房円形貼付
4753	青	五月女苑	?	不明	?	?				不明	5.5						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-103	図天地逆? 腰? B突起・水平沈線
4754	青	五月女苑	大遺系統?	A1?		○	△			小片	4.2		中空		線		砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-104	結髪土偶?正中線隆帯刻目列。黒色研磨
4755	青	五月女苑	結髪?	A1?			△			小片	3.8	△					砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-105	大遺系統? 「肩」。多重線
4756	青	五月女苑	結髪?	A1?			△			小片	2.8		中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-106	結髪土偶? 「肩」。入組多重線
4757	青	五月女苑	結髪	A1		○		○		1/10	4						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-107	肩刻目陰帯一周背巾。肩直角
4758	青	五月女苑	大遺系統?	～A1			○			小片	4.3						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-108	腕に縄文隆帯。腕に沈線B突起
4759	青	五月女苑	大遺系統?	A1		△				小片	3.7						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-109	肩に多重線
4760	青	五月女苑	大遺系統?	A1?	?		?			小片	5.4		中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-110	図天地逆? 「腰」。刻目隆帯2、多重線
4761	青	五月女苑	肩パット	A1		△		○		不明	4.5		輪積中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-111	工字文
4762	青	五月女苑	刺突文祖形	A1?		○	○			1/2	9.6	△	胸腹中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-112	肩瘤・隆帯。背工字文。刺突多
4763	青	五月女苑	刺突文祖形	A1?		○				小片	5	△	中空		線		砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-5-113	正中Y字沈線。背中刺突帯の連続
4764	青	五月女苑	結髪??	A1??		△		○		小片	1.1						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-114	肩に多重弧線
4765	青	五月女苑	?	後期?			△			小片	1.5						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-115	指表現?
4766	青	五月女苑	?	後期?				○		不明	2.3						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-116	
4767	青	五月女苑	屈折像A?	後期?			△			不明	3.6		割口				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-117	爪先刻目列。脚に黒付。粗雑
4768	青	五月女苑	小遺	～C1古			△			1/8	4.2		中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-120	横模B突起。葦状文
4769	青	五月女苑	屈折像A?	後期?			△			不明	4						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-121	全体に摩滅
4770	青	五月女苑	屈折像A?	後期?			△			不明	2.4						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-122	4767類似。爪先刻目列
4771	青	五月女苑	?	後期?			△			小片	1.4						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-123	爪先刻目列
4772	青	五月女苑	?	後期?			△			不明	4.4						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-124	足首に向かってすぼまる
4773	青	五月女苑	?	後期?			◎			不明	2			横位貫通孔			砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-125	爪先刻目列。土偶でない?
4774	青	五月女苑	屈折像?	不明			△			細片	2.2						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-126	足首屈折
4775	青	五月女苑	?	後期?			△			小片	3						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-128	膝頭表現。爪先刻目列
4776	青	五月女苑	小遺?	～C1古			△			小片	3		中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-129	底面が窪む
4777	青	五月女苑	大遺系統A	A1?			△			1/7	5		中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-130	足三角形
4778	青	五月女苑	小遺?	～C1古			△			小片	3.2		中空				砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-132	全体に摩滅
4779	青	五月女苑	小遺?	～C1古			△			1/8	3.5						砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-136	爪先刻目列。腰沈線文
4780	青	五月女苑	結髪?	A1?			△			小片	2.2			足中実			砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-137	
4781	青	五月女苑	結髪?	A1?			△			小片	1.8			足中実?			砂丘 拠点 Ⅲ -4-4-6-138	爪先刻目列(刻目6)
4782	青	五月女苑	刺突文祖?	～A2?			△	◎	◎	2/5	6.2						砂丘 拠点 21→Ⅲ -2-13-1	腹片面刺突多。腰平線。腰横突出
4783	青	五月女苑	刺突文祖?	後～末	△					小片	2.3						砂丘 拠点 21→Ⅲ -2-13-4	図天地逆?頭頂突起。多重短沈線。縄文
4784	青	五月女苑	?	不明	?					細片	2						砂丘 拠点 21→Ⅲ -2-13-5	晩期後半後頭部裝飾突起片。沈線
4785	青	五月女苑	結髪	A1?	○					1/7	7			胴中空			砂丘 拠点 21→Ⅲ -2-64-1	★結髪貫通孔。結髪工字文? 眉鼻丁
4786	青	五月女苑	小遺系統?	A1?	◎					不明	3.6			「中空」			砂丘 拠点 21→Ⅲ -2-64-2	後頭部下山字貼付上刻目列。眉鼻丁
4787	青	五月女苑	?	A1??			?			不明	2.3			「中空」			砂丘 拠点 21→Ⅲ -2-64-3	「下腹」。結髪土偶? 工字文? 穿孔
4788	青	川原平(1)	大遺祖型?	B1?	△					細片	2.6			中空			段丘 拠点 県教16a→182-1	目粘土粒小に沈線。眉弧状隆帯
4789	青	川原平(1)	大遺祖型?	B1?	△					細片	3			中空			段丘 拠点 県教16a→182-2	目粘土粒小に沈線。鼻?隆帯刻目列
4790	青	川原平(1)	大遺	C1古?	△					細片	4.3			中空			段丘 拠点 県教16a→182-3	右目
4791	青	川原平(1)	大遺系統?	C2新～	△					細片	1.6						段丘 拠点 県教16a→182-4	「角状突起」。短沈線の文様
4792	青	川原平(1)	大遺系統	第V?	○	◎				3/10	8.7		中空				段丘 拠点 県教16a→182-5	工字文系三叉文。磨消縄文。後頭貫通孔
4793	青	川原平(1)	小遺?	BC2?	△					細片	4.6		○	中空			段丘 拠点 県教16a→182-6	頭頂扇状突起。後頭部残痕
4794	青	川原平(1)	大遺系統?	A1?	△					細片	2						段丘 拠点 県教16a→182-7	顔の縁? 顔の縁隆帯区画刻目列
4795	青	川原平(1)	???	C2～?	△					細片	1.8			中空			段丘 拠点 県教16a→182-8	「口」。摩耗。目の可能性も?
4796	青	川原平(1)	大遺祖型?	B1?	△	○	○	○		2/5	15.5	△		中空		バ	段丘 拠点 県教16a→183-1	背中入組帯状文ほか文様。頬平行線
4797	青	川原平(1)	大遺?	BC1?	△					小片	5.3			中空			段丘 拠点 県教16a→183-2	首下円形突起。磨消縄文。断続沈線
4798	青	川原平(1)	大遺?	BC1～2	△					小片	5			中空			段丘 拠点 県教16a→183-3	脚細い。つま先刻目列
4799	青	川原平(1)	大遺系統	A1?	△					小片	3.4			胴中空			段丘 拠点 県教16a→183-4	右肩。入組沈線文
4800	青	川原平(1)	屈折像A?	後末?			○			不明	8.3		中空			▼	段丘 拠点 県教16a→184-1	▼下面貫通孔。紅門表現も? 縄文
4801	青	川原平(1)	大遺??	不明			?			小片	4			輪積中空			段丘 拠点 県教16a→184-2	「土偶の部品」。写真無。磨消縄文
4802	青	川原平(1)	大遺??	不明			?			小片	3.8			輪積中空			段丘 拠点 県教16a→184-3	「土偶の部品」。写真無。首下?
4803	青	川原平(1)	大遺??	BC1～2	△					小片	3.3			輪積中空			段丘 拠点 県教16a→184-4	「土偶の部品」。写真無。後頭部?
4804	青	川原平(1)	大遺??	不明			?			小片	2.4			中空			段丘 拠点 県教16a→184-7	「土偶の部品」。写真無。肩?
4805	青	川原平(1)	大遺??	不明			?			細片	2.4			中空			段丘 拠点 県教16a→184-8	「土偶の部品」。写真無。縄文。背面?
4806	青	川原平(1)	屈折像A?	縮IV	○					小片	8.8	△	○				段丘 拠点 県教16a→185-1	下と同一個体。結髪。耳貫通孔。縄文。註5
4807	青	川原平(1)	?	?						1/4	8.3	△	◎				段丘 拠点 県教16a→185-2	上と同一。背入組文。区画線三叉文。註5
4808	青	川原平(1)	屈折像A?	縮IV						小片	8.5						段丘 拠点 県教16a→185-3	「185-1、2と同一?」。肘隆帯縄文
4809	青	川原平(1)	後期以来?	後末?			○			小片	9						段丘 拠点 県教16a→186-1	「185-1.2と同一?」?? 肩縄文
4810	青	川原平(1)	屈折像A?	B1?	○					小片	8.5			首中空			段丘 拠点 県教16a→186-2	★口貫通。結髪。縄文。眉目近接。註6
4811	青	川原平(1)	後期以来?	後後?						小片	7						段丘 拠点 県教16a→186-3	「腕?」。短沈線多。縄文。臍貼付?
4812	青	川原平(1)	後期以来?	後末?	◎	◎	◎	◎		不明	6.7						段丘 拠点 県教16a→187-1	背中屈曲強い入組文。口両端△文
4813	青	川原平(1)	後期以来?	後後?	○	○				3/8	9		○	割口			段丘 拠点 県教16a→187-2	乳下垂れ下がる。正中線刻目。註7
4814	青	川原平(1)	屈折像A?	後期	△	◎	◎	◎		不明	6.8			体貫通孔			段丘 拠点 県教16a→187-3	乳大。▼沈線。パンツ。縄文。文様
4815	青	川原平(1)	後期以来?	後後?						不明	4.6						段丘 拠点 県教16a→188-2	「頭髪」。磨消縄文
4816	青	川原平(1)	後期以来?	後後?						細片	1.6						段丘 拠点 県教16a→188-3	「頭髪」。肩? 縄文
4817	青	川原平(1)	後期以来?	後末?						小片	4						段丘 拠点 県教16a→188-6	「肩部」。腕か脚? 刻目列。縄文
4818	青	川原平(1)	大遺	BC2	○	○	○	○	○	1/2	33	★	○				段丘 拠点 県教16b→92.93	背中方形文。20m程度接合→註8
4819	青	川原平(1)	?	後期?	◎	◎	◎	◎	◎	9/10	5.4			口尻貫通		線		

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					残存率	現長 cm	接 合	付属物 赤黒	つくり (製作痕)	女性	出土 位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腰	腕	脚								立地	評価		
4826	青	川原平(1)	大遮系統?	A1?					1/6	6.2		割口				段丘	掘点	県教17a→157-1	結髪土偶? 腰・足黒付。磨消縄文地沈線	
4827	青	川原平(1)	結髪	A2??					1/5	4.6			中空	◎		段丘	掘点	県教17a→157-2	図天地逆。正中6字文。パンツ内条線	
4828	青	川原平(1)	x字形	C2?	○	◎	◎	◎	9/10	5.5	漆		小型板状			段丘	掘点	県教17a→157-3	陰刻文系列? 帯状文? 粗雑沈線	
4829	青	川原平(1)	後期以来?	後期?					不明	4.7						段丘	掘点	県教17a→157-4	図天地逆? 腰? 表裏縄文パンツ?	
4830	青	川原平(1)	?	不明					小片	2						段丘	掘点	県教17a→157-5	写真無。脚と足の境沈線。小遮??	
4831	青	川原平(1)	後期以来	瘤IV?	◎	◎	◎	◎	一欠	21.2	△	割口		◎	クラック	段丘	掘点	県教17a→215-1	首脚黒付→★接合復元。磨消縄文。註10	
4832	青	川原平(1)	小遮?	~C1?	△	○	△	○	不明	4.1					クラック	段丘	掘点	県教17a→215-2	頭欠損? 首裁痕列。手B突起。沈線文	
4833	青	川原平(1)	大遮	BC2?	○	◎	◎	◎	3/5	11.2			腕中実			東捨	掘点	県教17b→31-1	★尻貫通孔。磨消縄文(山字)。背中二段?	
4834	青	川原平(1)	後期以来?	~B2	○				不明	5.2	○	割口	首管孔		東捨	段丘	掘点	県教17b→31-2	首黒付。眉弧状。側頭~後頭突起列	
4835	青	川原平(1)	大遮	~BC2	△				小片	6.3			中空		東捨	段丘	掘点	県教17b→31-3	下と同一個体? 首点列? 後頭縄文	
4836	青	川原平(1)	大遮	~BC2	△				小片	3.8			中空		東捨	段丘	掘点	県教17b→31-4	上と同一個体?	
4837	青	川原平(1)	小遮??	C1?	○	◎	◎	◎	2/3	6.7	△			◎	東捨	段丘	掘点	県教17b→31-5	正中線パンツ。屈折腰B類相形?	
4838	青	川原平(1)	後期以来?	~B1?	部	位	不	明	小片	8			輪積中空		東捨	段丘	掘点	県教17b→31-6	写真無。胴? 縄文地沈線文。裏面凹凸	
4839	青	川原平(1)	後期以来?	後期?	?				小片	2					東捨	段丘	掘点	県教17b→31-7	「肩」	
4840	青	川原平(1)	後期以来?	後期?		◎	◎	△	不明	3	○				線	東捨	段丘	掘点	県教17b→31-8	正中隆帯。腰隆帯
4841	青	川原平(1)	?	不明	部	位	不	明	小片	3.6			中空		東捨	段丘	掘点	県教17b→31-9	「胸」。貼付。二重弧線	
4842	青	川原平(1)	後期以来?	後期?					小片	2.2					東捨	段丘	掘点	県教17b→32-10	小型無文土偶?	
4843	青	川原平(1)	後期以来?	後期?	部	位	不	明	小片	3.3					東捨	段丘	掘点	県教17b→32-11	「腰部」。縄文地多重線	
4844	青	川原平(1)	屈折像A?	後期?	?				小片	8.8			輪積中空		東捨	段丘	掘点	県教17b→32-12	「推定40cm」。縄文地沈線文。乳剥落?	
4845	青	川原平(1)	x字×小遮	C2?	○	◎	◎	△	7/10	6.3					東捨	段丘	掘点	県教17b→32-13	表裏対向△掘去。腰B突起。「精製」	
4846	青	川原平(1)	小遮??	BC?	△				小片	4.4					東捨	段丘	掘点	県教17b→32-14	後期以来? 菱状文	
4847	青	川原平(1)	後期以来	後期?	◎	○	△	△	不明	5.3					東捨	段丘	掘点	県教17b→32-15	羊角状耳。弧状眉貼付。無文?	
4848	青	川原平(1)	後期以来?	後期?		○	○	△	不明	3.4			肛門管孔		東捨	段丘	掘点	県教17b→32-16	がに股。無文?	
4849	青	川原平(1)	後期以来	B1?	部	位	不	明	不明	4.7					東捨	段丘	掘点	県教17b→32-17	表裏文様。魚眼状文変形	
4850	青	川原平(1)	屈折像A?	不明	?				不明	5					東捨	段丘	掘点	県教17b→32-18	「右胸」。無文?	
4851	青	川原平(1)	後期以来?	後期?		△	△	◎	不明	6.5			脚中実	線	東捨	段丘	掘点	県教17b→33-19	正中隆帯刺突跡も	
4852	青	川原平(1)	後期以来?	後期?					小片	2					東捨	段丘	掘点	県教17b→33-20	土偶? 「右胸」。無文?	
4853	青	川原平(1)	屈折像A	~後末		○	○	○	不明	8	◎	5028 類例	◎	東捨	段丘	掘点	県教17b→33-21	正中? ▼貼付「男性器」。背入組文?		
4854	青	川原平(1)	後期以来	後末?					不明	4.6				線	東捨	段丘	掘点	県教17b→33-22	正中平行線。背中文様類例註11	
4855	青	川原平(1)	?	後期?	△				小片	2					東捨	段丘	掘点	県教17b→33-23	左肩。大遮のようなV字隆帯。焼成良好	
4856	青	川原平(1)	後期以来?	後期?	?				不明	5					東捨	段丘	掘点	県教17b→33-24	二重弧線?	
4857	青	川原平(1)	後期以来?	後期?	部	位	不	明	不明	6.6			中空		北東	段丘	掘点	県教17b→97-1	「肩」。磨消縄文?	
4858	青	川原平(1)	「土偶か」	後期?	?	?	?	不明	5	5			「手づくね」		北東	段丘	掘点	県教17b→97-2	粗雑。無文	
4859	青	川原平(1)	x字×小遮	C2?	◎	◎	◎	○	2/3	6	漆				北東	段丘	掘点	県教17b→97-3	肉彫的裝飾。腰B突起。背対向△	
4860	青	川原平(1)	?	不明					小片	2.8		割口			北東	段丘	掘点	県教17b→97-4	「脚?」。両端に黒付。無文	
4861	青	川原平(1)	後期以来?	B1???	△	◎	◎	◎	不明	3.5					北東	段丘	掘点	県教17b→97-5	小遮系統? 「頭平坦皿状」。三叉文?	
4862	青	川原平(1)	大遮	BC2?					1/9	7			中空		北東	段丘	掘点	県教17b→97-6	部位境痕列。脚長め	
4863	青	川原平(1)	?	不明	部	位	不	明	不明	5.6					北東	段丘	掘点	県教17b→97-10	「肩」。縄文地三叉文?	
4864	青	川原平(1)	後期以来?	後期?					不明	6.8	○	割口			北東	段丘	掘点	県教17b→97-11	脚に黒付。パンツ区画内縄文	
4865	青	川原平(1)	後期以来?	後期?	?	?			不明	9.4	★				北東	段丘	掘点	県教17b→97-18	「胸線」。赤色顔料上白色顔料。磨消縄文	
4866	青	川原平(1)	大遮系統	C2 IV?	△				1/9	6.4			中空		東延	段丘	掘点	※121/183-10	磨消縄文地沈線文。爪先刻目列	
4867	青	川原平(1)	後期以来	後末	◎	◎	◎	◎	4/5	15.8				線	東延	段丘	掘点	※121/183-11	正中区画内突起。口両脇弧線。眉弧状	
4868	青	川原平(1)	大遮	C1新?	○				小片	5.3	○	中空			東延	段丘	掘点	※126/192-12	C2古? 顔縄文。頭頂4孔突起めぐる	
4869	青	川原平(1)	小遮?	BC2?	○				小片	4.9		中空			北東延	段丘	掘点	※126/192-13	大遮模倣。首中実? 後頭部羊歯状文	
4870	青	川原平(1)	結髪(粗)	A1?	?	○	◎	◎	不明	12.5	△			?	北捨	段丘	掘点	県教17c→22-1	摩滅。正中沈線? パンツ内刺突。多重爪先突出刻目3	
4871	青	川原平(1)	後期以来	後末?					小片	3.8					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-2		
4872	青	川原平(1)	?	不明	△				小片	2.2					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-3	乳房	
4873	青	川原平(1)	後期以来	後末?	△				小片	5					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-4	いかり肩。摩滅?	
4874	青	川原平(1)	土偶?	不明	部	位	不	明	不明	5					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-5	「てづくね土偶」	
4875	青	川原平(1)	小遮?	不明					小片	3.4					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-6	「右手」。足との境沈線	
4876	青	川原平(1)	?	後期?					小片	3.6					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-7	「足」。横位沈線と刺突列	
4877	青	川原平(1)	後期以来?	後期?	?				不明	2.7					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-8	「腕」。いかり肩? 摩滅。縄文地沈線	
4878	青	川原平(1)	大遮系統?	C2古?					小片	3.5			中空		北捨	段丘	掘点	県教17c→22-9	写真無。隆帯上縄文。C字文	
4879	青	川原平(1)	後期以来?	後期?					小片	2.9					北捨	段丘	掘点	県教17c→22-10	「左手」。途中円く突出。縄文地沈線	
4880	青	川原平(1)	大遮??	前葉?	?				小片	3.2			中空		北捨	段丘	掘点	県教17c→22-11	背中破片? 磨消縄文	
4881	青	川原平(1)	大遮?	C1古?					小片	2.5			中空		北捨	段丘	掘点	県教17c→22-12	縄文地水平沈線。三叉文	
4882	青	川原平(1)	大遮	C1古?	△				小片	2.5	漆		中空		北捨	段丘	掘点	県教17c→22-13	目。水平沈線下に縄文	
4883	青	川原平(1)	大遮??	不明?	?				小片	4.2			中空		北捨	段丘	掘点	県教17c→22-14	後頭部? 「左肩」。貼付。磨消縄文。入組文	
4884	青	川原平(1)	大遮系統?	C2古?					小片	4.3			中空		北捨	段丘	掘点	県教17c→22-15	腹裏? 縄文地入組文	
4885	青	川原平(1)	後期以来	B1	○				1/10	7.3	○	口管孔			北捨	段丘	掘点	県教17c→23-16	弧状眉。頸弧状区画。縄文。耳貫通孔	
4886	青	川原平(1)	土偶?	不明?	?				不明	4.4					北捨	段丘	掘点	県教17c→23-17	「てづくね土偶」。目口に刺突	
4887	青	川原平(1)	後期以来	B1?	○				1/9	6.4		割口			北捨	段丘	掘点	県教17c→23-18	首に黒付。弧状眉。後頭部結髪粘土	
4888	青	川原平(1)	?	不明	△				不明	3.8					北捨	段丘	掘点	県教17c→23-19	「右胸」。乳房剥落。無文	
4889	青	川原平(1)	土偶?	不明					不明	3.5				クラック	段丘	掘点	県教17c→23-20	土器突起? 「下半身」。縄文		
4890	青	川原平(1)	後期以来	~B1?	◎	◎	◎	◎	3/5	9.2			体貫通孔	◎	北捨	段丘	掘点	県教17c→23-21	摩滅。正中隆帯パンツ。背下内凹突起	
4891	青	川原平(1)	土偶?	不明					不明	6.6					北捨	段丘	掘点	県教17c→23-22	「屈折土偶の股」	
4892	青	川原平(1)	後期以来	瘤IV?					小片	5.5	△			クラック	段丘	掘点	県教17c→23-23	足突出。磨消縄文		
4893	青	川原平(1)	土偶?	不明					不明	7.1					北捨	段丘	掘点	県教17c→23-24	「屈折土偶の手」。沈線	
4894	青	川原平(1)	土偶?	不明					不明	3.5					北捨	段丘	掘点	県教17c→23-25	「右手」。縄文。沈線	
4895	青	川原平(1)	後期以来	後末?	○	◎	◎	◎	3/5	17.2			胸中空	◎	北捨	段丘	掘点	県教17c→24-26	正中沈線パンツ。磨消縄文。股貫通孔	
4896	青	川原平(1)	後期以来?	後末?	△				不明	5.7					北捨	段丘	掘点	県教17c→24-2		

東北地方・縄文晩期の土偶（7）

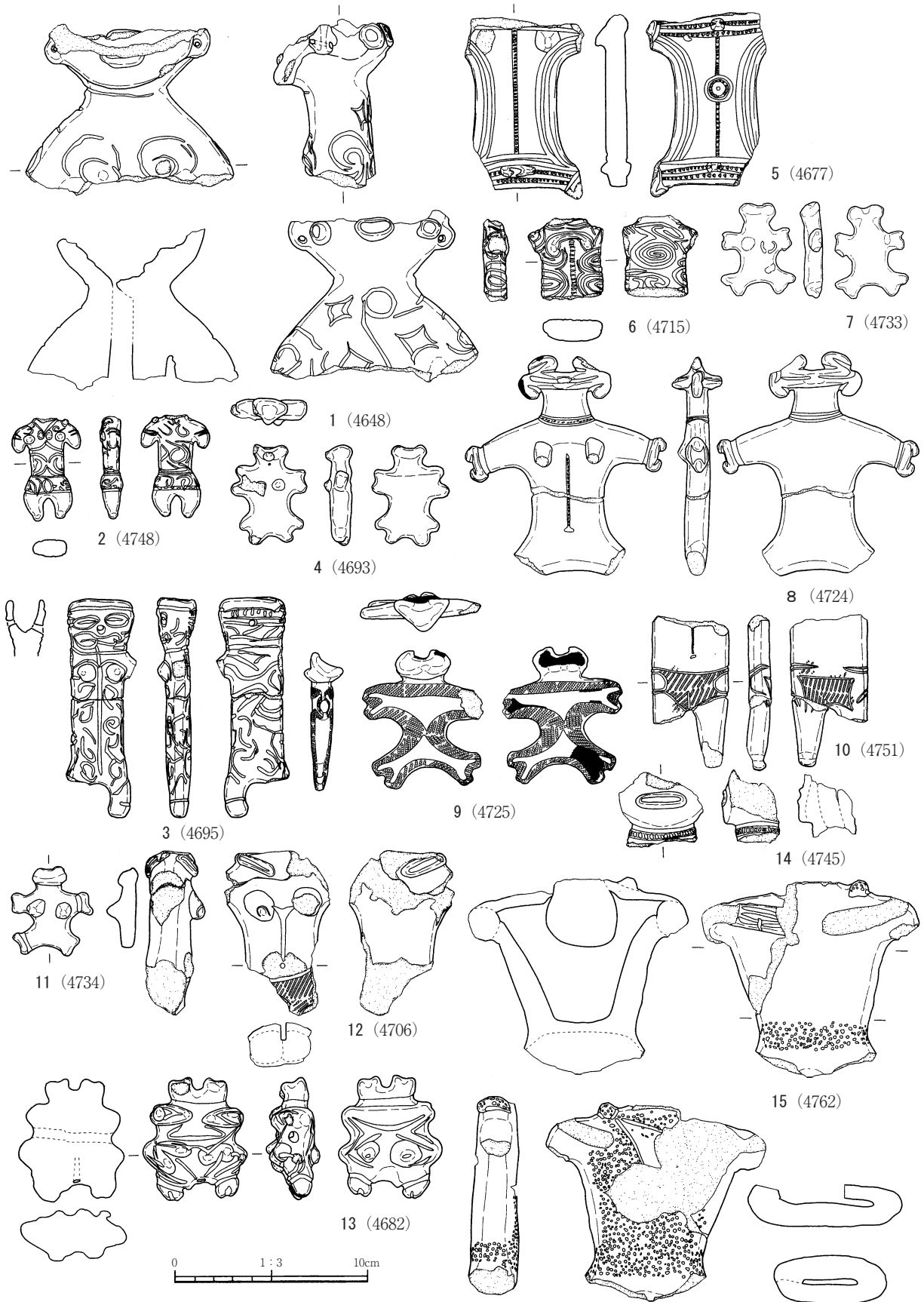
No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					残存率	現長 cm	接合 赤黒	付着物	つくり (製作痕)	女性	出土 位置	遺跡 立地	評価	掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腕	脚											
4908	青	川原平(1)	大遮	BC1?	△	○				1/9	6.5			中空	北捨	段丘	拠点	県教17c→26-40	内面粘土接合痕管孔? 磨消縄文(方形)	
4909	青	川原平(1)	大遮	C1新?	○	○	○	○	○	7/10	26.5	△	△	腕中実	西捨	段丘	拠点	県教17d→70-1	表裏胴上下区画線無。磨消縄文	
4910	青	川原平(1)	大遮	BC2?	○	○				1/8	10.8		◎	中空?	西捨	段丘	拠点	県教17d→71-2	焼成良好。首文様三段。後頭縄文	
4911	青	川原平(1)	大遮	BC2?	○					1/10	13			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→72-3	頭頂突起。頸弧線3。縄文	
4912	青	川原平(1)	大遮	C1古?	△						7.3		◎	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→72-4		
4913	青	川原平(1)	蔽面大遮	C1新?	○	○	△		○	1/5	14.5	△	◎	腕中実	西捨	段丘	拠点	県教17d→73-5	★顔に蔽面? 磨消縄文。粗雑?	
4914	青	川原平(1)	大遮	C1古?		△				小片	2.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→73-6	写真無。背中首下? 磨消縄文(山字文)	
4915	青	川原平(1)	大遮	~C1古	△					小片	3.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→73-7	後頭部。縄文地蛇行沈線。焼成良好	
4916	青	川原平(1)	大遮	前葉?			?			小片	1.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→73-8	「首」股? 磨消縄文施文城端	
4917	青	川原平(1)	大遮	~C1古	△					小片	2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→73-9	写真無。透光器眼	
4918	青	川原平(1)	大遮	~C1古			?			小片	3.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→74-10	「頭裏」背中心? 裁痕列。沈線文	
4919	青	川原平(1)	大遮	~C1古			?			小片	3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→74-11	写真無。「頭」肩? 磨消縄文(広斜文)	
4920	青	川原平(1)	大遮	BC2?	△					細片	2.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→74-12	頭頂突起。裁痕列。B突起	
4921	青	川原平(1)	大遮	BC2?				△		小片	4.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→74-13	手。突起陰刻	
4922	青	川原平(1)	大遮	C1古?		△	○			1/7	8.4	△		中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→74-14	磨消縄文(山字文3段以上)。裁痕列	
4923	青	川原平(1)	大遮	~C1古	△					小片	3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→74-15	胸。乳房周囲裁痕列。磨消縄文	
4924	青	川原平(1)	大遮	BC			?			小片	4.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→74-16	腰?後頭部? 磨消縄文	
4925	青	川原平(1)	大遮	BC2?		△	△	△	△	小片	7.8	△		中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→75-17	写真無。下腹。磨消縄文。刺突列	
4926	青	川原平(1)	大遮	BC2?		○	○			1/5	12			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→75-18	★下腹貫通孔。磨消縄文(文様はC1?)	
4927	青	川原平(1)	大遮?	BC?	△	△	△			小片	7.2			輪積中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→75-19	写真無。磨消縄文。裁痕列。★胎土分析	
4928	青	川原平(1)	大遮	~C1古		△				小片	2.7			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→75-20	下腹? 渦巻意匠裁痕列。縄文	
4929	青	川原平(1)	大遮系統?	~C2古		△				小片	3.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→75-21	腰? 刻目隆帯2条上突起貼付	
4930	青	川原平(1)	大遮	C1古			○	○		1/6	12.2	△	○	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→76-22	部位境裁痕列。磨消縄文(広斜文)。胸短	
4931	青	川原平(1)	大遮	BC1?	△					小片	6.3		○	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→76-23	弧状肩~鼻貼付。口貫通	
4932	青	川原平(1)	大遮系統	A1	△					小片	4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→76-24	「添液容器」。写真無。後頭工字文	
4933	青	川原平(1)	土器?	BC2?						小片	3.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→76-25	大遮?注口土器? 裁痕列	
4934	青	川原平(1)	大遮	C1古?		△		○		1/7	9.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→77-26	磨消縄文。腕短い。手突起単純陰刻	
4935	青	川原平(1)	小遮	C1古?	○					不明	3.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→77-27	目横線無。後頭部剥落?	
4936	青	川原平(1)	大遮	C1?	△					小片	7.8			輪積中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→77-28		
4937	青	川原平(1)	後期以来	B1?	○	○				1/5	9.6		割口	中空	線	西捨	段丘	拠点	県教17d→77-29	肩黒付。正中隆帯。眉弧。口貫通。胴雙文
4938	青	川原平(1)	土偶?	不明		部位	不明			小片	4.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→77-30	「首」。写真無	
4939	青	川原平(1)	土偶?	不明		部位	不明			小片	3.9			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→77-31	「体」。沈線。刺突?	
4940	青	川原平(1)	大遮	C1古?			?			細片	2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→77-32	「首」腕? 裁痕列と接して縄文帯(刺突列)	
4941	青	川原平(1)	後期以来	B1?	◎	◎	○	△		1/3	14			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→78-33	仮面状。弧状肩。後頭透彫。磨消縄文	
4942	青	川原平(1)	大遮系統	A1?	◎	○		△		1/4	8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→78-34	後頭貫通孔。首下工字文。貼付鼻上方	
4943	青	川原平(1)	大遮もどき?	A1?	◎	◎	◎	◎	○	4/5	15.5	△	○		西捨	段丘	拠点	県教17d→78-35	写真無。Y字肩貼付。背中平行線	
4944	青	川原平(1)	?	後期?					○	不明	3.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→78-36	赤褐色。「胸」土偶の足?。無文	
4945	青	川原平(1)	後期以来?	B1?	△	△				小片	10	△		中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-37	胴磨消縄文。三叉文	
4946	青	川原平(1)	大遮?	前葉?			?			細片	3.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-38	「肩」腕? 写真無。点列。類例1096	
4947	青	川原平(1)	大遮?	BC2?		△				細片	1.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-39	肩? 円形瘤状突起。首首歯状文?	
4948	青	川原平(1)	大遮?	BC1?	△					小片	6.7			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-40	写真無。縄文	
4949	青	川原平(1)	大遮	BC2?		△				小片	5.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-41	左肩。部位境裁痕列。突起	
4950	青	川原平(1)	土偶?	不明		部位	不明			不明	5.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-42	「体部」。文様	
4951	青	川原平(1)	大遮?	前葉?		部位	不明			小片	3.9			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-43	「体部」。山字文?	
4952	青	川原平(1)	土偶?	前葉?		部位	不明			小片	6.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-44	「体部」。文様多段	
4953	青	川原平(1)	大遮?	不明		部位	不明			小片	3.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-45	「体部」。段一腕?腰? 文様	
4954	青	川原平(1)	大遮?	~C1古			?			小片	4.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→79-46	写真無。「体部」脇腹? 裁痕列渦巻?	
4955	青	川原平(1)	大遮	C1新?	△	△				1/6	5.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-47	首無文。乳房の周りに裁痕列無。磨消縄文	
4956	青	川原平(1)	大遮	~C1古			?			細片	3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-48	「肩」股? 写真無。縄文。部位境裁痕列	
4957	青	川原平(1)	大遮?	~C1古			?			細片	2.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-50	肩? 二条隆帯刻目列	
4958	青	川原平(1)	大遮?	前葉?			?			細片	4.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-51	「右肩」下腹? 刺突多。文様	
4959	青	川原平(1)	大遮?	前葉?			?			細片	3.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-52	脚の付付根? 刺突多	
4960	青	川原平(1)	大遮	前葉?			?			細片	2.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-53	肩。磨消縄文(山字文?)	
4961	青	川原平(1)	大遮	C1新?		○				小片	5.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-54	胸。摩滅。磨消縄文? 乳房周囲裁痕無	
4962	青	川原平(1)	大遮	~C1古	△					細片	3.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-55	胸?回天地逆? 裁痕列。磨消縄文(/字)	
4963	青	川原平(1)	大遮	不明		部位	不明			細片	4.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-56	写真無。「体部」。文様。★胎土分析	
4964	青	川原平(1)	大遮?	前葉?		部位	不明			細片	3.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-57	「体部」。磨消縄文	
4965	青	川原平(1)	大遮??	不明			?			小片	2.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→80-58	「肩~首」股?。無文	
4966	青	川原平(1)	大遮	BC2?		△	△			小片	8.8		○	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-59	右脇腹。磨消縄文	
4967	青	川原平(1)	大遮	~C1古		△				細片	1.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-60	首~肩。首下隆帯点列。縄文	
4968	青	川原平(1)	大遮	C1?		△				細片	1.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-61	乳。写真無	
4969	青	川原平(1)	大遮	BC2?		△				小片	5.4	△		中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-62	胸。首途中乳房周囲裁痕列。磨消縄文	
4970	青	川原平(1)	大遮	~C1古		△				小片	2.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-63	肩。磨消縄文	
4971	青	川原平(1)	土偶?	不明		部位	不明			小片	2.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-64	「体部」後期前葉土器片? 方形区画	
4972	青	川原平(1)	後期以来?	後末?			?			小片	3.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-65	「右肩」注口土器? 刻目帯弧	
4973	青	川原平(1)	大遮	BC2?			△			小片	3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-66	腰? 裁痕列	
4974	青	川原平(1)	大遮	~C1古		部位	不明			細片	3.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-67	胸。低い曲線貼付上刺突列	
4975	青	川原平(1)	大遮	前葉?		部位	不明			細片	3.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-68	胸? 縄文	
4976	青	川原平(1)	土偶?	不明		部位	不明			小片	4.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-69	「首~肩」	
4977	青	川原平(1)	?	不明		部位	不明			小片	4.1			輪積中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-70	「首」。写真無。縄文地沈線文	
4978	青	川原平(1)	土偶?	不明		部位	不明			細片	2.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-71	「首」。写真無。縄文	
4979	青	川原平(1)	土偶?	不明		部位	不明			細片	2.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→81-72	写真無。縄文	
4980	青	川原平(1)	大遮	C1古		△		○		小片	7		○	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→82-73	磨消縄文。裁痕列。腕短い。上と同一?	
4981	青	川原平(1)	大遮	C1古		△		○		小片	7		○	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→82-74	磨消縄文。裁痕列。腕短い。上と同一?	
4982	青	川原平(1)	大遮	C1古		△		△		小片	3.5		○	割口	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→82-75	足黒付。脚境刻目隆帯。黒光沢
4983	青	川原平(1)	大遮	BC1?		△		○		小片	5.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→82-76	腕境裁痕列無。磨消縄文	
4984	青	川原平(1)	大遮系統	C2 V?			○	○		1/6	5.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→82-77	腰縄文地文様。爪先刻目列	
4985	青	川原平(1)	大遮?	前葉?		△				細片	2			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→82-78	「左肩」。縄文	
4986	青	川原平(1)	?	不明			?			細片	2.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→82-79	「肩」脇? 無文。黒光沢?	
4987	青	川原平(1)	大遮系統?	C2古		△	○	○		3/8	6.2		割口	中空	西捨	段丘	拠点	県教17d→83-80	腹と脚二箇所黒付。縄文地C字文二段	
4988	青	川原平(1)	大遮	前葉		△	○	○		3/8</										

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					残存率	現長 cm	接合 赤	付着物 黒	つくり (製作痕)	女性	出土 位置	遺跡 立地	評価	掲載箇所	備考		
					頭	胸	腹	腰	腕													
4990	青	川原平(1)	大遮	前葉						細片	3.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 83-83	「肩」腰上? 磨消縄文(方形文)			
4991	青	川原平(1)	大遮	C1古?	△					小片	4.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 83-84	裁痕列。脚短い。手円形突起			
4992	青	川原平(1)	大遮	B C	△					小片	2.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 83-85	「脚」首? 裁痕列縦にB突起			
4993	青	川原平(1)	?	不明						細片	1.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 83-86	「肩」。縄文			
4994	青	川原平(1)	大遮系統?	C2?						小片	5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 83-87	脚。写真無。無文			
4995	青	川原平(1)	大遮?	BC2?	△	△				小片	6.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-88	首裁痕列? 肩隆帯刺突列。粘土接合痕			
4996	青	川原平(1)	大遮?	~C1?						小片	5			輪積中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-89	写真無。磨消縄文。指頭圧痕★胎土分析			
4997	青	川原平(1)	大遮系統?	C2 V?			△	△	△	小片	5.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-90	磨消縄文。沈線。脚と足の間沈線			
4998	青	川原平(1)	大遮系統?	C2?					○	1/7	5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-91	足底くぼむ			
4999	青	川原平(1)	大遮	C1古?				△	○	小片	5.7			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-92	脚短い。部位境裁痕列			
5000	青	川原平(1)	大遮	~C1古					△	小片	7.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-93	腰との境裁痕列			
5001	青	川原平(1)	?	不明						細片	2			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-94	「右肩」。無文			
5002	青	川原平(1)	?	不明						小片	1			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-95	「脚」胸? 墓穴文			
5003	青	川原平(1)	大遮	BC2?			△	△	○	1/6	11.2	△		中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 84-96	写真無。部位境裁痕列。			
5004	青	川原平(1)	大遮	前葉			△	△	△	小片	6			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 85-97	磨消縄文。部位境裁痕列			
5005	青	川原平(1)	大遮系統	C2前半			△	○	○	1/6	6.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 85-98	股水平刻目陰帯2条。焼成良好			
5006	青	川原平(1)	大遮?	前葉?						小片	5.8			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d → 85-99	「右肩」。脚にも縄文? 裁痕列?			
5007	青	川原平(1)	大遮?	前葉?						小片	5.6			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d85-100	脚の途中隆帯点列? → 1096 類例?			
5008	青	川原平(1)	大遮	前葉?						細片	4.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d85-101	写真無。背中破片? 磨消縄文(入組文)			
5009	青	川原平(1)	大遮	前葉						小片	6.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d85-102	脚長い。無文。足裏横円形			
5010	青	川原平(1)	大遮	前葉						小片	5.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d85-103	脚長い。無文。足裏横円形?			
5011	青	川原平(1)	?	不明						細片	4			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d85-104	写真無。「肩」。精製。文様			
5012	青	川原平(1)	大遮	~C1	△	△				細片	1.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d85-105	写真無。肩。磨消縄文。首下部無文			
5013	青	川原平(1)	大遮	~C1古				△	△	小片	5.7			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-106	部位境裁痕列			
5014	青	川原平(1)	大遮系統?	~A1						小片	3.3			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-107				
5015	青	川原平(1)	土偶?	不明						細片	2.4			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-108	「腰」。無文			
5016	青	川原平(1)	大遮系統	C2中~						小片	5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-109	足裏卵形?			
5017	青	川原平(1)	小遮	~C1古	△				○	小片	3.2			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-110	部位境裁痕列。手B突起			
5018	青	川原平(1)	大遮?	前葉?						小片	4.8			中空?	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-111	写真無。下腹? 貫通孔? 刺突。精製			
5019	青	川原平(1)	大遮	~C1						小片	3.6			中空?	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-112	写真無。磨消縄文。[体部。精製]			
5020	青	川原平(1)	大遮系統	C2前半			△	○	○	1/6	6			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-113	腰断続沈線			
5021	青	川原平(1)	土偶?	不明						細片	2.7			中空?	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-114	写真無。「体部」			
5022	青	川原平(1)	x字形?	C2?		○	○	△	△	2/5	3.5			小型板状	線	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-115	正中線系列。正中刺突列。乳間平行線		
5023	青	川原平(1)	大遮系統?	A1?						小片	2.8		●		西捨	段丘	拠点	県教 17d86-116	円天地逆? 頭頂突起? 二又。表裏瘤突起			
5024	青	川原平(1)	結髪?	A1?		○	○	○	○	1/8	5				西捨	段丘	拠点	県教 17d86-117	乳房隆帯。首飾り状沈線。背中刺突			
5025	青	川原平(1)	?	不明						小片	5.6				西捨	段丘	拠点	県教 17d86-118	写真無。「体部」。磨消縄文			
5026	青	川原平(1)	?	不明						小片	3.8			輪積中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-119	写真無。「体部」。精製			
5027	青	川原平(1)	大遮??	C1?	○					1/9?	3.5			中空	西捨	段丘	拠点	県教 17d86-120	摩滅。小遮?			
5028	青	川原平(1)	屈折像A	痛IV	○	○	○	○	○	7/9	21.4	○			線	西捨	段丘	拠点	県教 17d87-121	弧状肩。正中Y字隆帯。註12		
5029	青	川原平(1)	後期以来	後後?	○					1/7	6.3		漆	割口		西捨	段丘	拠点	県教 17d87-122	首黒付。顔小判形。後頭結髪。肩鼻T字		
5030	青	川原平(1)	後期以来	後後?					△	小片	4.3				西捨	段丘	拠点	県教 17d87-123	脚? 爪先刻目列。文様			
5031	青	川原平(1)	後期以来	後後?	○					1/8	4.5			割口	口管孔	西捨	段丘	拠点	県教 17d87-124	後頭黒付。顔輪形。肩鼻Y字。耳貫通孔		
5032	青	川原平(1)	小型無文	不明	○	○	○	○	○	一欠	6.3				肛門管孔	西捨	段丘	拠点	県教 17d87-125	顔鼻のみ(鼻腔)		
5033	青	川原平(1)	後期以来	B1?	○	○	○	○	○	2/3	8		○	割口		西捨	段丘	拠点	県教 17d88-126	正中沈線。ハ。背面入組文三叉文。註13		
5034	青	川原平(1)	後期以来	後後?	○	○	○	○	○	3/5	6.5				西捨	段丘	拠点	県教 17d88-127	首~股に貫通孔。無文			
5035	青	川原平(1)	後期以来	後後?	○	○	○	○	○	3/5	7.5				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d88-128	正中~腰逆T字隆帯上縄文		
5036	青	川原平(1)	後期以来	~B1?	△	△				1/9	4				西捨	段丘	拠点	県教 17d88-129	首V字隆帯刻目列。肩三叉文?			
5037	青	川原平(1)	小遮	C1?	○	○	○	○	○	4/5	15.7	△			頭のみ中空	線	西捨	段丘	拠点	県教 17d88-130	写真上半身のみ。正中刺突列。肛門管孔	
5038	青	川原平(1)	小遮	~C1古			△	△	△	1/5	6.2				「中空」?	線	西捨	段丘	拠点	県教 17d88-131	肩張単足系列。裁痕列	
5039	青	川原平(1)	後期以来?	後後?	△	○				3/10	2.5				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d88-132	正中沈線? 背中央沈線		
5040	青	川原平(1)	刺突文祖形?	A1?						1/2	8.5				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d88-133	正中沈線。肩瘤。背中隆帯上沈線		
5041	青	川原平(1)	後期以来	後後?						1/4	5.8		◎		線	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-134	正中沈線刺突。パンツ。▼短沈線。腹膨		
5042	青	川原平(1)	後期以来?	後後?					△	小片	3				西捨	段丘	拠点	県教 17d89-135	足先突出			
5043	青	川原平(1)	後期以来	後後?						不明	5.5				「中空」?	線	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-136	屈曲するクラク状。爪先刻目列。腕?	
5044	青	川原平(1)	後期以来	後後?					○	不明	4.6				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-137	正中沈線		
5045	青	川原平(1)	後期以来	後後?						不明	4.7				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-138	「左手」脚? 途中平行沈線		
5046	青	川原平(1)	後期以来	後後?	◎	○	○			1/4	3				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-139	正中。文様刺突列。背中入組文		
5047	青	川原平(1)	後期以来	後後?	○	○				不明	6.3				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-140	正中刺突列。正面剥落		
5048	青	川原平(1)	後期以来	後後?	○	○				不明	4.2				線	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-141	表刺突列(正中ほか)。裏沈線		
5049	青	川原平(1)	結髪もどき?	A1?	○	○	○	○	○	4/5	12.5	△			「中空」?	◎	西捨	段丘	拠点	県教 17d89-142	正中沈線。パンツ内縄文。腰脇多重円	
5050	青	川原平(1)	刺突文祖形?	A1?					△	不明	6					西捨	段丘	拠点	県教 17d90-143	足裏横円形。脚途中多重平行線		
5051	青	川原平(1)	後期以来	後後?					○	不明	2.4					肛門管孔	線	西捨	段丘	拠点	県教 17d90-144	正中刺突列。摩滅
5052	青	川原平(1)	土偶?	不明						不明	1.4					西捨	段丘	拠点	県教 17d90-145	途中貫通孔。裝飾品?		
5053	青	川原平(1)	後期以来	後後?					△	不明	6.6					焼成良好	西捨	段丘	拠点	県教 17d90-146	肩、十腰内Ⅱ式の帯縄文刺突列	
5054	青	川原平(1)	x字×小遮	C2?	◎	◎	◎	◎	◎	7/8	6.2					◎	西捨	段丘	拠点	県教 17d90-147	乳大正中刺突列。首V沈線	
5055	青	川原平(1)	小遮系統?	A1??	○	△				不明	3.7					西捨	段丘	拠点	県教 17d90-148	「x字形土偶」。抽象的陰刻		
5056	青	川原平(1)	小遮系統?	C2古?	○	◎	◎	◎	◎	9/10	8.6					西捨	段丘	拠点	県教 17d90-149	「x字形土偶」。浮彫的裝飾。背中入組文		
5057	青	川原平(1)	小型無文	C2?	○	◎	◎	◎	◎	9/10	5					小型板状	西捨	段丘	拠点	県教 17d90-150	頭X字形と共通B突起。摩滅	
5058	青	川原平(1)	x字形	C2?	◎	◎	◎	◎	◎	一欠	4.3					小型板状	西捨	段丘	拠点	県教 17d90-151	陰刻文系列。対向△。手足突起でない	
5059	青	川原平(1)	小																			

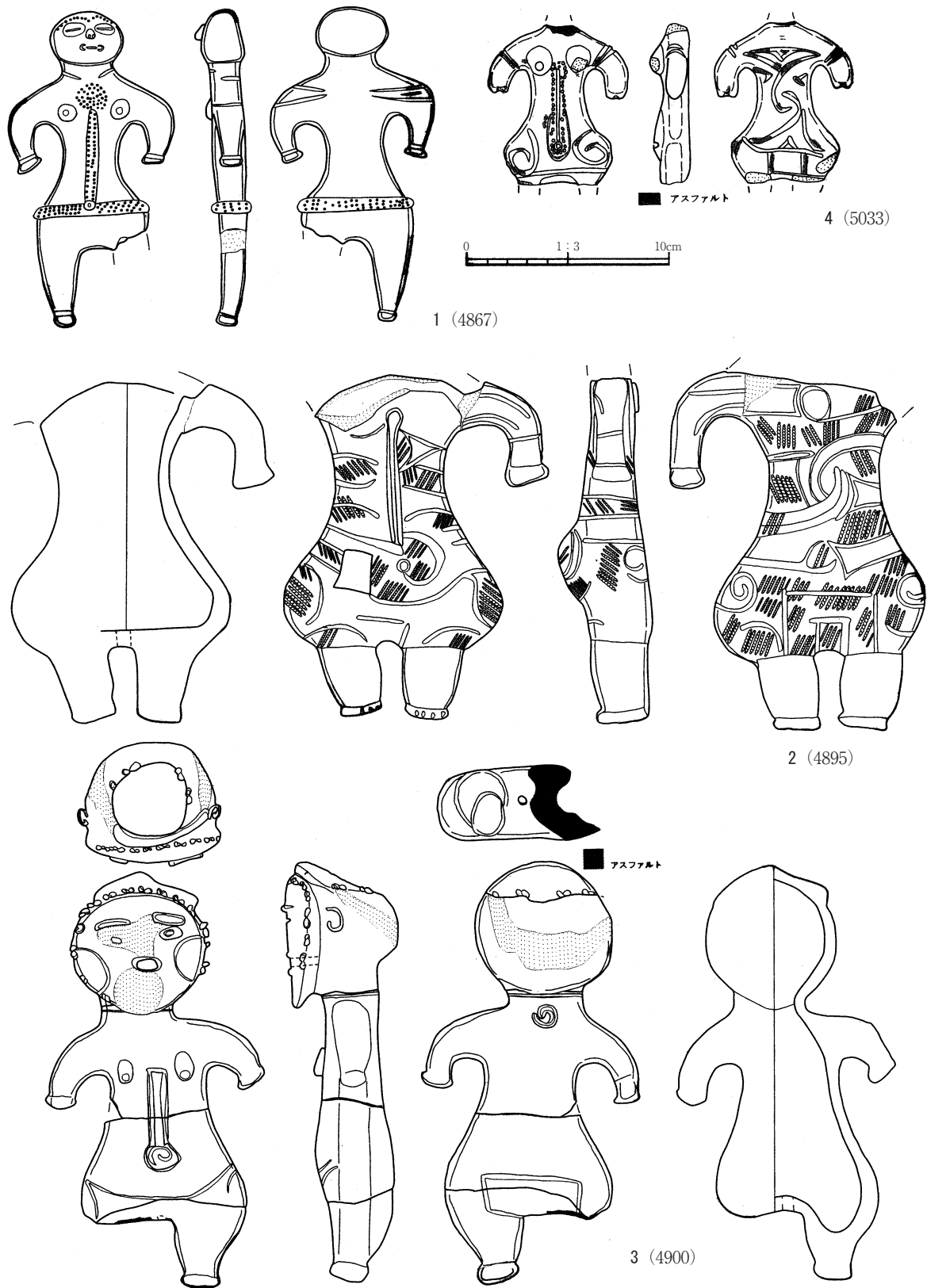
No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					現長 cm	接合 赤	付着物 黒	つくり (製作痕)	女性	出土 位置	遺跡 地	評価	掲載箇所	備考	
					頭	胸	腹	腕	脚											
5072	青	川原平(4)	大遼系統?	C2古?	△					小片	4	○	中空				段丘	掘点	県教16→148-1	眉弧。貼付遮光器眼。縄文。晩期初頭?
5073	青	川原平(4)	結髪	A1?	○	○	△			小片	1/4	13	○	中空			段丘	掘点	県教16→187-1	摩滅剥落。正中沈線。脇腹対向弧線
5074	青	川原平(4)	?	不明						小片	3.6						段丘	掘点	県教16→187-2	「脚」。刺突
5075	岩	中村	刺突文	A'古?	△					小片	1.6						堤防	掘点	県埋17→c1	右肩。背中肩パットを繋ぐ刺痕列?縄文
5076	岩	中村	刺突文	A'古?	△					小片	1.9						堤防	掘点	県埋17→c2	頭頂突起。刺痕列?同刺突多
5077	岩	中村	結髪?	A2~?	?					細片	2.6						堤防	掘点	県埋17→c3	「結髪部破片」。多重沈線。刺目列
5078	岩	千苺	結髪	A'古?	○	○	○	△	△	3/5	13.8	△	○				堤防	掘点	県埋16→d1	正中刺痕列?背中肩パット。背竹管刺突
5079	岩	千苺	結髪	A1?	◎					1/6	2.4						堤防	掘点	県埋16→d2	小型。結髪に透かし。目短沈線
5080	岩	千苺	結髪	A1~	○					1/9	4		中空				堤防	掘点	県埋16→d3	眉鼻独立。眉一状貼付。頭刺突
5081	岩	千苺	結髪	A1~	○					1/9	5.8		中空				堤防	掘点	県埋16→d4	顔剥落。二次被熱により一部黒色化
5082	岩	千苺	結髪	A1?	○					1/8	3.4						堤防	掘点	県埋16→d5	摩滅。耳貫通孔。頭刺目隆帯3列
5083	岩	千苺	結髪	A1?	△					小片	2.3						堤防	掘点	県埋16→d6	結髪破片。透かし彫り。端竹管状刺突
5084	岩	千苺	結髪	A2?	△	◎	○	○	△	3/5	15	○	輪中空		◎		堤防	掘点	県埋16→d7	正中沈線▼短沈線。調整丁寧。乳房文様
5085	岩	千苺	結髪	A2~?	△	△				小片	3.6		輪積中空				堤防	掘点	県埋16→d8	背中破片。沈線挟んで帯結沈線
5086	岩	千苺	刺突文祖形?	~A2?	△	△				不明	10		輪積中空				堤防	掘点	県埋16→d9	背中破片。上方刺突。下方沈線
5087	岩	千苺	結髪	A2~?	△	△				1/8	8		輪積中空				堤防	掘点	県埋16→d10	背中破片。粗短沈線。背中隆大円形文列
5088	岩	千苺	結髪	A2~?	△	△				小片	4.3		中空	バ?			堤防	掘点	県埋16→d11	図天地逆? 鑄貼付。パンツ?内刺突
5089	岩	千苺	結髪	A'	△	△				小片	4.8		中空	線			堤防	掘点	県埋16→d12	正中沈線。乳房形貼付肩へ帯文様
5090	岩	千苺	結髪	A1					○	1/9	5.3	△	中空	バ			堤防	掘点	県埋16→d13	パンツ内刺突。爪先刻目列6。註15
5091	岩	千苺	刺突文祖形?	~A2?	△	△				小片	5.8		中空				堤防	掘点	県埋16→d14	右胸腹。乳房形貼付小。縄文
5092	岩	千苺	結髪	A1						小片	4.5		中空	バ			堤防	掘点	県埋16→d15	パンツ内刺突。多重線
5093	岩	千苺	結髪	A1?						小片	2.5		中空	バ			堤防	掘点	県埋16→d16	パンツ内縄文。多重線
5094	岩	千苺	刺突文?	A'~?						小片	2.5		中空				堤防	掘点	県埋16→d17	脚と足の境平行線
5095	岩	千苺	刺突文??	A'~?						小片	1.4						堤防	掘点	県埋16→d18	爪先短沈線の後ろ平行線
5096	岩	千苺	結髪	~A'古?	◎	◎	◎	△	◎	7/10	7.4						堤防	掘点	県埋16→d19	小型。正中刺痕列。背中貼付列と沈線
5097	岩	千苺	結髪	A2~?	△	○	○			3/10	5.3						堤防	掘点	県埋16→d20	正中沈線。摩滅。腹剥落
5098	岩	千苺	結髪	A1~	△	○	◎	◎	◎	不明	8.8						堤防	掘点	県埋16→d21	小型。正中刺痕列▼文様。脇腹対向弧線
5099	岩	千苺	結髪	A1~						不明	4.3						堤防	掘点	県埋16→d22	正中刺痕列。股間深い短沈線。腰刺突
5100	岩	千苺	結髪	A1~						小片	3.9						堤防	掘点	県埋16→d23	背中6字文。肩。脇腹刺突
5101	岩	千苺	刺突文	A'古~	○					1/10	6		中空				堤防	掘点	県埋16→d24	全体摩滅。頭頂突起多重線。頸弧線区画
5102	岩	千苺	刺突文	末前後	○					不明	4.8	○					堤防	掘点	県埋16→d25	頭頂二次突起。耳貫通孔。頬平行線
5103	岩	千苺	刺突文	A'新?	△					小片	5.2		中空?				堤防	掘点	県埋16→d26	A2?左肩。背中肩パット長い。正面縄文
5104	岩	千苺	刺突文	A'古~	△					小片	1.8		中空				堤防	掘点	県埋16→d27	肩突起。刺突。縄文
5105	岩	千苺	刺突文	A'古~	△					小片	3						堤防	掘点	県埋16→d28	右肩。腕割口ソケット状。背中三本沈線
5106	岩	千苺	刺突文?	末前後						不明	5.2	△	中空				堤防	掘点	県埋16→d29	脚下まで刺突。腰沈線
5107	岩	千苺	刺突文	末前後	◎	◎	△			不明	14.1		大形板状	線			堤防	掘点	県埋16→d30	正中沈線。背中菱形意匠文。「脚表現無」
5108	岩	千苺	結髪?	不明	△					不明	2.2						堤防	掘点	県埋16→d31	鼻貼付(鼻孔)。目凹線
5109	岩	千苺	刺突文?	末前後						不明	4.6						堤防	掘点	県埋16→d34	足と脚の間に沈線
5110	岩	千苺	?	不明						不明	1.8		割口				堤防	掘点	県埋16→d35	脚黒付。脚多重水平線。小型刺突文土偶?
5111	岩	千苺	装身具?	不明	◎	◎	◎	◎	◎	9/10	2.9						堤防	掘点	県埋16→d36	ひとがた。無文。頭横貫通孔
5112	岩	千苺	結髪変形?	~谷起島	?					不明	4.3						堤防	掘点	県埋16→d54	乳刺突?無文?
5113	岩	千苺	結髪	A1~	△					細片	1.8						堤防	掘点	県埋16→d55	結髪部分破片。「吸盤状突起」多
5114	岩	杉の堂	大遼?	~C1古	△					小片	3		輪積中空			坑覆	掘点	県埋20→d1	肩。隆帯上刺突列。縄文	
5115	岩	杉の堂	大遼	~C1古	?					細片	3.6	○	中空			坑覆	掘点	県埋20→d2	部位不明。磨消縄文(方形文)	
5116	岩	杉の堂	大遼	~BC1?	△					小片	2.6		中空				掘点	掘点	県埋20→d3	左肩。目短穿孔。眉縄文
5117	岩	杉の堂	?	前葉?	△					小片	6.4	△	中空				掘点	掘点	県埋20→d4	乳房?裏磨消縄文
5118	岩	杉の堂	?	不明						小片	3.8		中空				掘点	掘点	県埋20→d5	「腕」。沈線
5119	岩	杉の堂	?	不明						小片	1.8		「中空」?				掘点	掘点	県埋20→d6	「腕」。無文
5120	岩	杉の堂	結髪	A1	○	△				小片	4		中空				掘点	掘点	県埋20→d7	左胸。乳房隆帯刺目列。背中貼付列
5121	岩	杉の堂	大遼系統	A1	△	△				小片	4.6	○	中空				掘点	掘点	県埋20→d8	肩。多重沈線
5122	岩	杉の堂	?	不明	?					小片	4.2						掘点	掘点	県埋20→d9	「結髪の変例?」
5123	岩	杉の堂	結髪	A1?	◎	◎	◎			1/4	8.2		★体内管孔	線			掘点	掘点	県埋20→d10	台式?正中沈線。乳房隆帯。表裏沈線文
5124	岩	杉の堂	小遼	~C1古	△					小片	5						掘点	掘点	県埋20→d11	腹。脇腹渦巻文
5125	岩	杉の堂	結髪?	A1?						小片	3.5	○	中空				掘点	掘点	県埋20→d12	腰。縄文地多重線
5126	岩	杉の堂	大遼	BC2?	△	△				小片	6	○	中空				掘点	掘点	県埋20→d13	★磨消縄文脇腹?ガキで無?腹刺痕列
5127	岩	杉の堂	?	不明						細片	3.8		中空				掘点	掘点	県埋20→d14	「右腰」。注口部??
5128	岩	杉の堂	?	不明						細片	2.9		中空				掘点	掘点	県埋20→d15	「脚」。刺突多。晩期後葉~末土偶?
5129	岩	杉の堂	刺突文	末?	?					細片	2.8		中空				掘点	掘点	県埋20→d16	胸?細かい刺突~太い沈線
5130	岩	杉の堂	結髪	A1						小片	2.5		中空				掘点	掘点	県埋20→d17	左肩。正面隆帯。背中竹管状刺突列
5131	岩	杉の堂	結髪??	A1??	△					小片	4.8						掘点	掘点	県埋20→d19	右肩?背中平行線
5132	岩	杉の堂	?	不明						細片	3.2	?	中空				掘点	掘点	県埋20→d20	沈線。結髪土偶胴部??
5133	岩	杉の堂	大遼系統?	A1?					△	1/9	3.9		中空				掘点	掘点	県埋20→d21	腰?工字文?足裏内形?結髪土偶?
5134	岩	杉の堂	結髪	~末						細片	0.8		中空				掘点	掘点	県埋20→d22	股。刺突多
5135	岩	杉の堂	大遼	C1古?					△	小片	1.7		中空				掘点	掘点	県埋20→d23	足の境刺痕列
5136	岩	杉の堂	小遼?	~C1古?						小片	2.8		中空				掘点	掘点	県埋20→d24	墓状文
5137	岩	杉の堂	小遼?	不明					??	細片	2.2		中空				掘点	掘点	県埋20→d25	「腕」。沈線
5138	宮	北小松	?	A1??	?					小片	4.5						沖積	掘点	県教21→36-20	正中刺痕列?乳上部ボタン貼付。縄文
5139	宮	北小松	大遼系統	A1	△	△				小片	5			★中実			沖積	掘点	県教21→75-7	多重沈線。肩刺痕列
5140	宮	北小松	後期以来	後期?	○	△				2/9	5.5						沖積	掘点	県教21→162-7	Vネック隆帯上刺突列。眉剥落。耳貫通孔
5141	宮	北小松	?	後葉?	○					不明	4.4						沖積	掘点	県教21→162-8	目上鼻貼付。頸後頭刺突列
5142	宮	北小松	後期以来?	後期?	△					不明	3.4						沖積	掘点	県教21→162-9	「左肩」。微隆帯上に刺突列
5143	宮	北小松	?	不明	◎	◎	◎	△		不明	5.7						沖積	掘点	県教21→163-7	眉。首下V字隆帯刺目列

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位					残存率	現長 cm	接 合	付着物 赤 黒	つくり (製作痕)	女 性	出土 位置	遺 跡		掲載箇所	備 考
					頭	胸	腹	腰	腕								脚	立地		
5154	宮	北小松	結髪変?	A2?	△					小片	3						沖積	掘?	県教21→171-24	抽象的。後頭r字文。眉目刻目隆帯
5155	宮	北小松	結髪?	A1~?	△					細片	2.2						沖積	掘?	県教21→171-25	口破片。口刻目隆帯
5156	宮	北小松	大遮系統	A1?	△					小片	4						沖積	掘?	県教21→172-1	頭頂突起。頂二又。刻目隆帯
5157	宮	北小松	?	A1~?	△	△				不明	7.2		厚い板状				沖積	掘?	県教21→172-2	x字形の大型版? 縄文地太深沈線
5158	宮	北小松	結髪変形	A1~?	○	○	◎			不明	5	○		線			沖積	掘?	県教21→172-3	正中沈線。首飾り、背中刺痕列
5159	宮	北小松	大遮系統	A1?			△			小片	2.4	○	中空				沖積	掘?	県教21→172-4	「肩」。腰上円形文。工字文?
5160	宮	北小松	?	不明			△			小片	1.6						沖積	掘?	県教21→174-42	
5161	宮	北小松	大遮系統?	A1?	○					小片	2.4						沖積	掘?	県教21→175-1	抽象的。刻目列多用
5162	宮	北小松	大遮系統?	A1?				○		小片	3.2						沖積	掘?	県教21→175-10	腕多重線。手円形突起
5163	宮	北小松	類結髪?	A1~?			○	◎		不明	3	○					沖積	掘?	県教21→175-11	下半身平行線間刺突列。短足
5164	宮	北小松	※?	※?			○	○		不明	3.1						沖積	掘?	県教21→175-12	胴沈線多。脚刺突多
5165	宮	北小松	「土偶か」	不明			部位	不明		小片	2.5			輪積中空			沖積	掘?	県教21→175-14	隆帯上刻目列、大遮系統に似る
5166	宮	北小松	?	不明				?		不明	4.5	○					沖積	掘?	県教21→176-8	「脚」。前傾方向足突出?、反対側平行線
5167	宮	北小松	類結髪?	A1~?	△	△				不明	9.9	○	厚「中空」?				沖積	掘?	県教21→243-1	下と同一個体。背中竹管状刺突列
5168	宮	北小松	※	※	△	○	○			不明	11.4		厚「中空」?	バ			沖積	掘?	県教21→243-2	上と同一個体。パンツ縄文。背面文様多
5169	宮	北小松	大遮系統	C2 V?			△			小片	2.2		中空				沖積	掘?	県教21→244-2	「肩」腰? 磨消縄文
5170	宮	北小松	後期以来?	後期?			△			小片	3.8		中空	線			沖積	掘?	県教21→244-3	正中刻目隆帯。腹?貫通孔
5171	宮	北小松	後期以来?	後期?			△	△		小片	4.4		中空				沖積	掘?	県教21→244-4	腰刻目隆帯。背中に入組文?
5172	宮	北小松	土偶?	不明				?		不明	4						沖積	掘?	県教21→244-5	「左脚」。途中貼付剥落

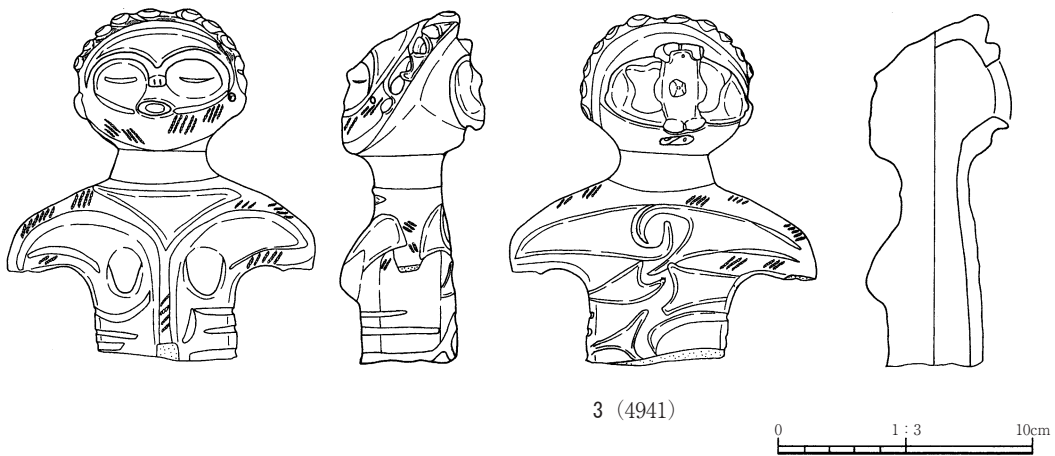
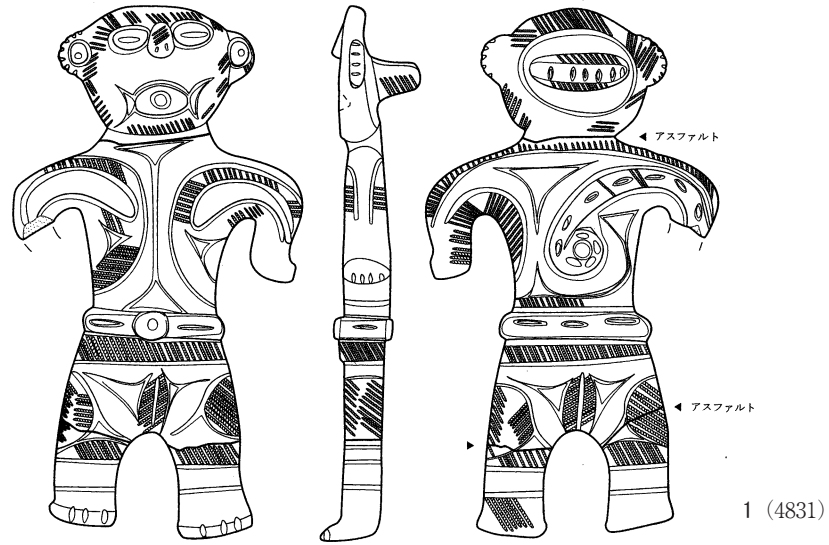
- 金子昭彦 2010d「縄文晩期・東北北部の土製耳飾(続)」『縄文時代』第21号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2011a「東北地方・縄文晩期の土偶(2)」『紀要』XXX (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2011b「北日本・縄文晩期の三角玉ほかの装飾品」『岩手考古学』第22号 岩手考古学会
- 金子昭彦 2011c「北日本・縄文晩期の花卉丸玉、平玉」『縄文時代』第22号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2012「東北地方・縄文晩期の土偶(3)」『紀要』XXXI (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2014「東北地方・縄文晩期の土偶(4)」『紀要』第33号 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2015a「東北地方・縄文晩期の土偶(5)」『紀要』第34号 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2015b「大洞C2式期・大型遮光器系列土偶の編年」『古代』第137号 早稲田大学考古学会
- 金子昭彦 2015c「縄文土偶の終わり」『考古学研究』第62巻第2号 考古学研究会
- 金子昭彦 2016a「東北地方・縄文晩期の土偶(6)」『紀要』第35号 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2016b「瘤付土器に伴う土偶の系列」『青森県考古学』第24号 青森県考古学会
- 金子昭彦 2016c「津軽海峡圏の装身具の変遷」『一般社団法人日本考古学協会 2016年度弘前大会第I分科会「津軽海峡圏の縄文文化」研究報告資料集』
- 金子昭彦 2017「多出遺跡から土偶の用途を考える」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀考古学の現在』六一書房
- 金子昭彦 2018「縄文土偶の二つの使い方」『青森県考古学』第26号 青森県考古学会
- 金子昭彦 2020「亀ヶ岡式的な土偶の広がり」『DOGU』第3号 土偶研究会(青森県成田滋彦氏)
- 金子昭彦 2021「亀ヶ岡式土偶に関する諸問題」『DOGU』第4号 土偶研究会(青森県成田滋彦氏)
- 五所川原市教育委員会 2006『五月女菴遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第27集
- 2017『五月女菴遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 2021『五月女菴遺跡・十三湊遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 小林圭一 2008「瘤付土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 佐藤祐輔 2015「IV. 7 東北」『弥生土器』考古調査ハンドブック12 ニューサイエンス社
- 「土偶とその情報」研究会 1996『土偶シンポジウム5宮城大会 東北・北海道の土偶II』
- 中門亮太 2013「東北地方北部における瘤付土器の基礎的研究」『古代』第131号 早稲田大学考古学会
- 宮城県教育委員会 1986『田柄貝塚II』宮城県文化財調査報告第111集
- 2021『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告第254集



第1図 青森県五月女遺跡の土偶
 (括弧内は表の番号)

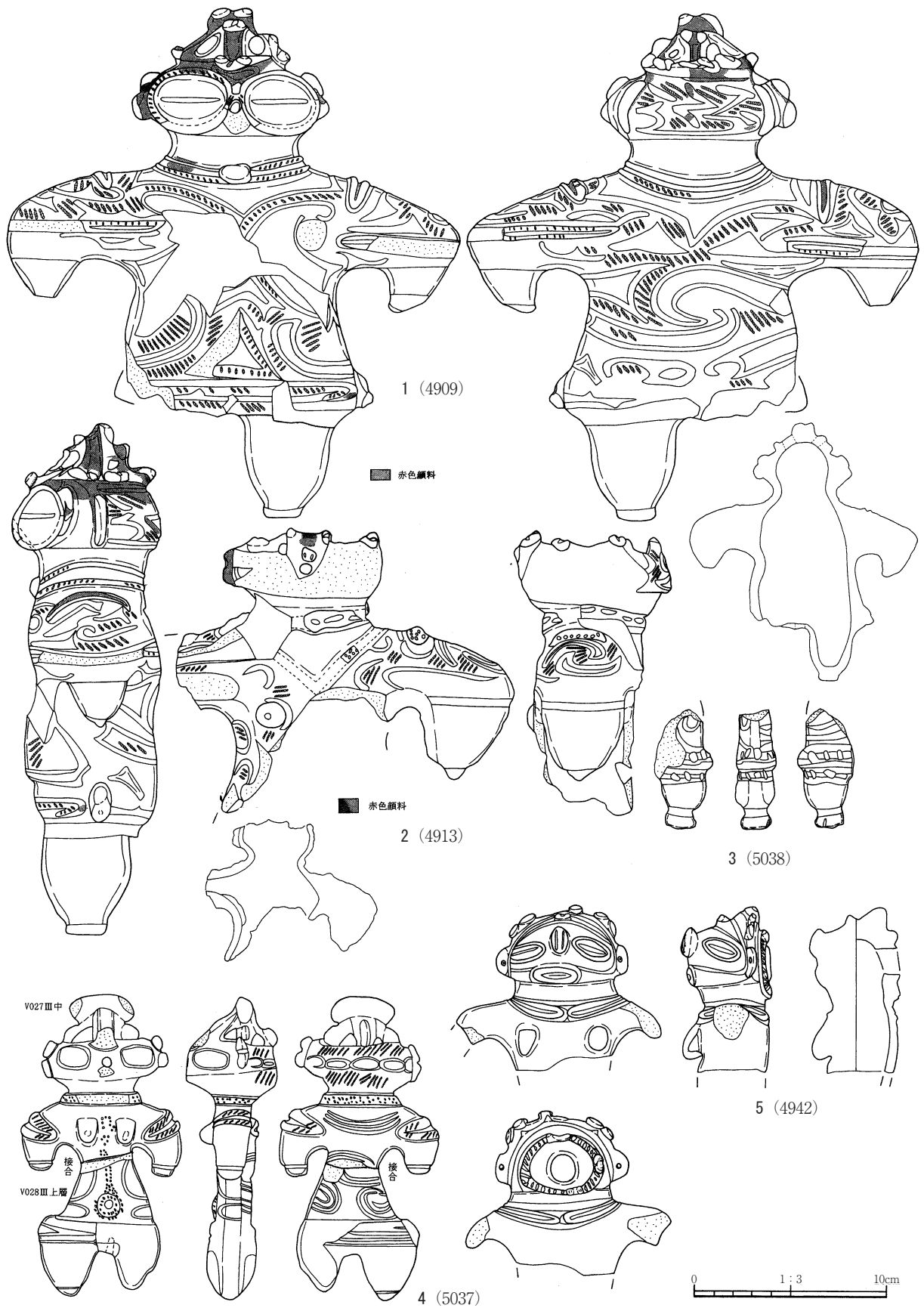


第2図 青森県川原平(1)遺跡の土偶(1)(後期末?)
(括弧内は表の番号)

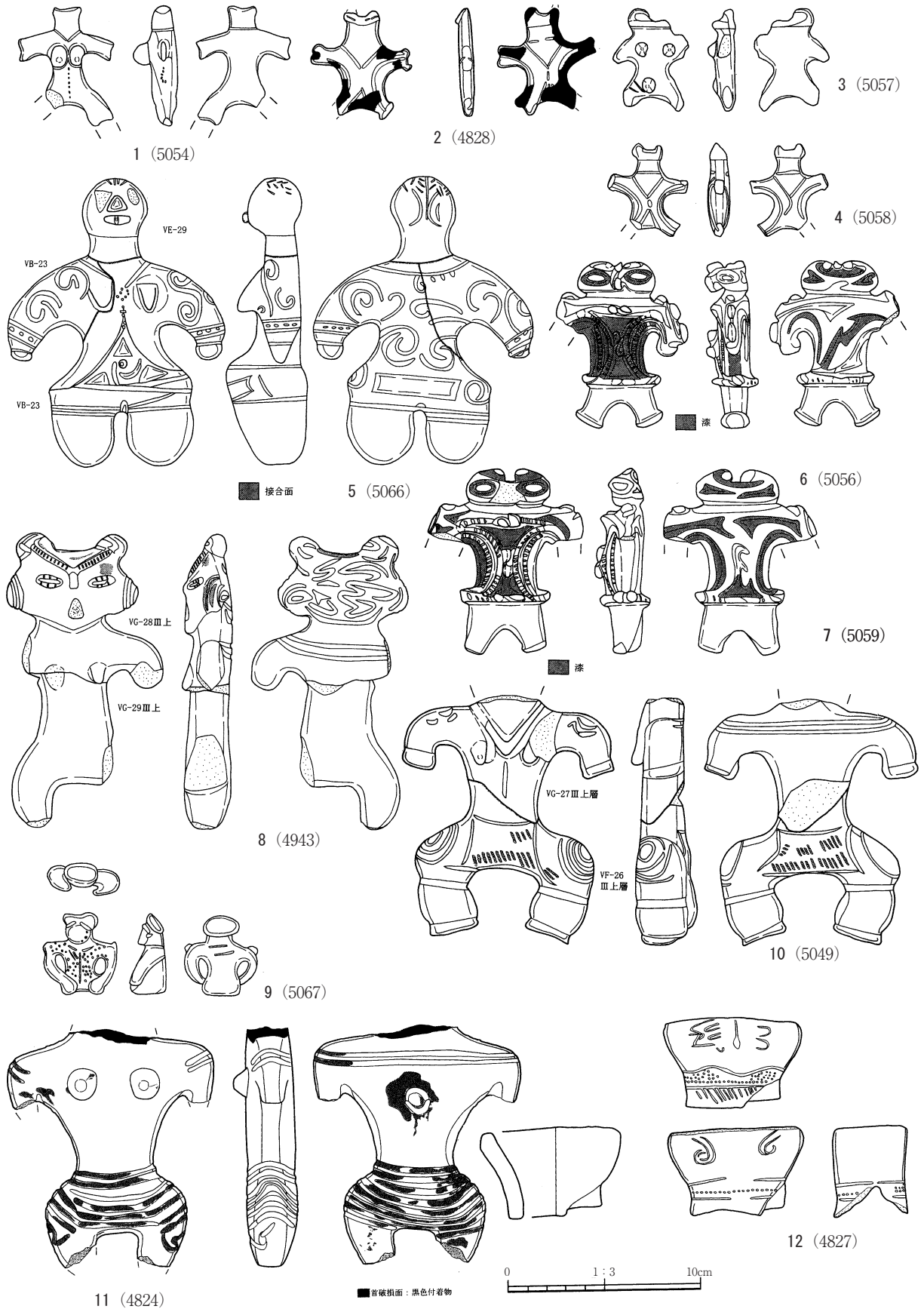


0 1:3 10cm

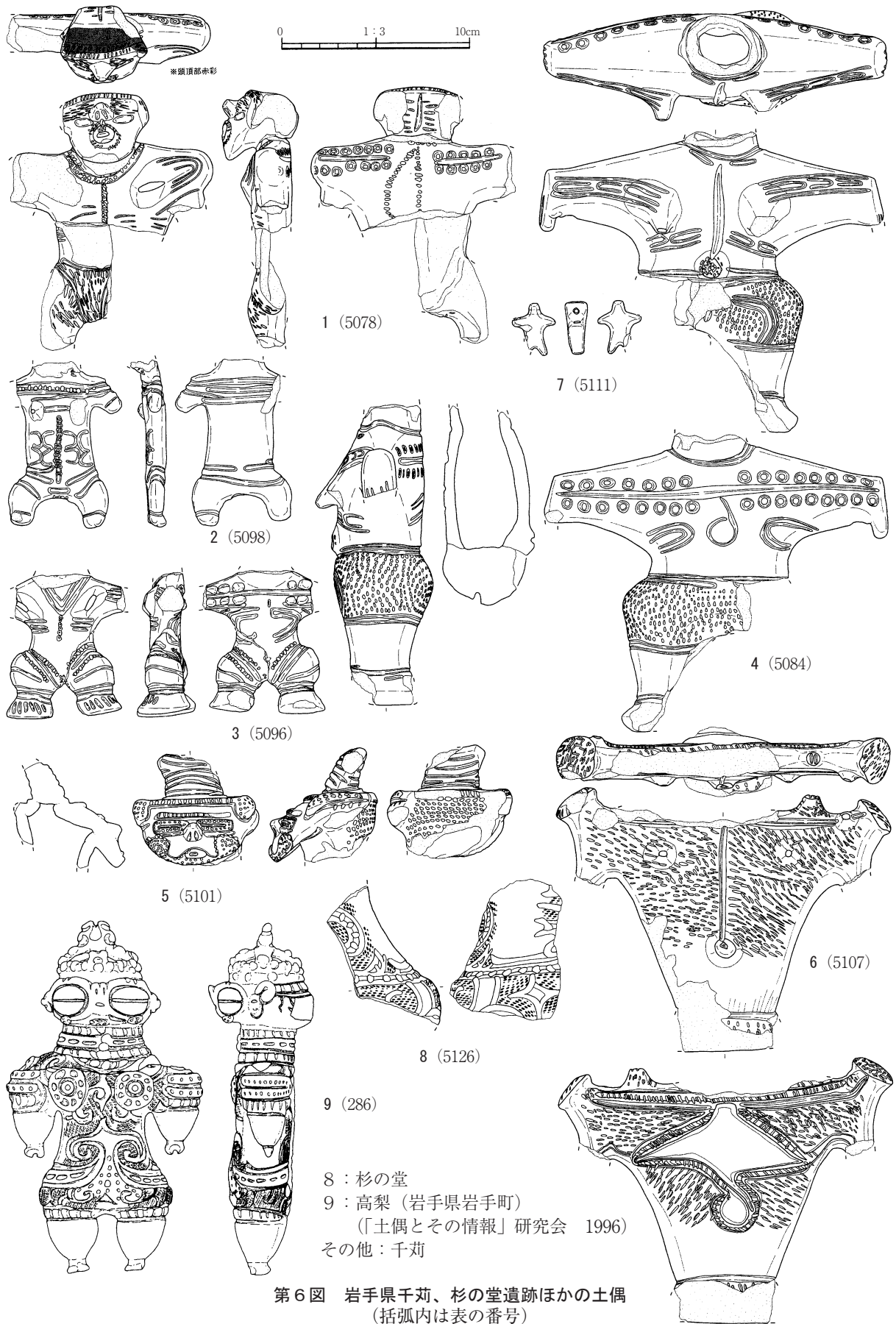
第3図 青森県川原平 (1) 遺跡の土偶 (2) (後期末～晩期初頭?)
(括弧内は表の番号)



第4図 青森県川原平(1)遺跡の土偶(3)(遮光器系列)
(括弧内は表の番号)



第5図 青森県川原平(1)遺跡の土偶(4)(晩期中～後葉)
(括弧内は表の番号)



第6図 岩手県千苺、杉の堂遺跡ほかの土偶
 (括弧内は表の番号)

東北地方北部における平安時代の雑穀利用に関する考古学的研究

福島 正和

平安時代の東北地方、特にその北部においては雑穀利用を示す考古資料が多く認められる。遺構では、平安時代の貯蔵穴が雑穀用であることを裏付ける発掘調査成果がみられつつある。また、遺物では、雑穀の穂首刈りをおこなうための道具であると想定される手鎌の出土や雑穀そのものの遺存体の出土が目される。これら遺構・遺物の考古学的な検討から平安時代の雑穀利用について考察した。また、これらの考古資料は、三陸沿岸地域北部から岩手県北部以北にかけて10世紀以降に増加する。この地域は、その後中世に盛行する「糠部」・「閉伊」といった著名な馬産地とほぼ重なるため、雑穀が馬匹生産における飼料として利用され、飼料の需要増が関連資料増の引き金となっていると考えた。

はじめに

稲作農耕が海を隔てた異世界より日本列島に伝来して以来、コメを主食とする稲作農耕文化は長い時間をかけて列島に浸透する。その一方で、農業技術の未熟さや気候・気象等を主要因とするコメの不作や稲作不適地の存在も歴史上看過できない事実である。その穴埋めとして、コメ以外の雑穀栽培と雑穀食文化は、列島の食の均衡を保つ役割を担ってきた。コメ以外の雑穀は列島における食の救世主だったのかもしれない。そして、現代においても冷涼な気候の地域で、ソバ食が伝統的な食文化として残っている事例などは、このような歴史的な背景の上に成り立つ文化なのである。

本稿で扱う平安時代の東北地方は、すでに全域で稲作文化圏となっているが、冷涼な気候である北部の地域については雑穀の利用もかなり多いと想定されている。これは歴史上、近世南部藩などが飢饉対策として雑穀生産の奨励をおこなった事例や、近代に至っても雑穀を多く栽培し、その備蓄によって主食であるコメの不足を補完してきた歴史からみても当然の想定であろう。特に、現代の岩手県は「雑穀王国」と呼ばれ、伝統的農業文化の振興、健康志向の高まり等の要請から改めて雑穀生産が進んでいる地域である。その結果、現在の岩手県は日本一の雑穀生産を誇っている。

平安時代の雑穀は、遺跡の出土資料等からみてアワ・ヒエ・キビ・ソバ・オオムギなどが代表的な品種であったと考えられる。これら雑穀の遺存体は、9・10世紀の焼失した竪穴住居や低湿地の遺跡などでまれに検出される。また、雑穀はその優れた保存性能から収穫、乾燥させた後、比較的長期保存が可能であるとされている。発掘調査でも穂首刈りされた雑穀が、地下式の貯蔵施設である貯蔵穴で保存されたとみられる事例があり、雑穀利用についてその姿を雄弁に物語っている。

本稿では、東北地方北部で展開する雑穀用の貯蔵穴やその収穫に使用されたとみられる穂首刈り手鎌を考古学的に検討し、平安時代の雑穀利用について考察する。さらに、この時代の雑穀栽培盛行の背景には、馬匹生産が大きく関わっている可能性を探ってみたいと思う。これは、飼育馬の飼料としての雑穀利用を想定してのことである。



写真1 現代の栽培アワ

1. 出土穀物からみた穀物利用

平安時代の遺跡出土のコメ（イネ）を含む穀物は、炭化したものが遺存しやすいこともあり、焼失した竪穴住居、カマド周辺などでしばしば検出される。これら検出された雑穀の地域的な様相や時期的な様相を把握する目的で事例を集めてみた。ただし、遺構の帰属時期等がおおむね明らかなものを選抜したものであり、決して網羅的なものではないことを断っておく。

（1）遺跡出土事例

岩手県盛岡市飯岡林崎Ⅱ遺跡

北上盆地北部に立地する古代の集落である。炭化したコメ（イネ）が塊状で出土したRA04竪穴住居跡では、籾のない玄米の状態ですべて出土しており、その場で調理される食料として残存していたと考えられる。また、DNA分析の結果から温帯ジャポニカに属すると報告されており、周辺で水田稲作が定着していたことが想定されている（佐藤洋 2004）。遺跡は、志波城に距離が近く、志波城の存続期から廃絶期にかけての集落であり、関連性が注目される。

岩手県宮古市松山大地田沢遺跡

岩手県沿岸北部に位置し、宮古湾から約4km内陸にある丘陵に立地する8世紀から9世紀代までの集落である。1号・2号・5号竪穴住居、3号土坑などで炭化種実が検出されており、コメ（イネ）、オオムギ、アワ、ヒエなどの穀物が認められる。これらのうち、9世紀前半の1号竪穴住居ではコメ（イネ）が卓越している。8世紀後半の2号・5号竪穴住居ではいずれもオオムギが他の穀物を圧倒している。ただし、平安時代と考えられる3号土坑でもオオムギが多く検出されている。

岩手県宮古市木戸井内Ⅳ遺跡

宮古湾から約3km内陸にある丘陵に立地する平安時代の遺跡である。焼失住居である7号竪穴住居で炭化穀物が多量に検出されている。これは9世紀前半の竪穴住居であり、コメ（イネ）もあるが、オオムギが多く検出されている点で近在する松山大地田沢遺跡と共通する。また、貯蔵穴と思われる7号土坑では、キビの割合が多いことが認められた。

岩手県九戸村江刺家遺跡

岩手県北部の九戸郡九戸村に所在し、段丘上に立地する集落遺跡である。FⅡ-1住居より炭化した穀類が多く出土している。この竪穴住居は焼失住居であり、炭化した建築材とともに床面より穀類が出土している。時期は10世紀後半あるいはそれ以降であると考えられる。炭化穀類はコメ（イネ）、アワ、アズキ、オオムギの4種である。また、雑穀ではアワが多く検出されているようである。検出量や組成比は不明であるが、複数種の穀類が竪穴住居内で保持されており、一緒に保管されていたことを物語っている。

岩手県九戸村外久保遺跡

九戸郡九戸村に所在し、標高350mの山地に立地する遺跡である。2018年に近在する黒山の昔穴遺跡との関連性を考慮し、部分的な発掘調査がおこなわれている。この調査では焼失したと考えられるSI02（竪穴建物跡）より多量の炭化材とともに炭化穀類がまとまって出土している。コメ（イネ）、コムギ、ヒエ、ソバなどが出土しており、コメ（イネ）がもっとも多い割合であり、その状態は脱穀された生の乾燥米であったとされる。この竪穴建物跡は、十和田a火山灰を切って構築されていること、出土した土師器甕より古くても10世紀後半の事例であると考えられる。

青森県八戸市林ノ前遺跡

青森県太平洋沿岸部に位置し、八戸市市街地より西側にある段丘端部に立地する10世紀後半から11世紀のいわゆる防御性集落と呼ばれる遺跡である。青森県教育委員会や八戸市教育委員会が調査をお

こなっており、200棟以上の竪穴住居や1,000基を遙かに上回る土坑が検出されている。竪穴住居や土坑より炭化穀物が出土している。炭化穀物はコメ（イネ）の割合が多いが、アワ・ヒエ・オオムギ・コムギなど多種多様な雑穀が竪穴住居や土坑などの遺構で検出されている。コメ（イネ）に関しては^{えい}穎が残存しておらず、脱穀済の生米が土坑内で保存されていたようである。生米であるとするれば、短期の保存で、なおかつ米俵や米袋などの有機質の入れ物に納められていたのであろうか。

青森県野辺地町向田（35）遺跡

下北半島付け根、陸奥湾を臨む段丘上に立地する遺跡である。10世紀後半から11世紀にかけての防御性集落と考えられている遺跡である。焼失した竪穴住居を中心に多くの雑穀類が検出されている。品種はコメ（イネ）、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエなど多種多様であるが、比較的コメ（イネ）の割合が高い。

青森県青森市熊沢溜池遺跡

青森市浪岡地区に位置し、台地に立地する遺跡である。10世紀中葉から後葉の竪穴住居や土坑等から炭化した穀物が多く検出されている。品種はコメ（イネ）、オオムギ、アワ、ヒエが認められるが、竪穴住居より塊状に炭化したコメ（イネ）が多数出土しており、米食でも食用方法を知るうえで重要な出土状況である。

青森県青森市郷山前山元遺跡

熊沢溜池遺跡に近い遺跡で、立地もほぼ共通する。10世紀中葉から後葉の土坑内よりおびただしい量の炭化したキビが出土している。炭化キビは果皮つきのまま塊状になっていることから袋のような容器に入れられた状態で炭化したものとみられる。また、キビのみならず炭化したアワも塊状で検出されている。



- 1 青森市朝日山（3）遺跡（10c 中～後）
- 2 野辺地町向田（35）遺跡（10c 後～11c）
- 3 青森市熊沢溜池遺跡・郷山前山元遺跡（10c 中～後）
- 4 八戸市林ノ前遺跡（10c 後～11c）
- 5 九戸村江刺家遺跡（10c 後）・外久保遺跡（10c 後）
- 6 盛岡市飯岡林崎Ⅱ遺跡（9c 前）
- 7 宮古市松山大地田沢遺跡（9c 前）・木戸井内Ⅳ遺跡（9c 前）

第1図 平安時代の東北地方北部主要な穀物検出事例

青森県青森市朝日山（3）遺跡

津軽、外浜地区に位置し、青森湾から約5 km内陸の段丘に立地する。いわゆる防御性集落とされている平安時代の遺跡である。9世紀後半から10世紀前半とされる竪穴住居（744号竪穴住居）床面より約5,000粒の炭化したコメ（イネ）が検出されている。また、その他複数の住居でもコメ（イネ）が同様に検出されている。また、隣接する朝日山（2）遺跡でも10世紀前半の竪穴住居からコメ（イネ）とわずかな雑穀類が検出されている。竪穴住居内での食料として保管されていたと考えられる。

（2）北東北平安時代穀物事情概観

平安時代の出土穀物について東北地方北部を広域的に概観したが、現段階で推測されることを大まかにまとめてみたい。盛岡市飯岡林崎Ⅱ遺跡の例をもとに9世紀前半、北上盆地北部の盛岡においても稲作がかなり浸透しており、竪穴住居の居住者たちは米食を基本としていたこ

とが推測できる。なおかつ、その背景には平野部で展開する水田経営があることも想定される。

次に、岩手県沿岸地域では、宮古市での多くの事例から9世紀段階でも米食がおこなわれており、一部オオムギ等の雑穀も食用として利用されていた可能性が考えられる。

9世紀代の様子は判然としないが、岩手県北部の中山間地域では、九戸村江刺家遺跡や外久保遺跡をみても、10世紀後半において、生米が竪穴建物内で保存されており、米食が日常であったことを物語っている。しかも、標高350mの山地にある外久保遺跡では、眼下の集落などから脱穀された生米が運び込まれていることが想定される。10世紀以降、丘陵に立地する生活空間では、穀物貯蔵を必要とし、八戸市林ノ前遺跡のように竪穴住居の数に比例して貯蔵穴とみられる土坑も多く作られ、そこではコメ（イネ）を含む穀物が保存されていたものと考えられる。すなわち、少なくとも10世紀後半には東北地方北部全域で米食を常食とする食文化を基本としていることが容易に想像できる。しかし、一方で、コメ（イネ）以外の雑穀も多く栽培されていることが想定され、一部の雑穀がコメ（イネ）の不足分を補完していたものと考えられる。

青森地域の太平洋沿岸地域では10世紀後半から11世紀にかけて存続するとみられる林ノ前遺跡で多くの穀類が認められ、この遺跡でみれば米食中心でありながらも、その他豊富な品種が栽培されていたことがわかる。一方、津軽地域ではコメ（イネ）と雑穀の双方が認められるが、竪穴住居でのコメ（イネ）の検出事例を考慮すると少なくとも9世紀後半には米食が中心であった可能性が高い。

主題となる雑穀の出土事例をみると、東北地方北部においては平安時代の雑穀の品種はアワ・ヒエ・キビ・オオムギ・コムギなどが主要な雑穀品目であったようであり、それらは当然のことながら畠作栽培の作物であったと考えられる。これらのうち、もっとも普遍的にみられる品種はアワ・ヒエであるが、アワが良好に残存するケースが多い傾向である。また、オオムギやキビは局所的に多量出土するなど、やや分布あるいは時期の偏りが認められる品種であるが、出土状況からコメ（イネ）の不足を補完する役割を果たしていたのは、これら穀類であった可能性が考えられる。

2. 雑穀の貯蔵施設

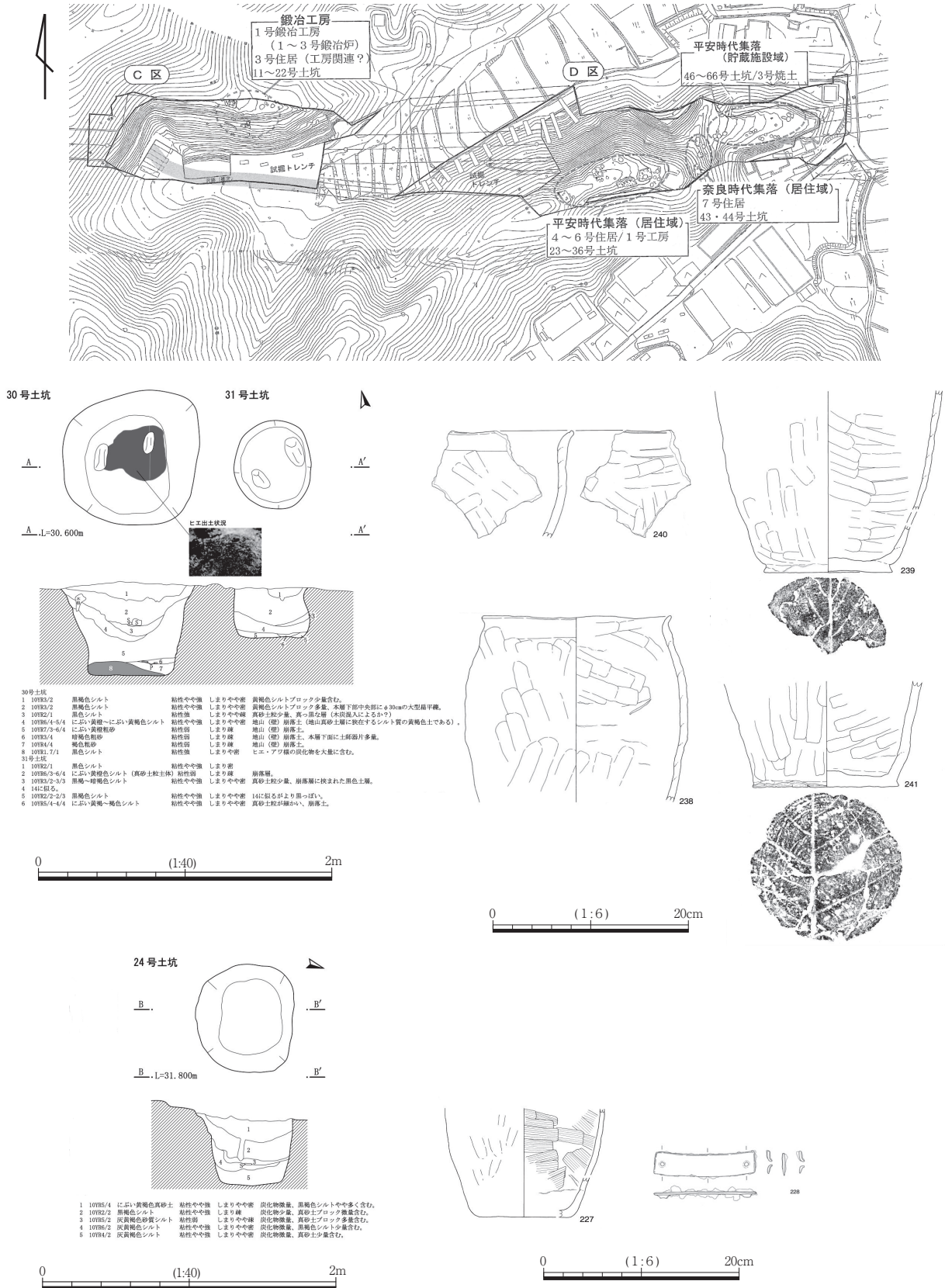
平安時代にも縄文時代のものに類似する貯蔵穴が存在し、それらの多くは穀類を保存するための施設であると考えられる。特に、一般的な歴史からみて、雑穀はその保存性能の良さゆえに備蓄に耐えうる。そして主食であるコメ（イネ）の不作等による不足分を補完してきた。つまり、平安時代の雑穀は作付け・収穫・乾燥を経たのち、保存・備蓄という基本的な流れとなることが想定される。保存性能を考慮し、穀物の出土状況を加味しても同様の貯蔵穴は大半が雑穀用であったと推定できよう。東北地方北部においては、その貯蔵について、近年その実態を示すような発掘調査成果が増えている。

（1）岩手県内沿岸地域の貯蔵穴

岩手県沿岸地域では、南は山田町、北は洋野町までの沿岸北部地域で認められ、この地域特有の遺構の一つであると考えられる。特に、近年の震災復興に伴う発掘調査で調査事例が大幅に増えた地域でもある。分布は、宮古湾周辺が特に濃密であり、平安時代の岩手県における古代貯蔵穴分布圏の主要な地域であると想像できる。

岩手県宮古市松山館跡

平安時代における雑穀の貯蔵形態をもっとも的確に現している例が、宮古市松山館跡で調査された貯蔵穴群である。松山館跡は中世城館として登録されていた丘陵に立地する遺跡であるが、平安時代の遺構も多く認められる。平安時代の貯蔵穴の一つである30号土坑は細い舌状丘陵の平場に位置する。この円筒形の貯蔵穴底面では、炭化した雑穀が良好な保存状態で出土している。調査で検出され



第2図 岩手県宮古市松山館跡の貯蔵穴と出土遺物

た炭化種実数は5,000粒に上る。穀類はすべて炭化しており、大半がアワでその他キビやヒエは混入であったと推測されている。また、この炭化アワは、穂がついた状態で貯蔵されていたと記載されている。ただし、食料としてアワを主体とした穀物利用であったということではない(吉川 2014)、と結んでいる。分析者は葉などが燃焼してしまった可能性も残しているが、より細かな穂の枝なども燃え尽きるのではないだろうか、と推論している。すなわち、穂先のみが塊状で炭化し残存するのは、穂首刈りされた結果そのものである。穂首刈りされた穂は乾燥を経た後、穂のままに貯蔵穴に入れられたと想像できる。少なくともここで収穫されたアワは根刈りではなく、穂首刈りによって収穫されたことが推測できる点で非常に重要である。さらに、穂首刈りされたアワは穂付き状態で乾燥され、その状態で貯蔵穴内に保存されたというプロセスが推測できる。この遺構からその他の平安時代の貯蔵穴群も雑穀を貯蔵する施設が多分に含まれていることを示唆している。この貯蔵穴内からは礫もいくつ出土しており、貯蔵穴の開口部を木製の蓋がされ、その上に「おもし」として使用されたのかもしれない。内部にあるアワの炭化、炭化材などの状況からこの地点で野焼きが実施された可能性がある。雑穀栽培のための野焼きかもしれないが、現段階では断定できない。その他の貯蔵穴にも底面に礫が出土した例がみられる。また、別の貯蔵穴では穂首刈り手鎌も出土している。貯蔵穴の多くは遺跡内で出土した土器から10世紀後半から11世紀の可能性が高い。

岩手県宮古市田鎖車堂前遺跡

松山館跡とは長沢川を挟んで隣接し、平野部に位置する。12世紀の堀を有する居館があり、堀外部地区にも12世紀の溝などの遺構がある。その堀外部地区で区画溝によって区画された内部の一角に20基からなる円筒形の土坑群が集中分布する。これらは貯蔵穴ではないかと現段階では推定している。いずれも9世紀代の堅穴住居を切って掘られており、中近世の柱穴等に切られている。すべて円筒形を呈し、壁面の土壌は脱色化が顕著であることから有機質の物質と直に接触していたものと考えられる。これは円筒形の土坑に曲物など木製の枠が存在した可能性を示唆している。埋土最下位の土壌分析の結果、ごく少量の雑穀(炭化したアワ・ヒエ・キビ)が土壌から検出されている(註1)。なお、この遺跡西側の丘陵にある田鎖館跡でも平安時代の貯蔵穴が多く検出されている。

岩手県宮古市青猿Ⅰ遺跡

ここでも平安時代と考えられる貯蔵穴が丘陵尾根頂部を中心に群をなして検出されている。古代の土器が埋土に混入するものもあり、なおかつ縄文時代の遺構・遺物がみられないため、検出されたほぼすべての貯蔵穴が平安時代のものである可能性が高い。平面円形のものであり、断面はピーカー形、フラスコ形などが認められる。有機質の内容物は検出されていないが、いずれも雑穀を主とした貯蔵穴であると考えられる。この遺跡では、居住域が限定的で住居数も決して多くないが、120基を超える数の貯蔵穴が認められる。穀物以外の堅果類用貯蔵穴も含まれるかもしれないが、住居数に対する貯蔵穴の数は必要以上に多く、異常な数と評価できる。また、切り合いが認められることやいずれも自然堆積であることから、かなり長期間繰り返し貯蔵穴が作られた結果とみることができる。

(2) 青森県内の貯蔵穴

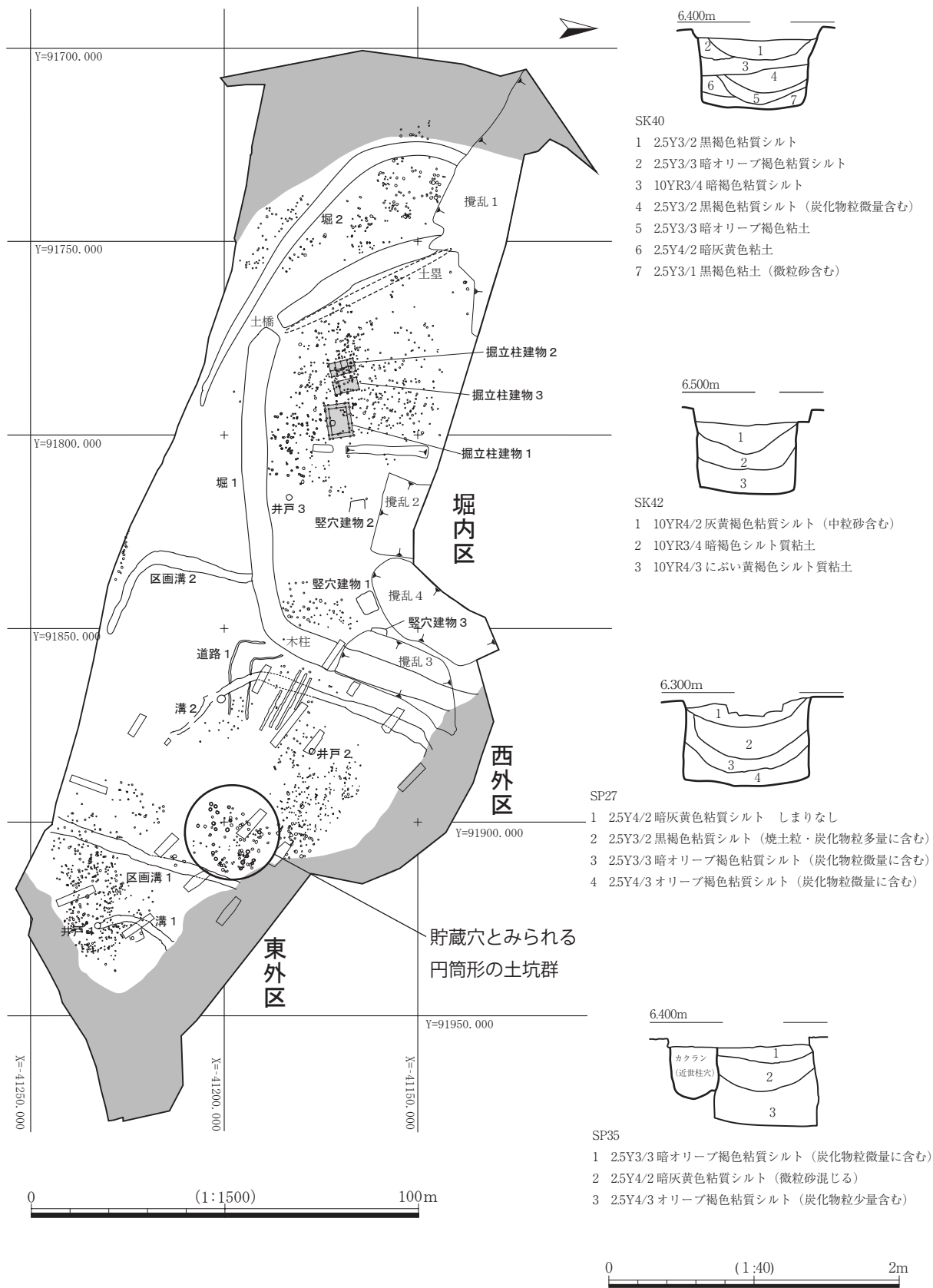
青森県域では八戸市林ノ前遺跡で検出された多数の貯蔵穴群が特に注目されるが、県内全域でほぼ普遍的にみられる遺構である。青森では大規模な集落域やいわゆる防御性集落で多く認められる。

青森県八戸市林ノ前遺跡

青森県東部に位置する八戸市にある林ノ前遺跡は、10世紀後半から11世紀のいわゆる防御性集落と呼ばれる遺跡の一つである。この遺跡では、堀で区画された外部に多数の貯蔵穴が分布している。大半が埋め戻されており、宮古湾周辺の遺跡でその多くが自然埋没していると考えれば、この様子は



第3図 尾根稜線上に群集する貯蔵穴群（岩手県宮古市青猿I遺跡）



第4図 12世紀の貯蔵穴群とおもな貯蔵穴断面 (岩手県宮古市田鎖車堂前遺跡)

特徴的である。これはこの遺跡の新陳代謝がより活発であることが想像される。平面円形の貯蔵穴以外に平面方形の貯蔵穴もみられる。

青森県青森市宮田館跡

青森市の平野に立地する平安時代の集落である。調査によって14号土坑と呼ばれる土坑より多量の農工具が出土している。これら農工具の中でもっとも多数を占めているのは、穂首刈り手鎌である。貯蔵穴と穂首刈り手鎌との関わりを如実に表す出土事例として注目される。

(3) 東北地方の貯蔵穴概観

平安時代の貯蔵穴について、いくつかの事例を取り上げた。岩手県域を含め、奈良時代の貯蔵穴検出事例が認められないことから、現段階ではこれら雑穀用貯蔵穴は平安時代以降に限定されるものと考えられる。なおかつ、岩手県の北上盆地や米代川流域を含む現在の秋田県域でもこれまで事例がなく、岩手県北半と青森県に、ある程度限定される。貯蔵穴は規模に違いはあるが、平面円形のものが多い。筒形あるいはフラスコ形を呈する。貯蔵穴の立地は、岩手県域で12世紀と推測される田鎖車堂前遺跡の事例を除くと、台地・丘陵・山地などで多く認められ、高い立地を好んで作られている様子が看取できる。特に、岩手県沿岸地域では居住域と離れている事例も多くみられる。この岩手県沿岸地域は、閉伊川流域両岸で検出事例が多く、古代貯蔵穴分布圏の一大中心地である。一方、青森県域では段丘上でみられるが、より高地にまでは及ばない傾向であり、なおかつ平野部にも存在する様相は、岩手県域と異なる。また、居住域と接して、あるいは居住域内に設けられるケースが多く、そのためか人為的に埋め戻された貯蔵穴が多いのも青森県域でみられる貯蔵穴の特徴であろう。上北地方では特有な方形の土坑が多く認められ(佐藤智 2004)、これらは南の八戸地域で方形と円筒形の両者が併存することから、円筒形の貯蔵穴と同じ機能を有する可能性もある。しかし、現段階ではこれらの性格については未だ確証を得ていない。宮古湾周辺や八戸市域では群をなして検出されており、拠点的な

第1表 東北地方北部のおもな平安時代貯蔵穴

岩手県	遺跡名	検出数	立地	時期	備考
山田町	クク井遺跡	9	丘陵	平安時代	
宮古市	荷竹日向Ⅰ遺跡	≒60	丘陵	9～10c	
宮古市	松山館跡	≒30	丘陵	10c後	うち1基で多量の炭化アワ出土。
宮古市	田鎖館跡	16	丘陵	9c後～10c後	
宮古市	田鎖車堂前遺跡	≒20	平野	12c?	古代以降馬骨。馬歯出土。
宮古市	千徳城遺跡群	4	丘陵	10c?	
宮古市	青猿Ⅰ遺跡	125	丘陵	10c?	
宮古市	近内館跡	≒40	丘陵	10c?	
宮古市	島田Ⅱ遺跡	≒60	丘陵	10c	
宮古市	隠里Ⅲ遺跡	5	丘陵	10c	
岩泉町	森の越遺跡	>=3	段丘	11c?	AMSで11c。(註2)
田野畑村	真木沢Ⅰ遺跡	7	丘陵	10c?	
野田村	新館遺跡	12	丘陵	10～11c?	堀で囲まれた空間の外側に点在。
洋野町	上のマッカ遺跡	1	丘陵	10c?	製塩工房に近在。
九戸村	外久保遺跡	2	山地	10c後	To-aを切る。
二戸市	大向Ⅱ遺跡	1	段丘	11c後	
二戸市	駒焼場遺跡	11	段丘	10c後	うち1基で多量の炭化アワ出土。
二戸市	五庵Ⅰ遺跡	16	段丘	10c	
二戸市	飛鳥台Ⅰ遺跡	>=3	段丘	10c	
青森県	遺跡名	検出数	立地	時期	備考
六ヶ所村	弥栄(4)遺跡	1	段丘	9c後～10c	
六ヶ所村	発茶沢遺跡	23	段丘	10c	
野辺地町	向田(35)遺跡	17	段丘	10c後	
東北町	赤平(2)(3)遺跡	>=10	段丘	10c後～11c前	
八戸市	牛ヶ沢(4)遺跡	≒10	段丘	9c～10c	
八戸市	岩ノ沢平遺跡	≒30	段丘	9c後～10c	
八戸市	林ノ前遺跡	≒1200	段丘	10c後～11c前	いわゆる防御性集落。炭化穀類出土。
八戸市	熊野堂遺跡	>=100	段丘	10c後～11c前	住居床面でウマ遺存体。
階上町	山館前遺跡	>=10	段丘	10c後～11c前	
青森市	宮田館跡	3	段丘	10c後	穂首刈り手鎌10点出土。
青森市	熊沢溜池遺跡	6	段丘	10c	
青森市	李平下安原遺跡	16	段丘	10c	
青森市	羽黒平遺跡	≒10	段丘	9～10c	
青森市	高間(1)遺跡	≒10	平野	10c	石江遺跡群
青森市	熊沢溜池遺跡	6	段丘	10c前	

地域周辺域はその群集密度が高い。これら貯蔵穴の増加する時代は、おおむね10世紀後半以降であるとみられる。特に岩手県北地域や青森市域では10世紀前半の火山灰を切って構築される例も多い。貯蔵穴内の雑穀は、宮古市松山館跡でみられたように、少なくともアワが穂首刈りによって収穫され、穂付きでの貯蔵が想定される。これは貯蔵穴と穂首刈り手鎌が、同一の遺跡で認められる事例が多いことも含め、両者の親和性が高いことを示している。

3. 雑穀の収穫

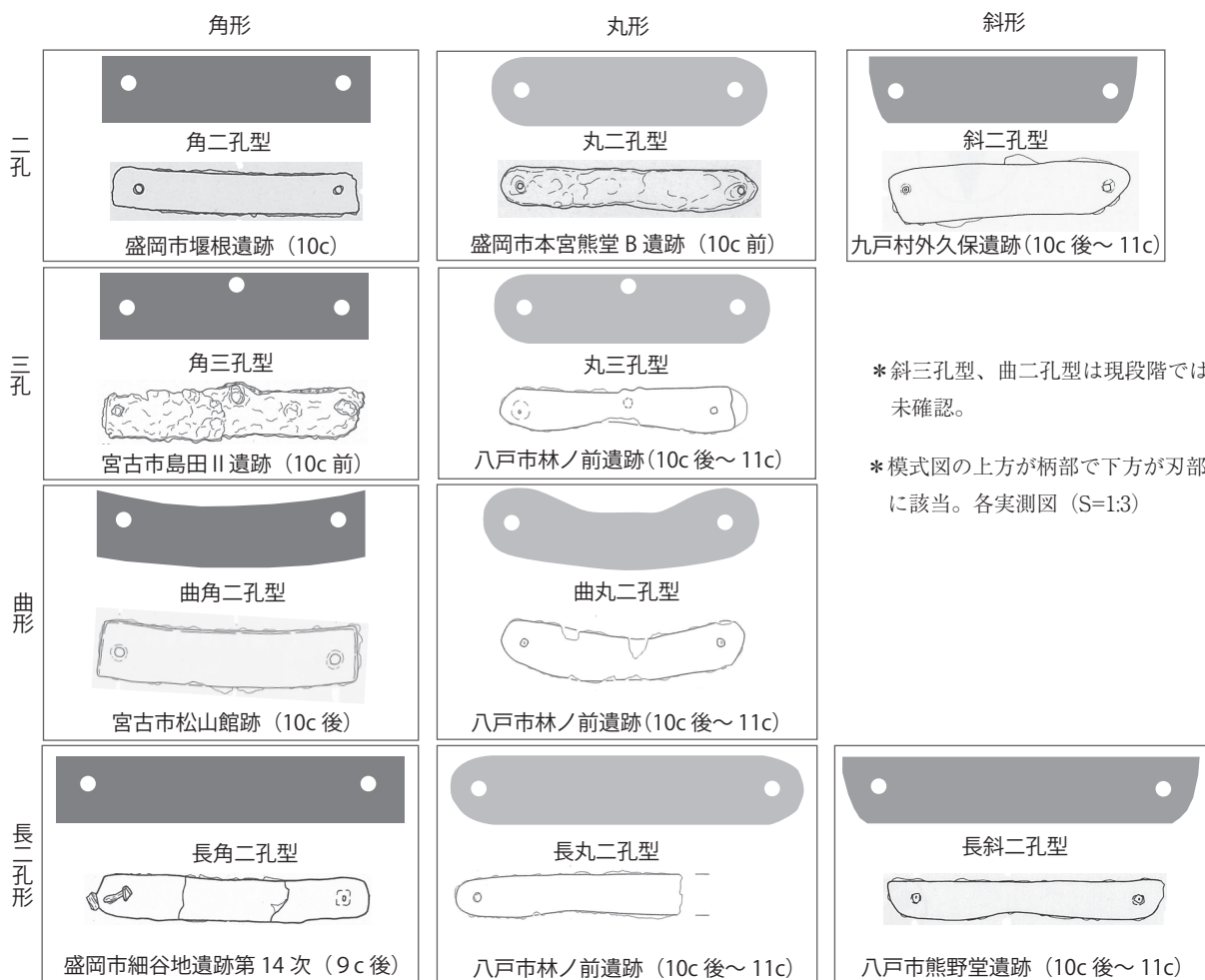
(1) 雑穀収穫の道具、穂首刈り手鎌

農業の機械化が進む以前の近代岩手県などで雑穀の穂を摘み取る手法がみられていたことを参考にすれば、平安時代の雑穀収穫も根刈りではなく穂首刈りが採用されていても何ら不思議ではない。前項で紹介した岩手県宮古市松山館跡の炭化アワ検出事例からも平安時代においてこの地域でアワが穂首刈りされていたことは明白である。そして、やはり松山館跡で貯蔵穴から出土した鉄製の穂首刈り手鎌は、平安時代の穂首刈り利器としての使用を想起させるに十分な検出事例である。このような穂首刈り手鎌は、木製握部に長方形の板状鉄製刃部を固定した利器である。この刃部本体と木製握部の固定法の違いにより2種の異なる形態が存在する。鎌両端部を折り曲げることによって、木製握部に装着する折曲式のもの、両端部に目釘孔を穿ち釘で留める釘留式のものに分類できるが、古代に属するものの多くは後者の釘留式である。古墳時代の鉄製品に折曲式に近い形態のものが認められることから、列島内において折曲式から釘留式へと装着方法が改良され、利器そのものも形態変化し、発展したとみられる。様々な呼称が用いられる利器であるが、使用目的や機能が限定されるという考えから、本稿では着柄の無い刃部だけの鎌については、用途・機能を冠した「穂首刈り手鎌」と呼称することとした。この時期の遺跡においては、根刈り用とされる通常の鎌も同時に出土する事例が多いことから、当時は根刈りと穂首刈りをそれぞれ使い分けられていたか、あるいは稲刈りや草刈りについては通常の鎌による根刈りがおこなわれていた可能性もある。

この穂首刈り手鎌は、関東では東北地方より古い段階での使用開始、そして早い段階での終焉が想定される。東北地方に接する栃木・茨城など北関東の事例を概観すると、遅くとも8世紀にこれら利器はすでに利用が始まっており、10世紀にはほとんど認められなくなるようである。一方、東北地方においては8世紀後半頃から平安時代にかけてこれらが利用される。このように穂首刈り手鎌の分布は関東から奈良・平安時代前半にかけてその分布範囲が北上する傾向が看取される。大局的にみれば、鉄製農具の普及過程が同様の傾向を示しており、穂首刈り手鎌もこれに適合すると考えられる。また、東北地方北部においても平安時代後半に使用のピークを迎え、中世以降姿を消すようである。

(2) 穂首刈り手鎌の形態分類

東北地方北部で出土した穂首刈り手鎌の形態的特徴を抽出、形態分類を試みた。なお、刃部が直線的なものと中央部分が内彎するものに分類できなくはないが、刃部が内彎するものは繰り返される刃研ぎによって研ぎ減りしたものと推測され、製作時の形態的特徴ではないと判断した。まず着目した形態差は、長辺が平均的な長さのものとより長いものの2種である。長いものは長辺がおおむね10cmを超えるものであり、6～9cmの平均的な手鎌より長いものである。出土数は多くないが、各地で点的にみられる。また、多出遺跡では平均的な手鎌と共判する事例も認められる。次に、注目されるのは柄部のラインが直線的なものと湾曲するものの2種、さらに目釘孔の個数と両端部の形状でも形態差が認められる。目釘孔数は両端に各1孔の二孔型が普遍的で、加えて数は少ないが両端と柄部側中心部に1孔の計3孔の形態も存在する。三孔型は長い形態に限定される傾向はみられない。両端部



第 5 図 穂首刈り手鎌の形態分類と出土事例

の形態は、角形、丸形、刃部に向け斜めに窄まる斜形の 3 種に分類可能である。分類した穂首刈り手鎌の空間的な位置関係を確認すると、岩手県の北上盆地や沿岸地域では、両端部角形で目釘 2 孔の形態を持つものが多い傾向である。岩手県北部や青森県域では、その他の形態の手鎌が混在し、岩手県北部で角形がわずかにみられるが、これより北の地域すなわち、青森県域では、角形はほとんど認められない。また、他地域より少ない出土数であるが、秋田県域の米代川上流域も青森県域に近い傾向を示している。すなわち、角形は東北地方北部でもより南に位置する岩手県域特有の形態である可能性があり、今後系譜を探る手がかりとなる。

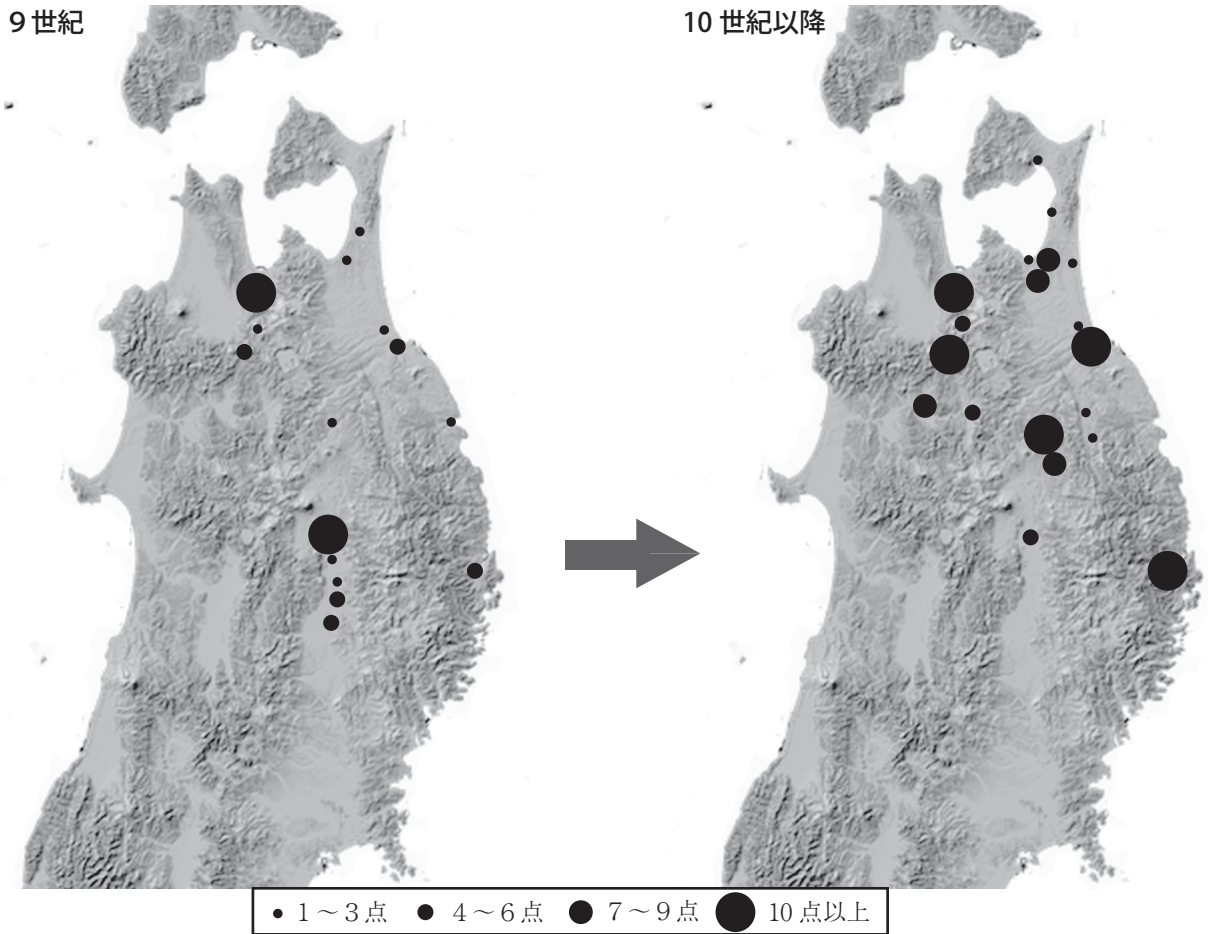
(3) 穂首刈り手鎌の出土傾向

東北地方北部の穂首刈り手鎌の大まかな消長と分布は、北上盆地全域で 9 世紀に最盛期を迎え、10 世紀に入るとかなり少数となり、北上盆地北端の盛岡地域で 10 世紀以降も少数みられるが、これより南の地域では認められなくなる。盛岡地域も 11 世紀の盛岡市赤髪遺跡以外は、10 世紀後半にはほぼみられなくなる。一方、10 世紀以降は、これら穂首刈り手鎌の出土数は沿岸北部および岩手県北より北の地域において増大する。しかし、津軽地方はすでに 9 世紀から一定量みられ、10 世紀から 11 世紀まで安定的に継続してみられる点で他地域とは大きく様相が異なる。これについては、何らかの要因があるものと想像されるが、現段階では明確な答えを持っていない。

以上のように、東北地方北部における穂首刈り手鎌の全体的な傾向として、9 世紀代は、北上盆地・津軽平野・八戸地域で使用が開始され、その後 10 世紀に岩手県沿岸地域、岩手県北部および、秋

第2表 東北地方北部穂首刈り手鎌出土遺跡一覧

No. 岩手県	遺跡名	出土数	時期	No. 青森県	遺跡名	出土数	時期
1 盛岡市	芋田Ⅱ遺跡	1	9c後	42 むつ市	最花南遺跡	1	10c前
2 盛岡市	本宮熊堂B遺跡13次	3	9c後～10c前	43 おいらせ町	下谷地(1)遺跡	1	10c
3 盛岡市	細谷地遺跡14次	2	9c後	44 おいらせ町	中野平遺跡	2	9c
4 盛岡市	細谷地遺跡9・10次	2	9c中～後	45 六ヶ所村	発茶沢遺跡	1	10c
5 盛岡市	細谷地遺跡13・14次	1	9c後	46 六ヶ所村	弥栄平(4)遺跡	1	10c
6 盛岡市	小幅遺跡	1	9c前	47 七戸町	倉越(2)遺跡	1	10c後
7 盛岡市	館遺跡	2	9c前	48 七戸町	猪ノ鼻(1)遺跡	4	10c
8 盛岡市	前野遺跡	1	9c前	49 東北町	赤平(2)・(3)遺跡	9	9c後～10c後
9 盛岡市	堰根遺跡	1	9c後	50 横浜町	林ノ脇遺跡	2	10c後
10 盛岡市	赤裳遺跡	1	11c	51 野辺地町	向田(35)遺跡	1	10c後
11 遠野市	高瀬Ⅱ遺跡	1	8c後	52 八戸市	林ノ前遺跡	27	10c後～11c
12 矢巾町	徳丹城跡	1	9c前	53 八戸市	見立山(2)遺跡	1	9c後
13 花巻市	大西遺跡	2	9c	54 八戸市	岩ノ沢平遺跡	2	9c後
14 北上市	千刈遺跡	2	9c前	55 八戸市	砂子遺跡	6	9c後～10c前
15 北上市	中村遺跡	3	9c前	56 八戸市	潟野遺跡	1	8c
16 北上市	上川岸Ⅱ遺跡	1	9c後	57 八戸市	熊野堂遺跡	16	10c
17 奥州市	力石Ⅱ遺跡	2	9c後	58 平川市	李平下安原遺跡	11	10c
18 奥州市	落合Ⅲ遺跡	1	9c前	59 平川市	鳥海山遺跡	4	9c後～10c前
19 奥州市	南矢中遺跡	1	9c前	60 平川市	大平遺跡	10	10c前
20 奥州市	林前遺跡	1	9c前	61 平川市	古館遺跡	26	10c～11c前
21 宮古市	松山館跡	1	10c後?	62 平川市	砂沢平遺跡	4	10c～11c前
22 宮古市	長根Ⅰ遺跡	2	9c後～10c前	63 黒石市	赤坂遺跡	1	9～10c前
23 宮古市	千徳城遺跡群	1	10c?	64 黒石市	高館遺跡	3	10c
24 宮古市	田鎖館跡	1	10c	65 青森市	寺屋敷平遺跡	1	9c後～10c前
25 宮古市	田鎖車堂前遺跡	3	9～12c	66 青森市	高屋敷館遺跡	1	11c
26 宮古市	島田Ⅱ遺跡	7	9c後～10c	67 青森市	山元(1)遺跡	5	10c
27 宮古市	山口駒込Ⅰ遺跡	1	9c	68 青森市	山元(2)遺跡	3	9c後～10c前
28 宮古市	八木沢Ⅱ遺跡	2	10c?	69 青森市	野尻(4)遺跡	6	10c前
29 宮古市	隠里Ⅲ遺跡	1	10c後	70 青森市	野木遺跡	12	9～10c前
30 宮古市	松山大地田沢遺跡	1	9c	71 青森市	三内遺跡	15	10c前
31 宮古市	荷竹日向Ⅰ遺跡	3	10c	72 青森市	源常平遺跡	3	10c前
32 久慈市	中長内遺跡	1	9c後?	73 青森市	宮田館跡	10	10c後
33 二戸市	駒焼場遺跡	3	10c後	74 青森市	熊沢溜池遺跡	3	10c前
34 二戸市	大向上平遺跡	1	10c前	No. 秋田県	遺跡名	出土数	時期
35 二戸市	飛鳥台地Ⅰ遺跡	10	9～10c	75 鹿角市	太田谷地館跡	4	10c後～11c
36 一戸町	上野遺跡	4	10c前～後	76 大館市	上野遺跡	1	10c
37 一戸町	田中遺跡	1	10c	77 大館市	土飛山館跡	1	10c後～11c
38 一戸町	大平遺跡	2	10c後	78 大館市	扇田道下遺跡	1	10c後
39 一戸町	一戸城跡(川原田平)	1	10c	79 大館市	釈迦内中台Ⅰ遺跡	8	10c後～11c
40 軽米町	皂角子久保Ⅳ遺跡	1	10c前	80 大館市	大館野遺跡	3	10c前
41 九戸村	外久保遺跡	3	10c後				



第6図 東地方北部における穂首刈り手鎌出土数の推移

田県米代川上流域、青森県全域に広がることを推測される。また、形態的には岩手県北上盆地から岩手県沿岸地域や県北地域へと波及する一方で、津軽地方から東や南へ波及する流れも想定される。

穂首刈り手鎌の秋田県域における分布は、県北部の八郎潟および米代川流域に偏在している(柴田 2011)。一方、青森県域では、県内全域で多くの穂首刈り手鎌が出土している(齋藤 2011)が、津軽地方については9世紀から出土、10世紀に県全域で認められる。岩手県では、9世紀に北上盆地、10世紀以降沿岸および県北地域に展開する。10世紀以降、貯蔵穴検出事例の無い北上盆地や秋田県域を除き、穂首刈り手鎌と雑穀貯蔵穴の分布域はほぼ一致する(第8図左参照)。貯蔵穴と穂首刈り手鎌との密接な関係性が推測される事象である。さらに、両者の分布域の大半が中世以降の著名な馬牧であることに注目したい。この雑穀を取り巻く事象は、雑穀栽培と馬匹生産の間に何らかの相関関係を見出すことが可能なのではないだろうか。次節では、おもにこれらの相関関係について探ってみたい。

4. 雑穀利用と馬匹生産

(1) 文献史料にみられる雑穀飼料

馬の飼育で雑穀飼料に関する記載が認められる文献史料のうち、もっとも直接的な表現は、大宝律令(701年)に規定された「厩牧令(くもくりょう)」であろう。この令の第一条では馬牧において飼育される細馬(上級馬)一頭に一日一升の粟(アワ)を給餌することが、稲・豆・塩などその他の飼料とともに規定されている。さらに、中馬(中級馬)は稲・豆・塩を給餌、驚馬(下級馬)には稲一升のみを給餌するという規定となっている。もちろん、その他の干し草など草本飼料は各馬に別途

給餌されているようである。この厩牧令から、アワを給餌されるのは上級馬のみということが読み取れ、飼料としてのアワが非常に重宝され、特別視されていたことが明らかである。これは馬のためだけに雑穀用耕作地を用意することで、水田経営など人間の食料供給を圧迫することを避けるためかもしれないが、少なくとも8世紀頃の管理牧においては、飼育馬の全頭に雑穀を与えるわけではないようである。飼育馬に対して3つのランク付けがなされて管理されていることも興味深い。

万葉集にもいくつか関連する歌が認められる。万葉集巻14-3451に「左奈都良の丘の粟蒔き愛しきが駒は食ぐとも我はそとも追じ」とある。左奈都良(さなつら)の丘にアワを蒔いているが、愛(いと)しい人の乗る馬が食べてしまうかもしれないけど、私は追い払わない」という内容の歌である。これは直接雑穀飼料を示すものではないが、ウマがアワを好んで食べることを示唆する内容である。また、「左奈都良の丘」は現在確定的な比定地はないが、「丘」という表記から地形は段丘上であると推測される。このような地形面に粟畑があったことを知ることができる。万葉集巻12-3096・14-3537には、双方ともに「馬柵越しに麦食む駒」とある。馬が立ち入らないようにするためなのか麦畑に柵が巡らされている。しかし、柵越しに馬が首を伸ばして畑の麦を食べる情景が描写されている。これも直接雑穀飼料を示すものではないが、おそらく食用麦の畑と馬の放牧地が隣接している様子を示しているのではないだろうか。同時に、放牧されたウマがムギを好んでいることを示唆する表現である。奈良時代において、地方の人里で馬が放牧されている様子が想像される。

以上のように、古代の文献史料においても飼育馬と雑穀は密接な関係があり、特にアワは特別な飼料であったことがわかる。やはり古くから馬匹生産において飼料としての雑穀が利用されており、それが必要不可欠であったことは明らかである。当然のことながら、平安時代の一大馬産地と目される東北地方北部でもアワが飼育馬の飼料として給餌された可能性は高い。すなわち、大規模産業としての馬匹生産の展開は、アワなど雑穀類の需要を異常なまでに増大させることが容易に想像できよう。

(2) 理化学的な分析の成果

雑穀飼料と出土馬との関係性を知るうえで、重要な分析がいくつかなされている。古代都城の出土馬を対象に分析した山崎健らの分析が大いに参考となる(山崎ほか 2016)。また、植月学・覚張隆史らは北東北の中世馬生産について、あるいは本稿でも再三取り上げた八戸市林ノ前遺跡出土馬の分析から飼料についても言及している(植月ほか 2020)。特に、近年は出土したウマの歯に帰属するエナメル質から炭素同位体比を用いて、主要な飼料について大まかに知ることができる。C3植物食者、C3・C4植物中間食者、C4植物食者に分類される。C3植物は干し草、木の葉、青草、稲、豆、麦であり、C4植物は粟、稗、黍などが含まれている。ここで重要なのは、同じ穀物であってもコメ(イネ)・オオムギ・コムギのグループとアワ・ヒエ・キビなどのグループに分かれるということである。つまり、C3植物を主として食したウマはより野生に近い状況下で生育した可能性が高く、一方でC4植物を主として食したウマは雑穀飼料を給餌され手厚い庇護下で生育したものと推測される。これらC3およびC4の振り分けは生育環境が大きく異なることが想定される。なお、藤原京ではC3食物者、C3・C4中間食者がそれぞれ確認されているという。少なからずC4植物の給餌されたことが考えられる個体は、一定量栽培雑穀の給餌が施された飼育であったと想像できる。同様の分析で、八戸市林ノ前遺跡出土馬では、C3植物食者とC3・C4中間植物食者に分かれた結果が得られたようであるが、意外なことにC4植物食者に分類される個体は認められなかったようである。この遺跡ではウマの解体痕跡の認められる骨もあり、遺跡内でウマの解体もおこなわれているようである。食用の可能性もあるが、むしろ馬具などに用いられる皮革やその他油脂・脳髓など二次的な利用に与すると推測される。このことは遺跡内で金属加工の工房や関連遺物が認められる点でも蓋然性が高いと思われる。

る。おそらく、馬具の製造等にも解体馬は二次的に利用されていたのであろう。したがって、この遺跡で出土した個体の多くが、死後解体用個体として持ち込まれていた可能性が考えられる。この場合、遙か昔の厩牧令の規定からすれば、これら個体は「驚馬」にランクされる個体である可能性が高く、当然のことながら栄養価の高いアワ・キビなどの雑穀飼料が積極的に給餌されてこなかった想定が成り立つ。このような状況を呈する背景には豊富なウマの生産があり、それゆえに解体や二次利用が可能なのであり、平安時代の八戸地域が一大馬産地であることを裏付ける。同時に、この遺跡がその馬匹生産の管理部門や関連産業を担っていたと考えられる。

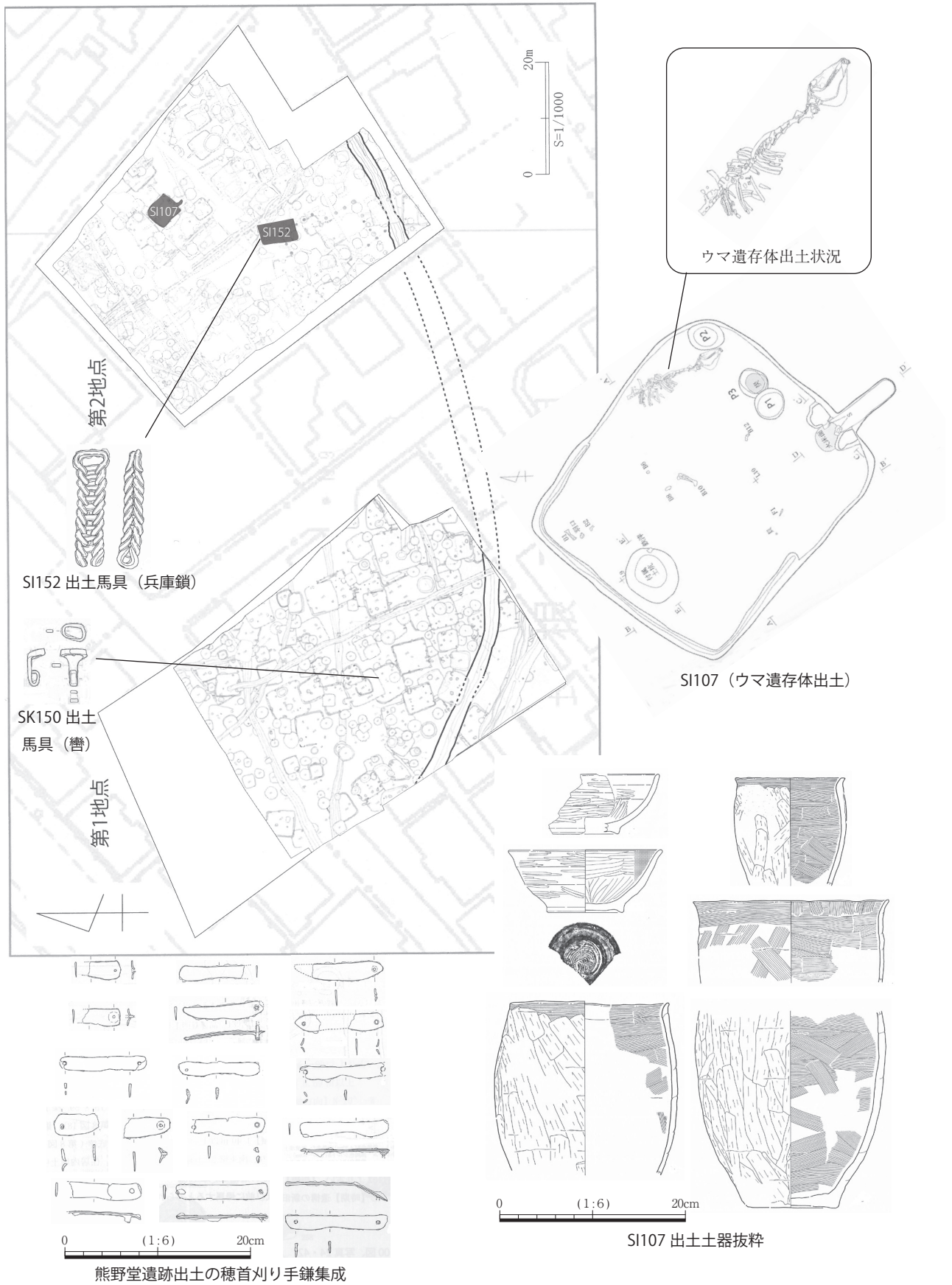
(3) 飼料としての雑穀

多方面からのアプローチでも古代において雑穀が飼育馬の飼料となっていることが明らかであり、雑穀に関する考古資料もそれを裏付けるかのように分布することを述べてきた。特に、岩手県閉伊川流域の山中にみられる雑穀貯蔵穴は居住域に分布しないことが多く、群として構成される。貯蔵穴周辺に同時期の居住域が希薄なことも多く、在地住民の食用としての備蓄というよりも馬匹生産に要する飼料として貯蔵されたと考えられる。これら地域の竪穴住居でも米食が基本となっていることがわかり、仮に食用の雑穀があったとしても、それは補助的なものに過ぎない。すなわち、雑穀貯蔵穴の盛行は、馬匹生産に関わる飼料として雑穀が急激に増産された可能性を示す。そして、雑穀飼料はおもにアワが利用されていたと想定される。さらに、アワは乾燥した土壌を好むことから栽培には立地的好条件を備えている。宮古市松山館跡では、炭化アワの出土から野焼きの可能性を指摘した。これは焼き畑の可能性もあるが、近世以降の放牧地で野焼きがなされた事例から、その可能性も候補に入れておきたい。これら丘陵上では森林の伐採がおこなわれ、比較的開放的な尾根頂部となっていたものと考えられ、放牧が尾根上でもおこなわれた可能性もある。また、内陸と異なり降雪量が少ないことも冬場の放牧が可能である点で好条件である。これは一定の管理をおこなえば、草本類は顔を出しており、それを食む放牧馬にとっては願ってもない状況を生み出すことが想定されるからである。

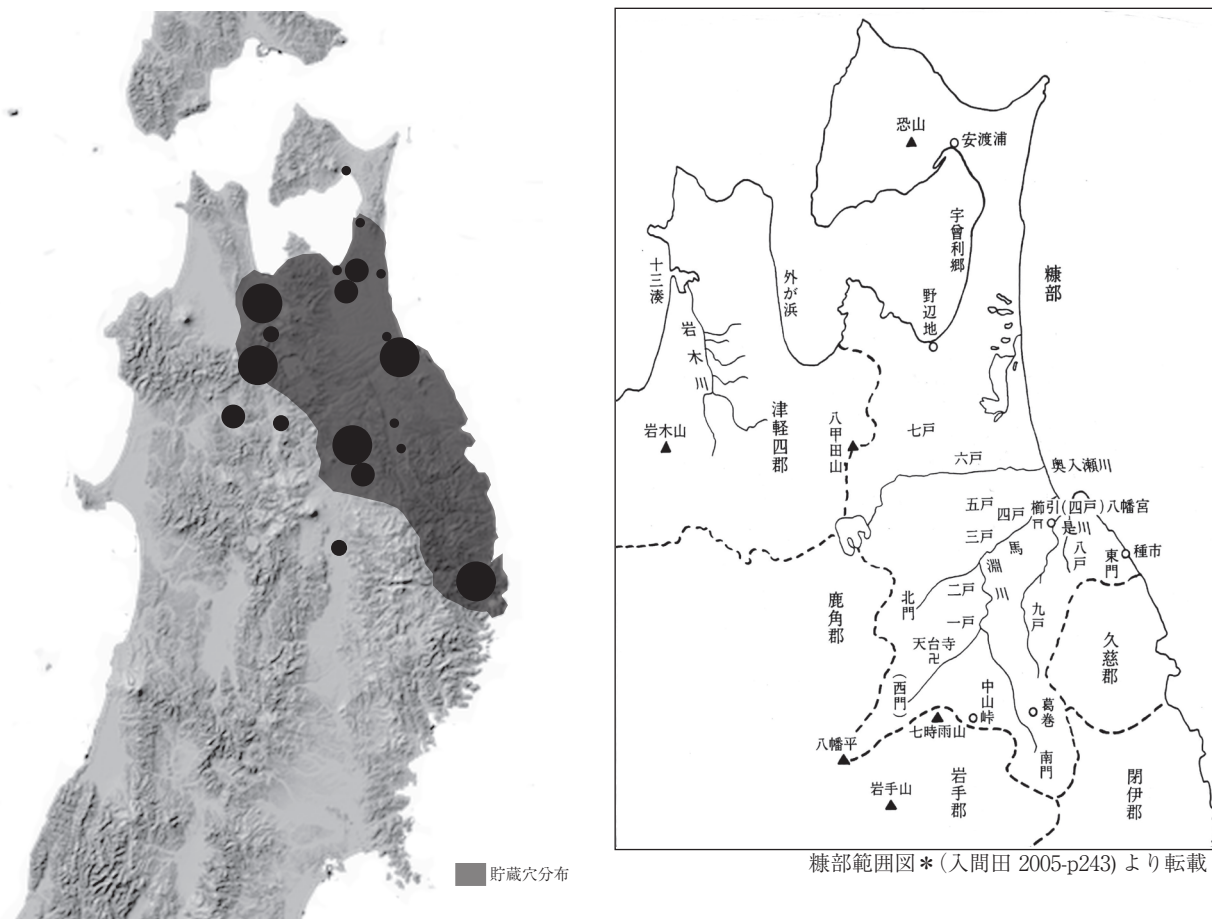
平安時代のウマと雑穀との関係性を示す居館の存在も重要であり、馬匹生産の管理部門を垣間見ることができる。今回取り上げた宮古市田鎖車堂前遺跡や八戸市林ノ前遺跡が管理部門を担っている可能性が高い。それ以外にも、青森県八戸市熊野堂遺跡で近年興味深い事例が報告されている。この遺跡は馬淵川南西の低位段丘に位置する遺跡である。発掘調査では、遺跡を何らかの意図で区画する大溝が走り、遺跡内には無数の竪穴住居、土坑が検出されている。立地こそ異なるが、林ノ前遺跡と非常に酷似している。筆者はこれら検出された土坑群の多くが形態的特徴から雑穀貯蔵穴であると考えている。遺跡内での出土遺物には総数16点を数える穂首刈り手鎌や馬具である兵庫鎖・轡などが出土している。また、多数検出された竪穴住居のうち1軒では、床面に遺棄されたウマ遺存体が良好な形で出土している。遺跡の主たる時期は10世紀後半から11世紀とみられ、林ノ前遺跡と同時期である。本稿で想定してきた考古資料が揃っており、まさに馬匹生産を如実に物語る遺跡であると評価できる。この遺跡は居館である可能性も想定されており(八戸市教育委員会 1989・2016)、この遺跡もまた林ノ前遺跡のような馬匹生産の管理部門を担っていた可能性がある。

(4) 「糠部」・「田鎖牧」の前身と「陸奥交易馬」

これまでの研究では、松本建速が雑穀文化と馬匹生産との関係性について言及しており、古代東北地方北部の自然環境や気候・風土・土壌等に着目し、7世紀末から8世紀前葉の末期古墳の時代から「稲作よりも馬飼および雑穀栽培に適した土地を選択したのである」と指摘している(松本2006)。加えて、杉山陽亮は青森県では八戸市丹後平古墳群の出土馬に幼馬が含まれることや周辺遺跡を含め馬具の出土を理由に、この時代から東北地方北部で馬産がおこなわれていると想定した(杉



第7図 青森県八戸市熊野堂遺跡ウマ遺存体を取り巻く遺構・遺物



第8図 10世紀以降の貯蔵穴・穂首刈り手鎌の分布と中世馬産地（糠部・久慈・閉伊）

山 2008)。岩手県でも、末期古墳である山田町房の沢古墳群でウマの埋葬が認められるため、青森県域と同様岩手県沿岸地域においてすでに馬産が始まっていることを示唆している。東北地方北部での馬匹生産は、8世紀にはすでに展開していたとするのが妥当な判断であり、この地域における馬匹生産の「萌芽期」を8世紀に求めることができる。これは『大宝令』『厩牧令』の時代である。なお、これらの事例が中世の「糠部」や「閉伊」といった地域に含まれていることは非常に示唆的である。次に「厩牧令」の時代から国家による法制化された馬匹生産は、平安時代、『延喜式』に記されるようにその管理体制が改変される。『延喜式』の「諸国牧」は畿内より離れた地域での馬匹生産体制の整備であり、これらは兵部省の管理下に置かれる(山口 1986・小林 1996)。すなわち、これは地方産出軍馬の徴発強化にほかならない。一方、左右馬寮管轄の「御牧(勅旨牧)」も地方には並立している。馬牧の主体的な地域は、前代から引き続き信濃・甲斐・関東であり、東北地方北部での馬匹生産は9世紀代においても萌芽期を脱していないとみられ、これも考古資料と合致する。

しかし、10世紀以降の文献では「陸奥交易馬(むつきょうやくめ)」という文言が登場する。これは、陸奥国で良馬を購入し、毎年20頭もの「貢馬(くめ)」を京進することである。この交易馬に関しては、特に10世紀後半から12世紀までの史料に多くみられることが指摘されている(安田 1959・佐藤 2006)。この時期は列島における馬匹生産の変節期であり、官営馬牧の諸国牧や勅旨牧が置かれた中部・関東での馬匹生産が衰退し、以降陸奥国がその役割を代替するような記述がみえる。その時間的延長線上には、中世の「糠部」や「閉伊の田鎖牧」のような北の馬牧が、天下に名を馳せる馬匹生産地として地位が確立したものと考えられる。この中世のブランド化した北の馬匹生産を「成熟期」

と捉えるならば、その前段階の10世紀は「開花期」に位置付けられ、筆者が想定した雑穀増産化とも符合する。そして、「開花期」から「成熟期」にかけては、11世紀の安倍・清原氏、12世紀の平泉藤原氏がこの権益に大きく関与していたとみられる。

まとめ

平安時代の貯蔵穴と穂首刈り手鎌という考古資料を用いて論を進めた。平安時代の貯蔵穴はこれまでも断片的にその存在は知られていたが、あまり注目されてこなかった遺構である。その要因は、詳細な時期の特定が困難で、その内容物が不明であったためである。しかし、岩手県沿岸地域でおこなわれた震災復興調査でその様子が次第に見えてきた。穂首刈り手鎌も近年この地域で資料が増加している。これら雑穀に関する調査事例は、今後も増加すると考えられ、引き続き注視したい。また、本稿では、これら雑穀資料の示す時期・分布などの状況証拠から雑穀と馬匹生産との関わりを想定した。当該地域において10世紀以降、雑穀飼料の増産化を想定し、中世の主要馬産地として名高い「糠部」や「閉伊」に先行する馬牧がすでにこの段階で多く存在していたと考えた。別稿で土器製塩について執筆しているが、塩も馬匹生産には欠くことのできない飼料であり、これらの土器製塩の動向も雑穀栽培と一致する点が多いことを確認している(註3)。いずれも10世紀後半には、中世「糠部」・「閉伊」に先行する馬匹生産が「開花期」を迎えていたことを如実に物語っている。これは時期的に文献史料に認められる「陸奥交易馬」や、その他贈答馬・軍馬の生産を示している可能性が高い。この地で開花した馬匹生産は、その後11世紀の安倍・清原氏、12世紀の平泉藤原氏といった陸奥中心部の勢力にとって権力や経済の重要基盤となっていたはずであり、これら勢力はその後の中世馬匹生産の「成熟期」の基礎を整備したものと考えられる。地域の拠点である10世紀後半から11世紀の八戸市熊野堂遺跡・林ノ前遺跡、12世紀の宮古市田鎖車堂前遺跡などは、馬匹生産を主導・管理しながら、陸奥中心部の強大な勢力や国家権力との繋がりによって発展していったことも想像できよう。

最後に、馬匹生産について考察するにあたり、最大の難点は馬牧の様子を示す施設等が不明な点である。田鎖車堂前遺跡では堀外部の一面を馬事関連空間と想定した。しかし、厩舎や柵を特定するには至っていない。今後、周辺地域も含め馬事関連遺構の検討が必要であろう。

謝辞

本稿を成すにあたり入間田宣夫先生から糠部・閉伊の馬匹生産についてご指導いただきましたこと感謝申し上げます。また、その他多くの皆様から有益なご教示をいただきました。お名前を記して御礼申し上げます(50音順・敬称略)。安達尊伸・阿部勝則・植月 学・苧坪祐樹・宇部則保・菅野成寛・君島武史・嶋影壮憲・清水 哲・須原 拓・千田政博・八木光則

註

- (1)調査を担当した筆者は、遺構検出時には大形の柱穴であると考えた。平面で観察すると脱色部と埋土があたかも柱堀方と柱痕跡との差異に見えたからである。半裁したところ、脱色部分は地山に相当することがわかり、底面には有機質の土壌が堆積している様子が確認できた。そのためトイレ遺構であることを疑い底面土壌の分析を依頼したが、ごく少量の炭化雑穀以外、糞便に顕著な寄生虫等が確認されなかった。今回この論考で、炭化した雑穀に注目し貯蔵穴ではないかと想定した。
- (2)岩手県岩泉町森の越遺跡は縄文時代中期の大集落であるが、縄文時代のものとは異質な貯蔵穴が認められ、雑穀貯蔵穴の可能性もある。特に第13次調査ではAMS年代測定で11世紀頃の値がみられた。この周辺にもいくつかの同様の特徴を有する貯蔵穴があり、長年この遺跡を担当してきた岩泉町教育委員会の田鎖氏からも、縄文時代とするには違和感があるとの感想を以前聞いたことがある。
- (3)筆者は製塩土器に関する論文も並行して執筆し、2022年3月末に発刊予定の『岩手考古学』33号に「平安時代における三陸沿岸地域の製塩と馬匹生産」と題して寄稿している。こちらも本稿と同じ方向性であり、参照いただければ幸いである。

引用および参考文献

－発掘調査報告書－

- 青森県教育委員会 1977 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 32 集 鳥海山遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1978 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 37 集 青森市三内遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1978 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 39 集 源常平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1978 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 40 集 黒石市高館遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1979 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 44 集 羽黒平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1980 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 52 集 大平遺跡』
- 青森県教育委員会 1980 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 53 集 大鰐町砂沢平遺跡』
- 青森県教育委員会 1980 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 54 集 碓ヶ関村古館遺跡』
- 青森県教育委員会 1982 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 67 集 発茶沢遺跡』
- 青森県教育委員会 1987 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 106 集 弥栄 (4)・(5) 遺跡』
- 青森県教育委員会 1988 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 109 集 下谷地 (1) 遺跡』
- 青森県教育委員会 1988 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 111 集 李平下安原遺跡』
- 青森県教育委員会 1991 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 134 集 中野平遺跡・向山 (4) 遺跡』
- 青森県教育委員会 1995 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 171 集 山元 (2) 遺跡』
- 青森県教育委員会 1997 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 206 集 高屋敷館遺跡』
- 青森県教育委員会 1999 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 264 集 野木遺跡Ⅱ』
- 青森県教育委員会 1999 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 281 集 野木遺跡Ⅲ』
- 青森県教育委員会 2000 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 287 集 岩ノ沢平遺跡』
- 青森県教育委員会 2000 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 280 集 砂子遺跡』
- 青森県教育委員会 2003 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 350 集 朝日山 (2) 遺跡Ⅶ』
- 青森県教育委員会 2004 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 369 集 朝日山 (2) 遺跡Ⅸ』
- 青森県教育委員会 2004 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 373 集 向田 (35) 遺跡』
- 青森県教育委員会 2005 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 389 集 倉越 (2) 遺跡・大池館遺跡』
- 青森県教育委員会 2005 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 395 集 山元 (1) 遺跡』
- 青森県教育委員会 2005 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 396 集 林ノ前遺跡 (遺構編)』
- 青森県教育委員会 2006 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 415 集 林ノ前遺跡 (遺物・自然科学分析編)』
- 青森県教育委員会 2006 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 411 集 宮田館遺跡Ⅴ』
- 青森県教育委員会 2007 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 438 集 赤平 (2)・赤平 (3) 遺跡』
- 青森県教育委員会 2018 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 591 集 熊沢溜池遺跡・上野遺跡 3・郷山前村元遺跡』
- 青森県教育委員会 2021 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 616 集 猪ノ鼻 (1) 遺跡』
- 青森県教育委員会 2021 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 620 集 林ノ脇遺跡』
- 青森市教育委員会 2002 『青森市埋蔵文化財調査報告書第 54 集 -5 野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 青森市教育委員会 2013 『青森市埋蔵文化財調査報告書第 113 集 -2 石江遺跡群発掘調査報告書Ⅵ - 高間 (1) 遺跡本文・図版編 -』
- 秋田県埋文センター 1992 『秋田県文化財調査報告書第 222 集 国道 103 号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 6』
- 秋田県埋文センター 1988 『秋田県文化財調査報告書第 172 集 西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 3』
- 一戸町教育委員会 2001 『一戸町文化財調査報告書第 44 集 一戸城跡・川原田平遺跡』
- 一戸町教育委員会 2001 『一戸町文化財調査報告書第 45 集 上野遺跡』
- 一戸町教育委員会 2003 『一戸町文化財調査報告書第 46 集 田中遺跡』
- 一戸町教育委員会 2006 『一戸町文化財調査報告書第 56 集 大平遺跡』
- 岩手県教育委員会 1981 『岩手県文化財調査報告書第 60 集 東北縦貫自動車道関係発掘調査報告書Ⅺ (水沢地区)』
- (財) 岩埋文 1979 『岩手県埋蔵文化財調査報告書 8 集 落合Ⅲ・力石Ⅱ・兎Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1984 『岩手県埋蔵文化財調査報告書 70 集 江刺家遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1986 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 97 集 五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1988 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 120 集 飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1988 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 129 集 皂角子久保Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1989 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 133 集 駒焼場遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1990 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 146 集 長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1991 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 153 集 上川岸Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1996 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 244 集 小幅遺跡第 2 次発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 1998 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 287 集 房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2000 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 335 集 大向上平遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2004 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 427 集 飯岡林崎Ⅱ遺跡発掘調査報告書 (第 1・3 次)』
- (財) 岩埋文 2004 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 450 集 島田Ⅱ遺跡第 2～4 次発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2004 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 467 集 本宮熊堂 B 遺跡第 13・15・20 次発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2005 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 457 集 芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2006 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 479 集 大西遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2007 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 500 集 細谷地遺跡第 9 次・第 10 次発掘調査報告書』

- (財) 岩埋文 2008 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第513集 細谷地遺跡第14次・第14次発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2009 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第529集 木戸井内IV遺跡・隠里III遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2010 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第551集 八木沢II遺跡第2次・八木沢ラントノ沢II遺跡発掘調査報告書』
- (財) 岩埋文 2010 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第558集 松山大地田沢遺跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2014 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第625集 松山館跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2016 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第652集 千苺遺跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2017 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第671集 中村遺跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2017 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第696集 山口駒込I遺跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2018 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第681集 荷竹日向I遺跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2019 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第698集 上のマッカ遺跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2019 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第708集 平成30年度発掘調査報告書 森の越遺跡』
- (公財) 岩埋文 2020 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第711集 青猿I遺跡発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2020 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第712集 千徳城遺跡群発掘調査報告書』
- (公財) 岩埋文 2020 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第718集 田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡発掘調査報告書』
- 大館市教育委員会大館郷土博物館 2009 『大館市文化財調査報告書3：土飛山館跡発掘調査報告書』
- 大館郷土博物館 2013 『大館市文化財調査報告書8：扇田道下遺跡発掘調査報告書』
- 九戸村教育委員会 2021 『黒山の昔穴遺跡と関連遺跡―黒穴の昔穴遺跡総括報告書―』
- 田野畑村教育委員会 1998 『田野畑村文化財調査報告書第3集 切牛II・真木沢I遺跡発掘調査報告書』
- 遠野市教育委員会 1991 『遠野市埋蔵文化財調査報告書第4集 高瀬II遺跡』
- 浪岡町教育委員会 2004 『浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集 野尻(4)遺跡』
- 野田村教育委員会 2013 『野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 新館遺跡発掘調査報告書』
- 階上町教育委員会 1995 『山館前遺跡試掘調査報告書』
- 階上町教育委員会 2000 『山館前遺跡発掘調査報告書II』
- 八戸市教育委員会 1989 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第32集 熊野堂遺跡』
- 八戸市教育委員会 1990 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第38集 見立山(2)遺跡』
- 八戸市教育委員会 2003 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集 牛ヶ沢(4)遺跡III』
- 八戸市教育委員会 2016 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第153集 熊野堂遺跡第2地点』
- 水沢市教育委員会 1979 『岩手県水沢市文化財報告書第3集 林前遺跡 区画整理に伴う範囲確認調査』
- 宮古市教育委員会 2007 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第71集 近内館跡』
- 盛岡市教育委員会 1990 『浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書I 前野遺跡』
- 盛岡市教育委員会 1999 『館・松ノ木遺跡 古代の遺物編』
- 盛岡市教育委員会 2008 『浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書IV 柿木平遺跡・堰根遺跡』
- 盛岡市教育委員会 2018 『平成26年度・27年度盛岡市内遺跡群 赤袋遺跡第3次・第4次発掘調査報告書』
- 矢巾町教育委員会 2019 『矢巾町文化財調査報告書第41集 徳丹城跡II 総括報告書』
- ―その他論文等―
- 入間田宣夫 2005 「Ⅲ 天下一の馬産地として」『北日本中世社会史論』吉川弘文館
- 入間田宣夫編 2008 『牧の考古学』高志書院
- 植月 学ほか 2020 「青森県における古代の馬利用―林ノ前遺跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究―」『研究紀要』第25号
青森県埋蔵文化財調査センター
- 植月 学 2021 「動物考古学からみた馬匹生産と馬の利用」『馬と古代社会』八木書店
- 小林幹男 1996 「古代・中世における牧制度の変遷と貢馬」『長野女子短期大学研究紀要』(4)
- 佐藤智生 2004 「平安時代における青森県上北郡の様相について」『前掲：向田(35)遺跡調査報告書』
- 佐藤智生 2006 「青森県における防衛性集落の時代と生業」『北の防衛性集落と激動の時代』
- 佐藤洋一郎 2004 「Ⅱ. 飯岡林崎II遺跡出土のイネ種子のDNA分析」『前掲：飯岡林崎II遺跡発掘調査報告書』
- 齋藤 淳 2004 「北奥における古代の鉄器について」『研究紀要』第9号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 齋藤 淳 2011 「青森県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会 2011 栃木大会研究発表資料集』
- 柴田陽一郎 2011 「秋田県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会 2011 栃木大会研究発表資料集』
- 杉山陽亮 2008 「北方の馬産地―糠部地域における馬産の一考察―」『前掲：牧の考古学』
- 椿坂恭代 1993 「アワ・ヒエ・キビの同定」『吉崎昌一先生還暦記念論集 考古学と自然科学』
- 仲條真介 2010 「岩手県における雑穀研究のあゆみとその考察」『岩手県農業研究センター研究報告』10
- 成田誠治 2005 「青森県内出土の鉄製穂積具について」『葛西勵先生還暦記念論文集 北奥の考古学』
- 松本建速 2006 「蝦夷と馬」『蝦夷の考古学』同成社
- 山崎 健ほか 2016 『藤原宮跡出土馬の研究 奈良文化財研究所報告書17』 独立行政法人奈良文化財研究所
- 吉川純子 2014 「3 炭化種実同定分析」『前掲：松山館跡発掘調査報告書』

岩手県における近・現代の白炭窯の系譜

阿部 勝 則

昭和初期の岩手県において白炭窯が多く分布する地域は、秋田県境に近い奥羽山系の地域である。本稿では、岩手県と秋田県の統計資料、民俗学的調査事例、考古学的調査事例を比較検討し、岩手県で築窯された近・現代の白炭窯（いわゆる石窯）は、少なからず秋田県で盛行した白炭生産と白炭窯の影響を受けて成立した可能性があることを指摘する。

1. はじめに

筆者は、先に岩手県における近・現代の炭窯の形態の変遷を検討したが、その主たる対象は、全体の約9割を占める黒炭生産を目的とした黒炭窯（いわゆる土窯）であった。一方で白炭生産を目的とする白炭窯（いわゆる石窯）も岩手県において一定量（全体の約1割）存在するが、例えば、昭和初期1930年頃の記録では、岩手県における白炭窯の分布の多くが、田山・雫石・胆沢など秋田県境寄りの奥羽山系の地域が占めており、この現象は、当時、秋田県で盛んに行われていた吉田式白炭窯（吉田窯）の影響を受けている可能性がある、との仮説を提示した（阿部 2021）。また、これまでの岩手県の炭焼き・炭窯に関する研究の主な対象は黒炭生産と黒炭窯であり、対比する形での白炭や白炭窯への言及はあっても、白炭や白炭窯を主な対象として実証的に検討した研究は見当たらない。

本稿では、岩手県の炭焼き・炭窯の研究状況を踏まえ、先に提示した仮説について、岩手県内の考古学的調査事例で白炭窯（石窯）と報告された炭窯跡の形態について再検討を行い、岩手県における近・現代の白炭窯の系譜について考えてみたい。そのための検証方法として、岩手県と秋田県における近・現代の白炭窯の実態について、統計資料、民俗学的調査事例、考古学的調査事例から基礎資料を蓄積する。そのうえで、岩手県と秋田県の白炭窯の形態について比較検討する。

2. 岩手県における白炭生産と白炭窯

昭和（戦前・戦後）の岩手県における白炭窯の実態について、統計資料、民俗学的調査事例、考古学的調査事例から確認する。

（1）岩手県における白炭窯の分布（第1図）

【資料1】第1表 「県内の各式窯の分布」（註1）

昭和初期（1930年頃）、岩手県における炭窯枚数の内訳を記した統計資料である。数えられた岩手県内の白炭窯1,364枚のうち、白炭窯の枚数（窯数全体に対する白炭窯数の割合）が確認できる地域は、北から（現八幡平市）田山160枚（78.4%）、（現一戸町）小鳥谷207枚（約22.4%）、沼宮内18枚（3.5%）、雫石221枚（100%）、盛岡112枚（約38.4%）、石鳥谷190枚（約54.3%）、（現西和賀町）川尻90枚（約29.1%）、（現北上市）横川目2枚（1.3%）、水沢300枚（約47.1%）、（現宮古市旧川井村）門馬64枚（約61.5%）である。内陸部の奥羽山系を中心とした地域に特に多く、北上山系に少なく、沿岸部に事例がないことと極めて対照的である。詳細にみると、北から田山（国道282号-鹿角）、雫石（国道46号-角館）、水沢/胆沢（国道397号-東成瀬）など秋田県と繋がるルート上に位置する秋田県境寄りの地域に白炭窯の枚数・割合が高い傾向が顕著である（阿部 2021）。その視点で他の地域を見ると、盛岡は雫石に隣接する地域で、例えば盛岡西側の雫石寄りの繋付近であれば、白炭窯の多い理由を雫石との地理的・地域的な繋がりによって把握することが可能である。また、

(現西和賀町)川尻・(現北上市)横川目は、国道107号が通る秋田県横手と繋がるルート上で、他の地域と同様の傾向で把握することができる。ただし同地域は黒炭窯の事例も多く、白炭窯の割合が他地域より低い。これまで西和賀町(旧湯田町)で確認されている炭窯の考古学的調査事例5例(阿部 2016)の【No.21~25】)が、黒炭窯であることも、この実態を反映しているのかもしれない。

このように岩手県では、奥羽山系とくに秋田県と繋がるルート上に位置する秋田県境寄りの地域において他地域より白炭窯数が著しく多く分布する傾向がある。このことは、岩手県で白炭窯が普及した要因のひとつに隣接する秋田県の地理的・地域的な影響があった可能性があるかと推測される。

次に奥羽山系の各地域の状況、特に白炭窯の割合の高い地域、田山と雫石について確認する。

【資料2】第2表 「昭和30年度二戸郡内町村別四半期別炭窯数」(註2)

昭和30年(1955)頃の二戸郡内の黒炭窯・白炭窯の窯数が町村別に記された統計資料である。戦後の資料で、【資料1】とは時期が異なるが、その後の変遷を知る手掛かりとなる。記載された地域(町村)は、福岡・一戸・浄法寺・金田一・波打・鳥海・小鳥谷・姉帯・安代・田山・軽米・九戸の12を数える。昭和30年6月時点での二戸郡内の窯数は、白炭窯164枚(約5.2%)、黒炭窯2,981枚(約94.8%)、計3,145枚である。黒炭窯の割合が岩手県全域よりもやや高い数値を示している。

注目されるのは、二戸郡内の白炭窯164枚(100%)のうち、157枚(約95.0%)が田山に分布することである。他に二戸郡内で白炭窯が確認できる地域は、波打1枚、小鳥谷2枚、姉帯1枚、安代3枚、計7枚で、いずれも炭窯数全体の1~2%程度である。田山における総窯数393枚のうち黒炭窯236枚(60.1%)と白炭窯157枚(39.3%)の割合は約6:4で、黒炭窯も一定数存在するものの、他地域より白炭窯の割合が圧倒的に高い。昭和30年頃においても田山では白炭窯数とその割合が依然として高かったことがわかる。同資料の現八幡平市安代地区=旧安代町の東側(安代)の窯数は、総窯数452枚、黒炭窯449枚(99.3%)、白炭窯3枚(0.7%)である。同様の傾向は【資料1】の荒沢の総窯数552枚が、すべて黒炭窯であることにも示されている。

昭和31年(1956)に田山村(以下「田山」とする。)と荒沢村(以下「荒沢」とする。)が合併した旧二戸郡安代町の地理的特徴は、分水嶺と県境が一致しておらず、ほぼ南西-北東方向に分水嶺が町域を縦断している点にある。南から安比岳・野沢欠峠・鍋越峠・高倉山・黒森山・大尺山・残決山・梨の木峠・貝梨峠・上の木山を結ぶ嶺を境界とする分水嶺を境として、西側の小河川は、日本海側に流れる米代川に合流する。東側の小河川は、安比川に合流して北東側に流れ、北上山系で馬淵川と合流し、太平洋に流れ出る。このような地形的な特徴のなかで、分水嶺西側の田山は、東側に位置する荒沢と比較して、秋田県の鹿角との文化的な繋がりが濃厚である。田山で確認されたマタギ文書や、マタギの存在、米代川上流域という地理的位置から尾去沢鉦山に精錬用の春木を供給した歴史的な事象は、このことを示している(註3)。また、鹿角は、江戸時代には二つの行政区に分けられ、北半を毛馬内通、南半を花輪通とされ、花輪代官所は、田山村も所管していたとされる。明治5年(1972)に鹿角郡は秋田県に編入されるが、現在の秋田県鹿角市と岩手県八幡平市安代地区田山の地域的な繋がりには、歴史的な背景があったことがわかる(註4)。

以上のことから、【資料1・2】で確認できる八幡平市安代地区=旧安代町における田山と荒沢の炭窯の種別の差異は、両地区の歴史的・地理的な特徴を反映したものとして把握することができるが、管見の限り、これまで田山と荒沢の炭窯の形態差とその要因について指摘された形跡はない(註5)。

【資料3】第3表 「御明神村木炭生産量と炭窯数」(註6)

明治31年(1898)から昭和13年(1938)までの約40年間に及ぶ(現雫石町)御明神村の木炭生産量・同金額・販売量・同金額・製炭窯の数を年毎に記した統計資料である。同資料は、明治40・

第1表 県内の各式窯の分布

地区	黒炭窯	白炭窯	総数	白炭窯の割合(%)
盛岡	180	112	292	38.4
雫石	0	221	221	100.0
石鳥谷	160	190	350	54.3
横川目	150	2	152	1.3
川尻	219	90	309	29.1
水沢	337	300	637	47.1
田山	44	160	204	78.4
沼宮内	490	18	508	3.5
小鳥谷	718	207	925	22.4
門馬	40	64	104	61.5
計	2,338	1,364	3,702	36.8

※白炭窯が確認された地域のみを表示した。

第2表 昭和30年度二戸郡内町村別四半期別炭窯数

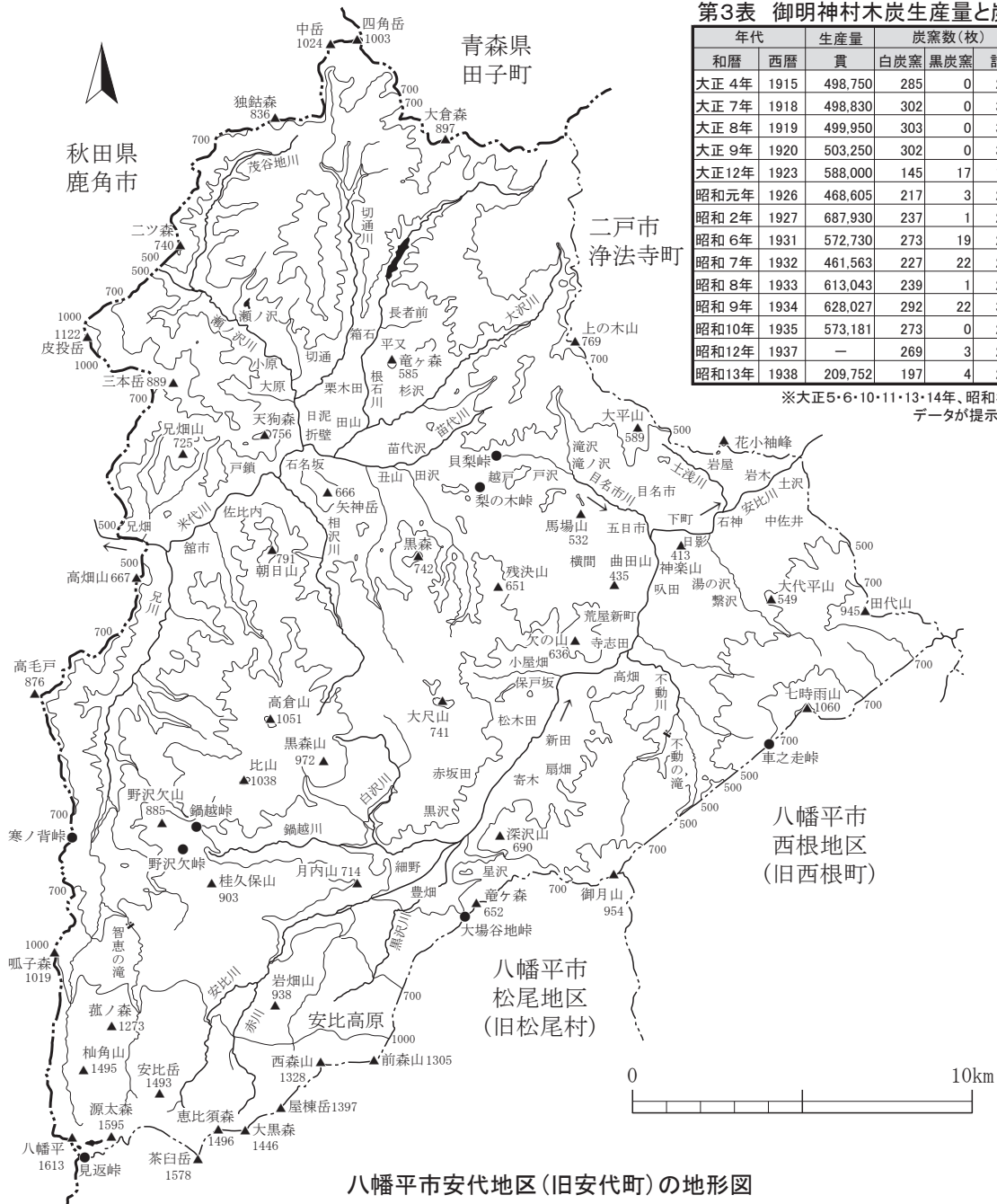
町村名	6月			9月			12月			3月			白炭窯の割合(%)		
	白炭窯	黒炭窯	総数	白炭窯	黒炭窯	総数	白炭窯	黒炭窯	総数	白炭窯	黒炭窯	総数	6月	9月	12月
福岡	0	171	171	0	172	172	0	367	367	0	367	367	0.0	0.0	0.0
一戸	0	2	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0
浄法寺	0	374	374	0	287	287	0	307	307	0	307	307	0.0	0.0	0.0
金田一	0	71	71	0	69	69	0	80	80	0	80	80	0.0	0.0	0.0
波打	1	104	105	1	112	113	1	64	65	1	64	65	1.0	0.9	1.5
鳥海	0	331	331	0	338	338	0	342	342	0	342	342	0.0	0.0	0.0
小鳥谷	2	262	264	2	262	264	0	202	202	0	202	202	0.8	0.8	0.0
姉帯	1	52	53	1	52	53	0	48	48	0	48	48	1.9	1.9	0.0
安代	3	449	452	3	449	452	3	449	452	3	449	452	0.7	0.7	0.7
田山	157	236	393	151	236	387	114	252	366	114	252	366	39.9	39.0	31.1
軽米	0	529	529	0	492	492	0	510	510	0	510	510	0.0	0.0	0.0
九戸	0	400	400	0	399	399	0	332	332	0	332	332	0.0	0.0	0.0
計	164	2,981	3,145	158	2,869	3,027	118	2,953	3,071	118	2,953	3,071	5.2	5.2	3.8

※白炭窯の割合(%)3月は12月と同じ。

第3表 御明神村木炭生産量と炭窯数

和暦	西暦	生産量	炭窯数(枚)			白炭窯の割合(%)
			白炭窯	黒炭窯	計	
大正4年	1915	498,750	285	0	285	100.0
大正7年	1918	498,830	302	0	302	100.0
大正8年	1919	499,950	303	0	303	100.0
大正9年	1920	503,250	302	0	302	100.0
大正12年	1923	588,000	145	17	162	89.5
昭和元年	1926	468,605	217	3	220	98.6
昭和2年	1927	687,930	237	1	238	99.6
昭和6年	1931	572,730	273	19	292	93.5
昭和7年	1932	461,563	227	22	249	91.2
昭和8年	1933	613,043	239	1	240	99.6
昭和9年	1934	628,027	292	22	314	93.0
昭和10年	1935	573,181	273	0	273	100.0
昭和12年	1937	—	269	3	272	98.9
昭和13年	1938	209,752	197	4	201	98.0

※大正5・6・10・11・13・14年、昭和3・4・5・11年はデータが提示されていない。



八幡平市安代地区(旧安代町)の地形図

第1図 岩手県の白炭窯

41・42・43・44・45年、大正2・3・5・6・10・11・13・14年、昭和3・4・5年など17年分の数値を欠いている。明治31年（1898）から同39年（1906）までは総窯数が記されているが、石窯・土窯の内訳は不明である。大正4年（1915）から昭和13年（1938）までは石窯・土窯の各枚数が記されているが、総窯数は提示されていないので、総窯数を補足し、石窯と土窯の割合も併せて提示した。

炭窯の枚数は大正4年（1915）に飛躍的に伸びる。黒炭窯と白炭窯の数値は、大正4年（1915）以降は昭和13年（1938）まで、一貫して白炭窯の数量が圧倒的に多く、90%以上と割合が高い。【資料1】のみならず、【資料3】からも、雫石では特に大正以降、昭和10年代にかけての長期間にわたり、白炭生産が盛行していたことがわかる。昭和初期（1930年頃）と推定される【資料1】にみえる雫石の白炭窯221枚、黒炭窯0枚と一致する数字は確認できないが、年代の近い昭和2年（1927）～昭和8年（1933）頃の白炭窯の枚数を概観すると、昭和元年（1926）217枚、昭和2年（1927）237枚、昭和6年（1931）237枚、昭和7年（1932）227枚、昭和8年（1933）239枚で、いずれも誤差5%前後となる近似値を示しており、同時代資料としての【資料1】と【資料3】の内容は、ともに昭和前半期の岩手県と雫石の炭窯の実態を反映しているものとして判断できる。

（2）民俗学的調査事例における白炭窯

ここでは、民俗学的視点から、自治体史等の記述を元に白炭窯の実態に係る証言を確認する。

【事例1】八幡平市安代町地区（旧安代町）の事例（註7）

八幡平市安代地区＝旧安代町では、昭和58年（1983）～60年（1985）に岩手県立博物館、平成17年（2005）・18年（2006）に弘前大学による調査が行われ、詳細な聞き取り調査が記録・報告されている。ここでは、後者の報告書『安代の民俗誌』「第4章 生業、第3章 林業、2 製炭」で報告された、炭焼きに関する聞き取り調査の記録から、白炭窯の特徴や旧安代町の田山と荒沢が対比される部分（傍線筆者）を抽出することを試みる。聞き取りされた地区は、土沢、中佐井、石神、目名市、扇畑、赤坂田、細野（以上、分水嶺東側の荒沢）、田山本村、猪苗代、瀬ノ沢、兄畑、館市、兄川（以上、分水嶺西側の田山）の計13箇所である。うち石窯の記録は、扇畑（荒沢）、瀬ノ沢、兄畑・兄川（田山）の4箇所、田山で石窯についての証言が多いことがわかる。具体的に見てみよう。

扇畑では、大正14年（1925）生まれの男性の話として、「20歳前に、八幡平の麓で雪が降り始める頃に窯を作り、冬に炭を焼いていた。炭焼きには檜や樵（樵？）の木を使った。炭には黒炭と白炭の2種類があった。黒炭を作るための窯は木を組んで土をのせて覆い、叩いて固めて作る。黒炭は1週間かけてゆっくり作った。白炭を作るための窯は石を積んで作った。白炭は高温ですぐに焼けるので、毎日のようにできた。白炭は長持ちするが、黒炭はあまり長持ちしない。

炭焼きは1週間ほど山に泊まり込みで炭を焼く。1週間に1度、家に食料を取りに戻った。家では女性たちがスミスゴと縄を茅で編んでいた。手が空いている暇なときに編んだのでないかという。

炭焼きの炭は需要がなくなってきたので次第に行われなくなっていった。」との証言がある。

瀬ノ沢では、昭和3年（1928）生まれの男性の話として、「18歳頃に自分で窯を作った。加工した石を粘土で固めて幅1.5メートルほど、高さ1.5mほど、奥行き1.7mほどの石窯を作った」という。

証言された窯の規模は石窯の規模にはほぼ合致する。加工した石を使用したとの証言に留意したい。

兄畑では、昭和16年（1941）生まれの男性の話として、「この男性の家では父親が出稼ぎに行っていたので、祖父が炭焼きをしていた。この男性は小学校高学年から中学校の頃まで、家の手伝いで山から自宅まで炭を運んだ。この男性は炭を運ぶ手伝いをしながら、祖父が作業している姿を見て炭焼きを覚えていった。炭を焼くための窯は半円型で、人よりも少し低い大きさであった。積んだ木材の上に葉を敷き、その周りに粘土を盛って窯を作った。窯には、人が出入りできる70cmセンチメートル

ほどの入り口と、煙を出すための穴を開けた。これは割り当てされた場所が終わり、次の場所へ移るまで使い続けた。

炭には白炭と黒炭の2種類がある。炭を焼くときは、入り口側で燃やし、煙の出具合を見て、風が通るほどの穴を残して入り口を閉じた。白炭の場合は、2日で5俵ほどの炭を焼くことができた。焼きあがった炭は高温であるため、炭の粉や土を混ぜた灰と水をかけて冷やした。黒炭の場合は、1度に50俵以上焼くことができるが、1ヶ月かかるものであった。燃え尽きて冷えてから取り出した。焼き上がった炭は短く炭俵に詰めた。それを家まで運び、ある程度溜めてから農協や盛内商店に売った。」という証言が記されている。

炭焼きを行う家では、炭の運び方が子供の仕事とされていたことがわかる。白炭生産より黒炭生産の方が時間を要するとの証言にも留意しておきたい。

【事例2】雫石町御明神村と西山村の事例(註8)

次に雫石町の白炭窯の実態について、白炭窯の特徴(傍線筆者)に留意しながら確認する。

御明神村では、岩手県で招聘した榑崎圭三氏による改良窯の講習に新里長之助、新里専造の二人が、第一回講習生として受講したとされる。またその頃、栃木県の川田新太郎氏が講師として来村し、村の人達に製炭及び石窯焼きの製法を教え、村に永住したとされる。こうして榑崎式石窯焼の製法が普及された、という。また、明治35年、大林区特売炭焼始まる、とあるが、この頃は製炭技術があまり優れておらず、本格的な石窯焼きは、明治38年後榑崎式が取り入れられてからである。同四十二年頃、小志戸前に牛尾製材所とともに二戸郡小鳥谷から妻神与吉という人が炭焼きの指導にきて、そのまま赤渕部落に永住したとされる。

榑崎窯の構造は基本的に土窯である。ただし上述の記載のとおり、はじめ榑崎窯で黒炭を生産していた人々が、後に石窯焼の方法を既存の榑崎窯に取り入れたとしたら、榑崎窯の形態をとる(形状が似る)白炭窯も存在するのかもしれない。考古学的調査事例を検証する際に注意を要する点である。

西山村では、「明治38年の国有林払下げが実施されると、冬期の副業として製炭に従事する家が増加し、五区笹崎、上西根方面では殆どの家庭で製炭に従事した。すべて石窯で、毎日生産されるので、現金収入が多くなった各家庭が生活にゆとりができるようになった。」という。

西山村では、すべて石窯であったという記載に注目しておきたい。

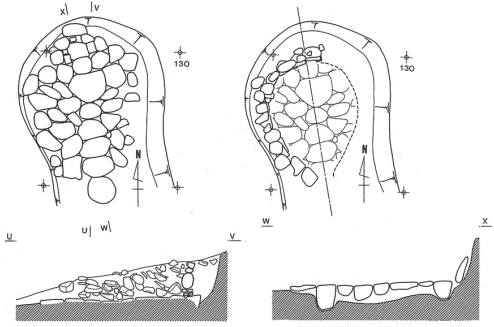
(3) 考古的調査事例における白炭窯(第2図)

ここでは、先に阿部 2016で提示した炭窯の事例のうち白炭窯(石窯)の3事例、参考事例1の考古学的調査事例について確認する。**【事例No.】**は、阿部 2016掲載の第2表の掲載No.と一致する。記載内容の留意点は、規模は窯底の計測値を示し、幅/奥行きの比率を窯の形態同定の参考とした。

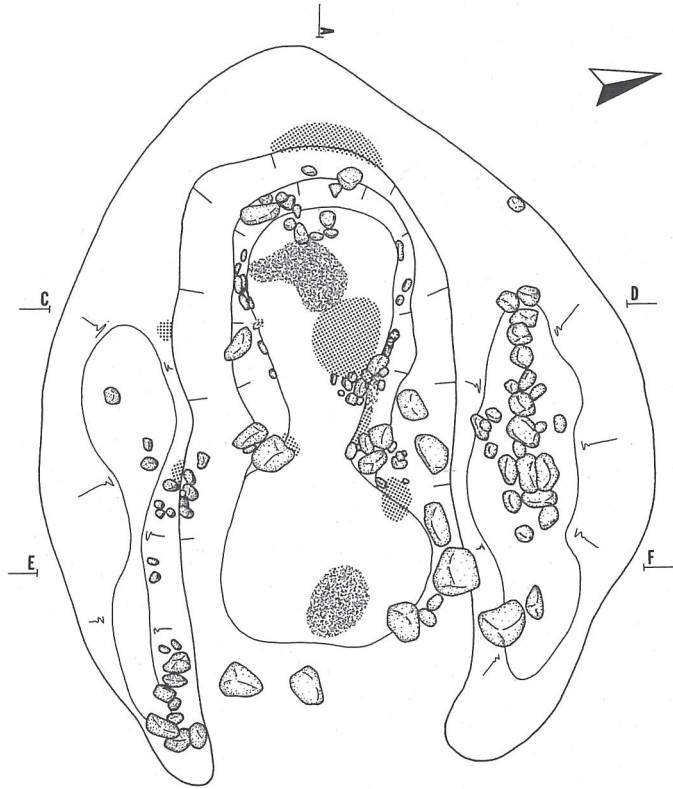
【No.20】雫石町元御所遺跡炭焼址。立地：斜面。規模：180×130cm。平面形：不明。付属施設：窯底に石敷き。関連施設：なし。出土遺物：なし。出土材：なし。備考：重機による地ならしで焼土塊散乱。時期：詳細不明。形態：報告書では、土窯・石窯の別に言及されていないが、壁面・底面の石組・石敷の状態から石窯と推測。文献：『元御所遺跡発掘調査報告書』岩埋文第28集、1982年。

【No.26】花巻市(旧東和町)田瀬柏森館1号炭竈跡。立地：斜面。規模：130×80cm。平面形：卵形。付属施設：東側に灰原有り。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：窯の周囲に径約400cmの土盛り。北壁に石積み?報告書のまとめで「2基の内小型のもの(1号炭竈跡)は、白炭を作るための石窯ではないと思われる。熱効率をよくするために部分的に石を補強したものと思われる。」との所見が記されているが、参考資料として掲載する。時期：昭和20~30年。形態：不明。文献：『田瀬柏森館遺跡発掘調査報告書』東和町教育委員会、1994年。

【岩手 No. 20】元御所遺跡炭焼址



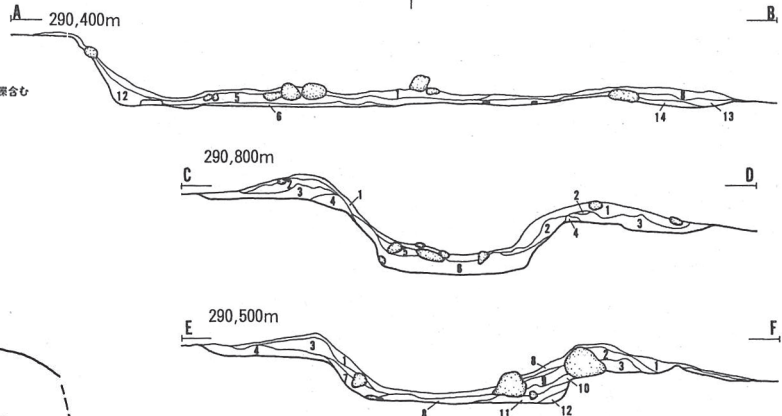
【岩手 No. 33】下尿前IV遺跡 1号炭窯跡



【岩手 No. 46】大平野II遺跡 2号炭窯跡

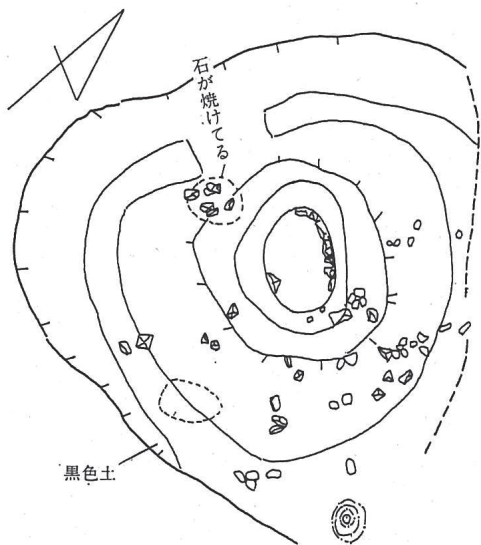


- 2号炭窯跡
- 1 2.5YR4/6 赤褐色 シルト 粘性なし・しまり中 褐色土ブロック・直径30mm大の小礫含む
 - 2 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性なし・しまり中 黒褐色土との混合物で炭化材含む
 - 3 5YR3/4 暗褐色 シルト 粘性なし・しまり中 焼土
 - 4 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性なし・しまりなし 焼土粒と炭化物粒が散在する
 - 5 10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性なし・しまりなし

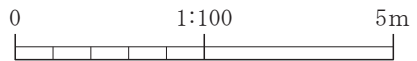


(参考)

【岩手 No. 26】田瀬柏森館 1号炭竈跡



- 1 1(u)層 表土
- 2 10YR 6/8 橙
- 3 10YR 3/3 暗褐
- 4 10YR 2/1 黒
- 5 10YR 3/4 暗褐 含炭化物・焼土・灰
- 6 10YR 4/1 褐灰 炭化物・焼土・灰をブロック状に含む
- 7 10YR1.7/1 黒 6/8 橙との混合物 しまりなし
- 8 10YR1.7/1 黒 炭化物細片をびっしり含む
- 9 5YR 6/8 橙 含炭化物ブロック・5BG 6/1 青灰ブロック
- 10 10YR 4/4 褐 炭材を含む におい黄褐色灰多い
- 11 10YR 3/1 黒褐 炭化物多い
- 12 10YR 5/8 黄褐 4/3 にぶい黄褐色の混合土
- 13 10YR 3/1 黒褐
- 14 10YR 3/4 暗褐



第2図 岩手県の炭窯跡の発掘調査事例

【No.33】奥州市（旧胆沢町）下尿前Ⅳ遺跡1号炭窯跡。立地：緩斜面。規模：320×200cm（製炭室）。平面形：製炭室と前庭部で瓢箪形。全体としては楕円形。付属施設：220×240cmの前庭部1。関連施設：なし。出土遺物：鋸1。鏝1。鉄板1。備考：白炭窯。焚口が礫と煉瓦でつくられる。時期：昭和時代。形態：不明。文献：『下尿前Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第269集、1998年。

【No.46】奥州市（旧胆沢町）大平野Ⅱ遺跡2号炭窯跡。立地：斜面。規模：335×300cm（約11×10尺）。平面形：団扇形。煙道窪み1。付属施設：壁に石組。焚口が張り出す。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：壁に礫が組まれる。石窯か。時期：近・現代。形態：不明。文献：『大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第576集、2011年。

以上の事例から岩手県で確認された白炭窯の特徴をまとめる。確認された地域は、雫石町1例、旧胆沢町2例で、いずれも奥羽山系の地域である。石窯の第一の特徴は石組で、窯内部に部分的に遺る石組の痕跡も、石窯の痕跡の物証の一つとして理解することができる。事例では、壁の一部に石組の痕跡をもつものが3例、さらに底面にも石組（石敷き）をもつものは1例【No.20】である。石窯の石組は、石窯が廃棄される際に取り外され、次に築窯される石窯に再利用される可能性もあり、部分的に残る石組が本来の形状をどこまで留めているのかは判断が難しく、当初から本来の在り方を部分的に真似た石組だった可能性もある。平面形は、卵形（類円形）、瓢箪形（前庭部付）、団扇形と規格性はなく、石窯の特徴である円形基調ではない。規模も【No.20】は比較的小さいが、【No.33・46】は土窯と遜色ない大きさである。石窯特有の道具類も確認されていない。

このような特徴から判断すると、石窯本来の在り方を模したといえる規模・形態の事例は【No.20】のみで、参考に掲げた【No.26】の事例も含め、他は土窯の形状に石組などの石窯の要素を部分的に取り入れたと考えられる事例である。

3. 秋田県における近・現代の炭焼きと炭窯跡

秋田県の炭焼きの概要は、『秋田県林業史 下巻』（1975）（註9）に記されている。また、秋田県の炭焼きと炭窯について整理したものに高橋 1995があり、遡って、三浦 1933『炭窯百態』（註10）には、秋田県の炭窯として「吉田黒炭窯」と「秋田日窯（いわゆる吉田窯）」の2例が掲載されている。

以下、上記の文献に拠りながら、秋田県における近・現代の炭焼きの歴史と炭窯の形態を確認する。

（1）秋田県の近・現代の炭焼き（第3図）

【資料4】第4表 「秋田県の木炭生産量」

白炭窯の枚数を記載した資料を確認することはできなかったが、『秋田県林業史 下巻』掲載の表150（pp443）・表151（pp446）・154（pp448）・155（pp459）に黒炭・白炭の別に木炭の生産量が記されている。この表を手掛かりにして、時期ごとの黒炭窯・白炭窯の実態を類推してみたい。第4表は、同表から必要な項目を抜粋・編集し、掲載したものである。

明治期

幕末の秋田藩では、藩用と直営銅山の精錬用に加えて、民用炭が生産されていた。阿仁鉱山（北秋田市）、院内鉱山（現湯沢市（旧雄勝町））、尾去沢鉱山（鹿角市）、荒川鉱山（現大仙市（旧協和町））などの地域周辺では、精錬用の木炭の供給など鉱山経営に密接に関連しながら木炭の生産が盛んに行われていたとされる。

明治になって製炭技術が改良され、秋田県の実産量は150万俵（1俵＝約15kg）を示したという。当時の秋田県の木炭は、全部日窯による白炭のみであったとされ、明治35年（1902）に田中長嶺氏が

仙北郡峰吉川村に来県し、菊炭窯による製炭法を伝授したことにより、黒炭が生産されるようになり、また、明治38年（1905）の奥羽線（現奥羽本線）の開通によって都心への輸送路が確保されたことにより、木炭の移出量が増え、産業として成立する基盤が整えられていったとされる。明治40年（1907）に産業振興を図る目的から産業講習規定を定め、講師の招聘をはじめた。同41年（1908）に高橋善八氏、同45年（1912）に森 重弘氏を招聘し、白炭製造について講習を行い、明治期の木炭生産の基礎がつくられたとされる。

秋田県で奨励された木炭生産の講習は、白炭窯による白炭生産が中心であったことに留意したい。

大正期

大正2（1913）年に佐藤喜久造氏、同4年（1915）に永井定吉氏を招聘し、同6年（1917）には山形県林産技師であった吉田頼秋氏を製炭技師に迎え、吉田式製炭法により本格的に木炭生産の講習に取り組んだとされる。

吉田頼秋氏は、福島県箕輪村（現いわき市）出身で、秋田県山内村で講習中に死去したとされ、現在山内村には顕彰碑が建てられている。顕彰碑は山内村土淵字鶴ヶ池に所在し、吉田頼秋氏の木炭生産指導者としての偉業を伝えるために建立された。造立は、昭和11年（1936）10月22日。規模は、本体240×110×20cmである。表面は「吉田先生頌徳碑」とあり、裏面には、「吉田来秋先生ハ福島県箕輪村ノ人ナリ。徳望厚ク製炭ニ終始シ吉田窯ヲ創案ス。本縣ニ教師タルコト十有八年功績甚大ナリ。可惜平鹿郡山内村ニ於テ講習中ニ病没ス。于時昭和九年十月廿二日。享年五十五。ノチ縣内業者相計リ建碑以テ其ノ偉業ヲ後葉ニ伝フ。昭和十一年十月廿二日 秋田縣木炭同業組合聯合會 会長 梅原延廣 文 兒玉 忠 書 桶渡利吉 刻」（註11）とある。

大正元年（1912）から同14年（1925）の生産量は、184.4万俵（1俵=15kg）から353.5万俵と増加しながら推移する。木炭生産量における白炭生産比は84～90%で推移している。

昭和期前半（戦前）

昭和元（1926）年から同20（1945）年までの木炭の生産量は、昭和元年（1926）の318.5万俵から昭和9年（1934）の424.4万俵と増加しながら推移する。木炭生産全体における白炭生産の割合は80%前後と高い。

昭和期後半（戦後）

昭和21年（1946）から同45年（1970）までの木炭の生産量は、昭和21年（1946）の363.9万俵から昭和45年（1970）の26.1万俵へと減少しながら推移する。高度経済成長に伴い生活様式が変化したことにより、燃料資源としての木炭生産が徐々に減少していく時期である。昭和40（1965）年以降は100万俵を切り、以後の減少傾向が著しい。白炭の生産比は、昭和25年（1950）に81.0%であったのが、年々減少し、昭和45年（1970）には53.0%と、約8割から約5割に減少する。同時期の炭窯数は確認できていないが、白炭窯数の割合は、木炭生産量における白炭生産の割合にも、ある程度反映されているものと推測する。

なお、昭和9年（1934）の鹿角郡製炭業者関係表（註12）に記された鹿角郡の製炭窯数（基）では、「白炭二八一、黒炭三七三、計六五四（白炭約42.9%、黒炭約57.1%）」とされており、白炭の割合の高いことがわかる。

以上のことから、秋田県において白炭生産の割合が高いことは明白であり、同時代の岩手県の木炭生産の状況とは、異なる秋田県の顕著な特徴として指摘できる。

（2）炭窯の形態（第4図）

秋田県で築窯された炭窯の形態と特徴（傍線筆者）について概観する。

第4表 秋田県の木炭生産量

年度	生産量(千俵)		白炭の割合(%)	
	和暦	西暦		
明治 12 年	1879	1,349	—	
明治 38 年	1905	748	—	
明治 39 年	1906	994	—	
明治 40 年	1907	1,220	—	
明治 41 年	1908	1,093	—	
明治 42 年	1909	1,388	—	
明治 43 年	1910	1,732	—	
明治 44 年	1911	1,545	—	
大正 元年	1912	1,844	—	
大正 2 年	1913	2,339	—	
大正 3 年	1914	2,960	—	
大正 4 年	1915	2,685	—	
大正 5 年	1916	2,952	2,482	84.0
大正 6 年	1917	3,600	—	—
大正 7 年	1918	3,549	3,220	90.0
大正 8 年	1919	3,588	3,207	89.0
大正 9 年	1920	3,047	2,723	89.0
大正 10 年	1921	3,306	2,776	84.0
大正 11 年	1922	3,347	2,993	89.4
大正 12 年	1923	3,171	2,772	87.0
大正 13 年	1924	3,188	2,598	81.4
大正 14 年	1925	3,535	3,129	89.0
昭和 元年	1926	3,185	2,603	82.0
昭和 2 年	1927	3,268	2,693	82.0
昭和 3 年	1928	3,605	2,699	75.0
昭和 4 年	1929	3,500	2,685	77.0
昭和 5 年	1930	4,037	3,210	80.0
昭和 6 年	1931	3,762	2,895	77.0
昭和 7 年	1932	3,797	2,956	78.0
昭和 8 年	1933	4,011	3,176	79.0
昭和 9 年	1934	4,244	3,381	79.0
昭和 10 年	1935	4,149	3,255	79.0
昭和 11 年	1936	4,119	3,277	78.0
昭和 12 年	1937	3,733	—	—
昭和 13 年	1938	3,881	3,059	79.0
昭和 14 年	1939	3,651	—	—
昭和 15 年	1940	4,145	3,275	79.0
昭和 16 年	1941	4,068	—	—
昭和 17 年	1942	3,558	—	—
昭和 18 年	1943	3,631	—	—
昭和 19 年	1944	3,231	—	—
昭和 20 年	1945	3,008	—	—
昭和 21 年	1946	3,639	—	—
昭和 22 年	1947	3,131	—	—
昭和 23 年	1948	3,588	—	—
昭和 24 年	1949	2,040	—	—
昭和 25 年	1950	3,378	2,735	81.0
昭和 26 年	1951	3,957	3,170	80.0
昭和 27 年	1952	3,591	2,795	78.0
昭和 28 年	1953	3,977	3,090	78.0
昭和 29 年	1954	3,544	2,700	76.0
昭和 30 年	1955	3,279	2,436	74.0
昭和 31 年	1956	2,943	2,129	72.0
昭和 32 年	1957	3,329	2,400	72.0
昭和 33 年	1958	2,667	1,796	67.0
昭和 34 年	1959	2,346	1,529	65.0
昭和 35 年	1960	2,494	1,642	66.0
昭和 36 年	1961	2,194	—	—
昭和 37 年	1962	1,817	—	—
昭和 38 年	1963	1,634	—	—
昭和 39 年	1964	1,205	—	—
昭和 40 年	1965	988	—	—
昭和 41 年	1966	933	531	57.0
昭和 42 年	1967	715	381	53.0
昭和 43 年	1968	503	254	51.0
昭和 44 年	1969	421	201	48.0
昭和 45 年	1970	261	138	53.0



秋田県図

凡例
 ※ 1 俵 = 約 15 kg
 ※ 算出した数値
 ※ 生産量の典拠：『秋田県林業史』下巻より。
 明治 12：表 150、『統計年鑑』
 明治 38～44 年：表 150、『県統計書』
 大正元～14 年：表 151、『県統計書』
 昭和元～11、13 年：表 154、『秋田県林業概要』
 昭和 12、14～20 年：表 154、『秋田県林業要覧』
 昭和 21～24 年：表 155、『秋田県林業要覧』
 昭和 25～35 年：表 155、『秋田県林業の現状と問題点』
 昭和 36～37 年：表 155、林務部資料
 昭和 38～45 年：表 155、『秋田県林業統計』

第3図 秋田県の白炭生産

名称：吉田黒炭窯（よしだこくたんがま）。（本稿では吉田式黒炭窯としている）。考案者：吉田頼秋氏。時期：大正6年（1917）～昭和9年（1934）。規模：奥行き10尺（約3.0m）未満、幅8尺（約2.4m）、高さ4尺（約1.2m）、腰の高さ3尺（約0.9m）。幅／奥行きの比率：0.8。高さ／奥行きの比率：0.4。平面形：卵形。形態的特徴：大小二つの円を縦に組み合わせた卵形。窯底は後方の排煙口に向かって3／100傾斜を付ける。窯の前方に方2尺の点火室を設ける。点火室の右側に1尺間を空けて、幅1尺4寸の窯口を設ける。備考：なし。【資料】『炭窯百態』「六七 吉田黒炭窯（秋田県 吉田頼秋氏）」（pp110～111）。築窯 縦径を定め後端より四割の點を中心として後端を通ずる円周を畫き、前端より二割五分の點を中心として前端を通ずる円周を畫き此二円を連接して類卵形を畫く、窯底は六～八寸掘り下げ二～四寸の厚さに小柴枝條を敷き其上に土を覆ひ打ち固め厚さ四寸位とする後方に一〇〇分の三の傾斜を付す、窯の前端に方二尺の點火室を割し其内に兩壁を粘土と小石を以て厚さ三寸に積み炭火室との間に厚さ五寸高さ窯壁と等高の障壁を設け點火室内径は縦一尺五寸幅一尺四寸となる、障壁上に弦長一尺高さ三寸の弓形の鉄板製導火管を天井に接着して置き障壁の下端中央に通風精煉土管を設置し其内口に調節鉄板を附す、障壁より一尺距りたる横に幅一尺四寸の窯口を設く、排煙口の幅は単価の大小等により定め奥は左右一寸宛て廣く奥行は七寸とする、高さは三寸とし前方一尺の處より勾配を附し一寸五分窯底を下げる、煙道は高さ一尺六寸にて七寸後方に傾け円筒形とし其上は直立する、天井勾配は一〇分の三・五乃至一〇分の四とする、築窯工程は燃材採取を別とし築窯人夫のみ一二人、役石二円、鉄板製のもの三円、土管一円二〇錢。製炭 製炭はナラを主とし一窯詰込量五〇〇～一五〇〇貫、詰込には径五～六分の材を敷木として用ふる、上げ木は後方一〇～一五寸を横に前部は縦とし密に詰込む。點火時煙突口温度四〇度に達すれば煙突口蓋を去り八五度にて着火を認む、煙突口温度八〇度～八三度で炭化を進行するやう通風口及煙突口を調整する、八〇度以下となれば少量の屑炭にて加熱する。

乾燥六～八時間、炭化八二時間、製煉六～八時間、煙突を除去し煙道口を密閉し通風口を密閉し消火す、消火時間三〇～四〇時間、立て木六四二・六貫、上げ木二五五貫、燃材四二貫、出炭量立て木炭一二五・六貫、上げ木炭一九・三六貫、収炭率一六％、燃材を加えて一五・四％。

名称：秋田日窯（あきたひがま）。いわゆる吉田窯（本稿では吉田式白炭窯としている）。考案者：吉田頼秋氏。時期：大正6年（1917）～昭和9年（1934）。規模：奥行き5尺（約1.5m）、幅4尺（約1.2m）、高さ4尺3寸（約1.29m）、腰の高さ3.3尺（約0.99m）。幅／奥行きの比率：0.8、高さ／奥行きの比率0.86。平面形：類円形。形態的特徴：窯底は大小二つの円を縦に組み合わせた楕円形、壁を含めた形態は円形基調。窯底と窯壁に割石を並べる。壁幅2.5尺（0.75m）と厚い。窯口幅1尺（約0.3m）と狭い。備考：なし。【資料】『炭窯百態』「一 秋田日窯（秋田県 吉田頼秋氏 築窯）」（pp125）。築窯 構造は吉田窯と類するが日窯として形状を小さくしたものである。奥行五尺最大幅四尺径の円を後部に、二尺八寸径の円を前部に畫く。窯底は地上に厚さ八寸程割石を並べ其上に茅を覆ひ土を置き五寸の暑さとし水平に叩き固める。窯口幅下一尺、上八寸、高さ一尺六寸、所謂戸前石も吉田窯に準ず。窯壁高さ三尺三寸垂直、排煙口幅八寸、高さ四寸、奥行七寸、掛石は薄くする。煙道は下部廣く後方に傾斜し上部垂直、煙道口奥行四寸、幅三寸、天井は棚置法により最後部後壁より二尺の處にて高さ一尺天井厚さ頂三寸周四寸五分、築窯材料切石一一個、割石六八六貫、土八五一貫、築窯工程一三人。製炭 詰込量雜木一二五貫、カシー三〇貫、燃材約二七貫、乾燥點火時間約一二時間、炭化時間約二五時間、製煉時間約六時間を要した、之は特に注意を払つて乾燥及び炭化した為で通常一昼夜に製炭するのである。収炭率一二・八％、燃料加算一〇％。

この他にも、いくつかの炭窯の名称を確認したが、内容を確認するに至らなかった。今後の課題と

したいが、上述した吉田頼秋氏による吉田式黒炭窯・吉田式白炭窯が、秋田県を代表する炭窯である。

(3) 民俗学的調査事例

高橋 1995では、民俗学的調査事例として白炭窯2例、黒炭窯3例を紹介している。対象地域は、現在の湯沢市・横手市・由利本庄市・雄勝郡羽後町など秋田県南地域である。以下、調査・報告された事例について、特徴的な事項（傍線筆者）に留意しながら具体的に確認していく。

【秋田事例1】雄勝町（現湯沢市）の事例：白炭窯

現在（1995年当時）最も炭焼きが盛んな地域で、13名が白炭を焼いており、かつては黒炭を庭先で焼いていた時期もあったという。調査したのは竹内慶一氏の白炭窯で、炭焼きは祖父・父と3代続くという。

窯の構造は、吉田式白炭窯とほぼ同じで、多少小さめである。奥行き165cm、幅150cm。壁幅75cm。築窯の際の留意点として3点が挙げられている。水が容易に確保できること。木の運びやすいところ。地山からの湿気の入りにくいところ。また、底の部分に丸太を敷いて湿気を取り除く工夫をしている。

製炭に要する時間は約1週間とされる。

【秋田事例2】山内村（現横手市）の事例：白炭窯

山内村は、かつて吉田頼秋氏が講習会を行ったところで、講習会を受けた何人かがおり（1995年当時）、炭焼きが盛んに行われた地域である。かつては25戸のうち20戸が炭焼きを行っていたとされるが、現在（1995年当時）炭焼きを行っているのは、吉野福治氏一人であるという。

窯の構造は、吉田窯よりやや小さめだが、吉田窯の系譜をひく窯と考えてよいとされる。

製炭に要する時間は、5日間から1週間とされている。

【秋田事例3】雄物川町（現横手市）の事例：黒炭窯

祖父・父と三代続く川崎伝次郎氏の炭窯である。調査したのは黒炭窯だが、父の代には白炭も平行して焼いていたようである。

窯の構造は、昭和初期に秋田県の製炭技師であった佐藤克三氏考案によるものとされる「佐藤窯」の系譜という。直径10尺（約3.0m）の円形の窯である。そして、点火室と炭材の出入り口が別に設けられていることに形態的特徴がある。

製炭の日数は約2週間である。工程による内訳は、1日目：木炭を出し、原木を入れる。2日目：火付け、送付口調節。3～7日目：炭化進行。7日目：送風口調節、窯をとじる。7～14日目：消化・冷却。

【秋田事例4】大内町（現由利本庄市）の事例：黒炭窯

かつて炭焼きが盛んな地域のひとつであったが、現在（1995年当時）では鈴木亮一氏一人が炭焼きを行っている。かつては白炭を焼いていた時期もあったが、作業に拘束される時間の大きいことから、黒炭に切り替えたという。窯は自宅から歩いて1分の距離にあり、2つの炭窯から交互に黒炭を出している。

窯の構造の特徴として、ひとつの窯は炭材の出入り口と点火室が同じもの（A）を使用し、もうひとつの窯は点火室と別に炭材の出入り口のある窯（B）を使用している。両者の築窯の時期差や系譜の違い、効率性などには触れられていない。

製炭は、どちらの炭窯も炭材を入れてから出炭まで2週間前後かかり、火を止めてから4日間窯を冷ましてから出炭する。出炭量は、いずれの炭窯も大体同じとされる。

【秋田事例5】羽後町の事例：黒炭窯

雄勝郡内の4分1弱の木炭を生産した製炭の盛んな地域である。現在（1995年当時）5人の方が炭焼きに従事しており、全員黒炭を焼いている。5人の一人土田政蔵氏は、昭和20年から炭焼きを始め

たという。

炭窯の構造は、直径10尺（約3.0m）の丸窯で、点火室と炭材の入り口とが別になっている。吉田式の窯より窯の中の傾斜度を急にする等の改良をした窯とのことである。佐藤窯【秋田事例3】に類似するが、異なる点は、点火口と煙道を結ぶ線に対して、炭の出入り口と線対称にある位置に、窯の壁面方向に5寸程の空洞を設けている点である（文章記載のみで図示されていない）。これにより点火口から入る熱が窯の中に均等に滞留するようになり、1割近く出炭量が増加したとのことである。

製炭は、約15日かけて炭を焼き、時間をかけて冷やす点に特徴があると指摘されている。

次に現八幡平市安代地区＝旧安代町田山に隣接する鹿角市の事例について確認する（註13）。

【秋田事例6】鹿角市の事例：白炭

戦後に炭焼きを行った人の証言である。「戦後、冬場（十一月～三月）の主な仕事として、二～三年炭焼きを行った。」という。筑窯は、「窯を作る場所は、炭焼きに水が必要であるため、小川のそばに建てた。屋根はかやでふき、窯の周りのかべは、一メートル五〇センチ位の丸木を建てて囲んだ。窯の大きさは、10尺位の丸型であった。」「炭材としてナラやブナの広葉樹を使って焼いた。」という。

【秋田事例7】鹿角市の事例：白炭

戦前から昭和三十年頃まで炭焼きをした方の証言である。「おじいさんの代では、白炭を焼いたが、作業が暑くて容易でないので、黒炭を焼くようになった。窯は、壁土にシラスを混ぜ、下側は七対三、上側は反対に三対七の割合にした。窯作りは、稲刈り後にすぐ始め、二人でやって一カ月位、一人では一ヶ月半位かかった。また、一人の時は、窯は小さく二人の時は、やや大きめに作った。」
「屋根の周りは、近くの山からとってきたかやでおおった。周りの炭材の量にもよるが、一窯二～三年使った。」
「炭材は、ナラの木を中心として焼き、冬場木を切り、貯めておき、一年を通じて焼いた。大きい窯で五十俵、小さい窯では三十俵位一度に焼けた。」という。

いずれも白炭を作っていたという証言、また、白炭から黒炭へ移行したとの証言に留意したい。

（4）考古学的調査事例（第4・5図）

秋田県の考古学的調査事例として6例を確認することができた。以下、具体的にみていく。調査事例秋田No.は、調査年次順に付した。

【秋田No.1】秋田県能代市蟻ノ台遺跡S X01炭焼窯状遺構。立地：不明。規模：550×300cmまたは300×200cmに周溝が加わる形態か。平面形：楕円形か、煙道不明。付属施設：周溝1？窯底からの外側に続く直線的な溝1。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：堆積土は全層にわたり炭化材を含み、底面には石、レンガ、炭化材などが横たわり、崩壊したものと思われる、との所見。著しく削平されており、点火室・煙道も不明。時期：近年使用された炭窯跡。形態：不明。黒炭・白炭の別も記載なし。平面図を窯本体（300×200cm（約10×6.5尺））と周溝として把握するのが規模的には妥当か。文献：『真壁地遺跡・蟻ノ台遺跡発掘調査報告書』秋田県文調報第102集、1983年。

【秋田No.2】秋田県河辺郡河辺町（現秋田市）石坂台Ⅷ遺跡S X16炭窯跡。立地：平坦面。規模：160×120cm（約5×4尺）。平面形：卵形、煙道1。窯壁は、河原石が幾段にも積み重ねられ、目貼りとして粘土が用いられる。焚口は両側に柱石あり、2つの掛石が載る。煙道部の両側に枕石と称する石を埋め込み、掛石を載せる。柱石・枕石とも角材状に加工したもので、底面は軟質の岩を扁平に切り、方形・長方形に加工し、窯口と煙道部から敷いているが、途中で足りなくなり、河原石2個と粘土を敷くことによって完成させている。窯底は、ほぼ水平である。付属施設：なし。関連施設：窯の前庭部に炭窯に伴う土坑3（S K18・19・20）。そのうち一つ（S K20）は土取り穴1で、2.8×

1.8mの不整な楕円形で底面は凸凹あり。出土遺物：鉋？（図示のみ）。備考：調査以前から塚状に遺存し、周囲から炭化物・焼土・炉壁・河原石などが認められる。時期：大正末から昭和初期。「昭和30年代まで、河辺町岩見で、吉田窯で製炭に従事されていた方の話をうかがうことができた。話を総合してみるとS X16は非常に丁寧な作りであり、規範に合致するのであれば比較的古いのではないか、ということであった。となると白炭窯の建設法を具体的な数字で明示し、築窯を奨励していた大正末から昭和初期の年代を想定できるであろう。」（pp566～567）。形態：吉田窯と称される白炭窯。文献：『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ 石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡』秋田県文調報第150集、1986年。

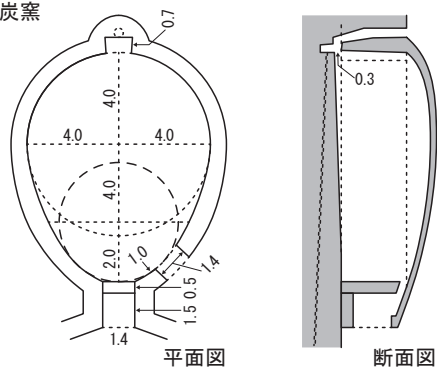
【秋田No.3】秋田県能代市寒川Ⅰ遺跡第1号炭焼窯。立地：斜面。規模：約200×130cm（約6.5×4.3尺）。平面形：略二等辺三角形、焚口は斜面下方、煙道は斜面上方。付属施設：窯本体に付属する楕円形の約260×240cmの掘り方1、作業場か。西側でレンガ、東側で鉄鋤が複数出土。レンガは焚口部を閉塞するために用いたもの。関連施設：なし。出土遺物：土管。鉄鋤1。レンガ多数。備考：寒川Ⅱ遺跡の南斜面下部でも本遺構と同じ炭窯が検出されている。削平が著しく、底面付近のみの検出であり、詳細は不明。時期：地権者の多賀谷政夫氏が所有・使用したもので、大正時代から昭和にかけて操業。形態：不明。黒炭・白炭の別も記載なし。文献：『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』秋田県文調報第167集、1988年。

【秋田No.4】秋田県仙北郡南外村（現大仙市）小出Ⅱ遺跡S W17炭窯。立地：斜面。規模：約250×220cm（約8×7尺）、焚き口が約100×80cmの大きさで窪んでいる。平面形：楕円形、窯体部を覆う土が土手状に周囲に残る。煙道は礫を整然と積み重ねている。焚口が楕円形に窪む。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：現地表面において中央の窪んだマウンド状になっていた。窯本体は、旧表土に角礫を芯材として、その上を暗褐色土と黄褐色土で葺いたもの。時期：中世から後の時代と報告されているが、検出状況から近・現代か。形態：内壁部や焚口付近に整然と積まれた礫から石窯であったか。文献：『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ－小出Ⅰ遺跡・小出Ⅱ遺跡・小出Ⅲ遺跡・小出Ⅳ遺跡－』秋田県文調報第206集、1991年。

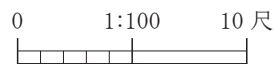
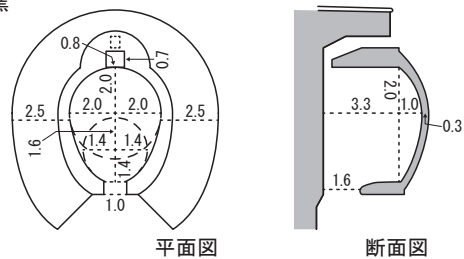
【秋田No.5】秋田県大曲市太田遺跡S W83炭焼遺構。立地：斜面。規模：約130×110cm（約4×3.5尺）。平面形：楕円形、奥が「コ」字形に約80×20cmの大きさで張り出す。この部分に石敷なし。煙道があったか。付属施設：周溝1、窯の斜面上位に幅約20cm、深さ約10cmの溝が巡る。焚口左側に一辺約30cmの隅丸方形の土坑1、埋土に炭が多量に含まれる。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：厚さ10cm程度に切り出した凝灰岩で窯体を構築する。床・壁とも非常に強く被熱し、もろい。埋土中に多量の炭・焼土・壁材が入る。時期：窯体に接して杉の大木があり、切株の年輪は1988年時点で51年を数える。下限年代は1937年頃か。戦前と推定。形態：白炭窯の可能性が高い。文献：『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ－太田遺跡－』秋田県文調報第207集、1991年。

【秋田No.6】秋田県北秋田郡鷹巣町（現北秋田市）脇神館跡S W13炭窯跡。立地：S D02堀跡の窪地を利用して築窯される。規模：180×145cm（約6×4.5尺）。平面形：卵形、煙道1、レンガ。付属施設：焼土面を取り除くと、灰白色土粘土の窯底（1層）を確認し、下位に人頭大や拳大などの円礫が2.1×1.7mの範囲に敷き詰められ、下位に橙色の粘土層（2層）が貼られ、さらに下位に炭化材が窯底の長軸に直交するように（短軸に沿って）敷かれ（3層）、その下位には、幅25cmほどの溝が窯底に十字に掘られ、窯口方向からさらに外側に延びる。排水溝と推定される。報告書で言及されていないが、窯底下位に敷き詰められた礫、敷き詰められた炭化材（木材が炭化したもの）は、最下部に設けられた溝とともに排水・排湿・保温のための施設と推定される。関連施設：なし。出土遺物：

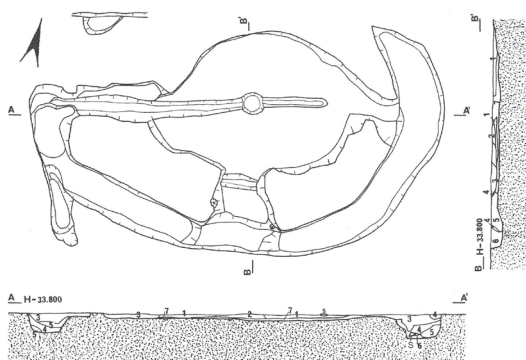
吉田黒炭窯



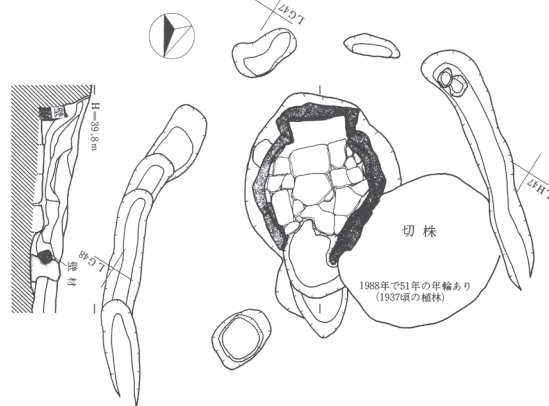
秋田日窯



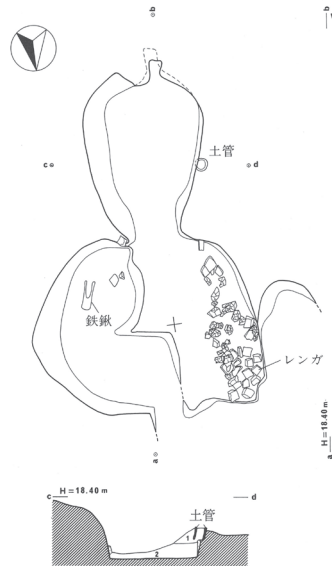
【秋田 No. 1】蟻ノ台遺跡S X01 炭焼窯状遺構



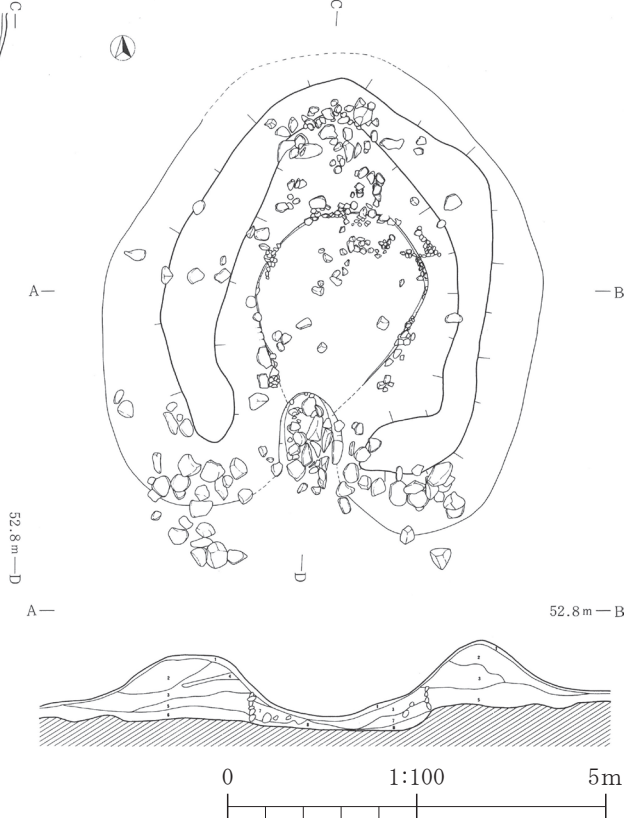
【秋田 No. 5】太田遺跡SW83 炭焼遺構



【秋田 No. 3】寒川 I 遺跡第 1 号炭焼窯

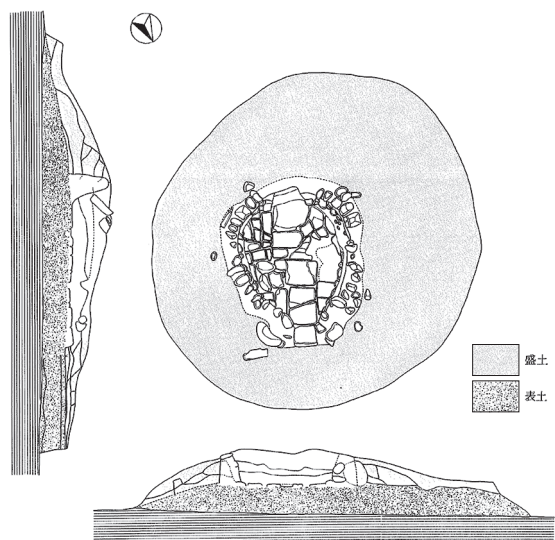


【秋田 No. 4】小出 II 遺跡SW17 炭窯

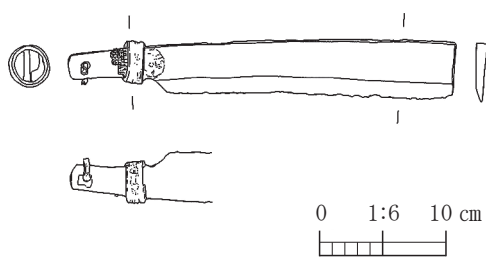


第 4 図 秋田県の炭窯跡の発掘調査事例 1

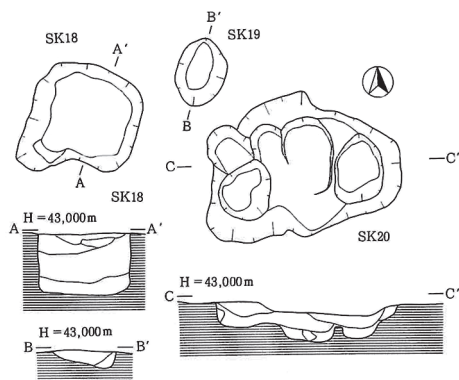
【秋田 No. 2】石坂台Ⅷ遺跡 S X16 炭窯跡



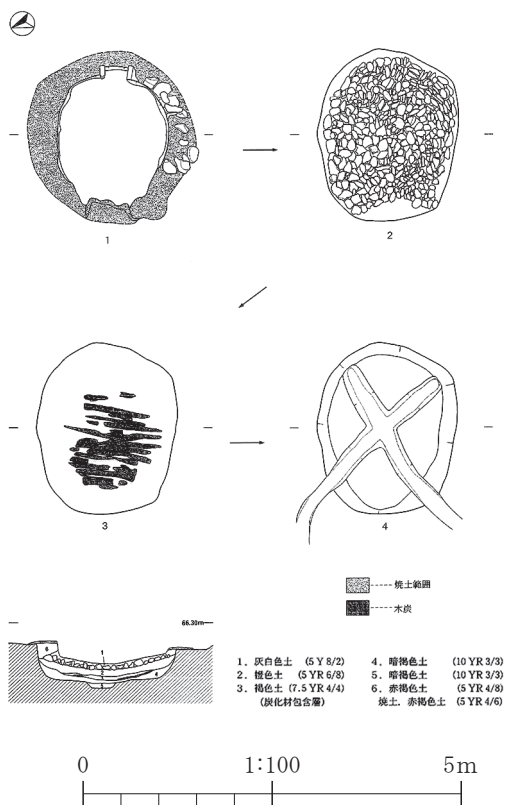
S X16 炭窯跡出土遺物



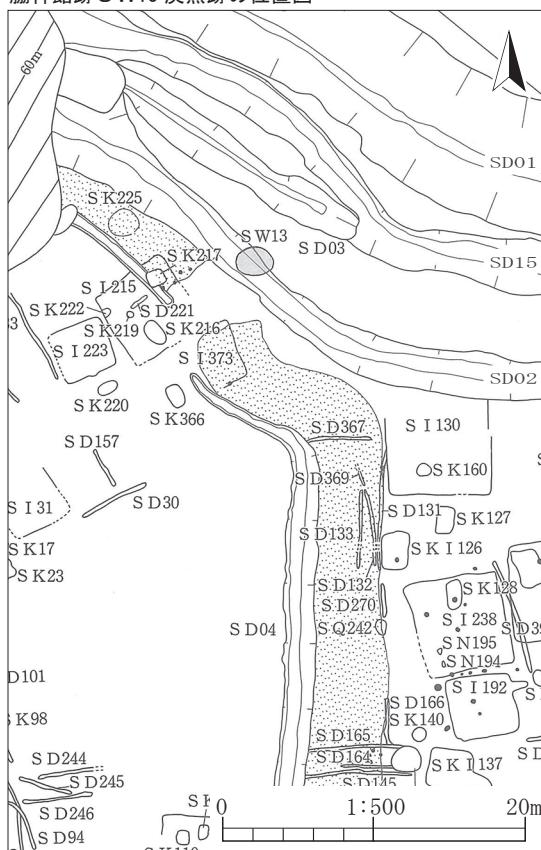
S X16 炭窯跡周辺の土壌 (SK18・19・20 土壌)



【秋田 No. 6】脇神館跡 SW13 炭窯跡



脇神館跡 SW13 炭窯跡の位置図



第5図 秋田県の炭窯跡の発掘調査事例2

なし。備考：表土を除去した段階で径4.2mの略円形を呈する炭化物混じりの暗褐色土プランとして確認。時期：大正時代末から昭和初期。形態：吉田窯と称される日落窯。文献：『脇神館跡－県道木戸石鷹巣建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』秋田県文調報第284集、1999年。

以上は、築窯された炭窯跡の事例である。限られた発掘調査事例ではあるが、白炭窯の事例が多く、【秋田No.2・5・6】など、より重厚に築窯された石窯の事例が確認できる。

次に参考事例として、伏せ焼きと思われる製炭の痕跡を調査した事例についても確認する。

【秋田No.7】秋田県河辺郡雄和町（現秋田市）石坂台Ⅳ遺跡S N01炭焼窯。立地：台地平坦面。規模：長さ約1000×幅120～125cm。平面形：長楕円形か。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：昭和59年の分布調査で「焼土・炭化材の詰まった土壌」とされていた。長軸は西北西－東南東。床面から10～15cmの厚さで炭化物がほぼ全面に認められる。床面は平坦で硬くしまり、よく焼けている。周壁の一部もよく焼けている。時期：近代、明治時代以降の構築か。形態：伏焼き用の簡便な炭焼窯。文献：『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ 石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡』秋田県文調報第150集、1986年。

【秋田No.8】秋田県河辺郡河辺町（現秋田市）石坂台Ⅳ遺跡S N02炭焼窯。立地：台地平坦面。規模：長さ約860×130cm。平面形：長楕円形とするが長方形か。付属施設：幅10cm、深さ5～6cmの周溝様の凹みがある。関連施設：なし。出土遺物：炭化物層よりフレーク3点。備考：長軸方向東－西。床面は平坦で硬くしまる。床面はよく焼けており、西側に赤変の著しい箇所がある。周溝も強く焼けている。炭化物の堆積は10～20cmの厚さでほぼ全面に認められる。炭化物の径の比較的大きい材の細片（2～3cm）と灰状のものは東側に多く、計1cm以下のものは西側に多いという分布を示している。時期：近代。形態：炭焼きの一製炭法である「伏焼」遺構。文献：【秋田No.7】と同じ。

【秋田No.9】秋田県河辺郡河辺町（現秋田市）石坂台Ⅳ遺跡S N17炭焼窯。立地：台地平坦面。規模：不明。平面形：不明。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：調査区を北東－南西方向に走る農道北西側法面で検出された。農道工事の際、炭や焼けた土がたくさん出てきた、という地元の方の話から精査して確認できたものである。遺構は農道工事とその後の伐採林運搬に伴う重機により大半破壊されており、若干の痕跡を残すに留まる。検出された地点の西側には延びないようであるから、S N02と同様長軸方向を東－西にとる窯跡の西端（壁）の一部と考えられる。S N01・02・17の所見として、「3基の遺構は、形状・埋土・床面等の状況から炭焼の一製炭法である「伏焼」遺構と考えられる。しかしながら、この地区で炭焼きが行われていたこと自体、地元の方の話でも明らかにすることはできなかった。従って操業年代は不明である。」（pp43）と記す。また、「近代には、昨今あまり見られなくなりつつある炭窯の一形態を示す「伏焼」と考えられる遺構が3基確認できた。仮に明治時代以降の構築とすれば、白炭窯・黒炭窯といった当時（明治末～昭和20年頃か）奨励されていた製炭法とは、明らかに形態の異なる窯を作り製炭を行っていたことから、年代観と合わせて製炭の目的、炭の用途などについて今後明らかにしていかななくてはならない。」（pp43「第3節 まとめ」からの抜粋）との記載がある。時期：近代。形態：炭焼きの一製炭法である「伏焼」遺構。文献：【秋田No.7】と同じ。

【秋田No.10】秋田県河辺郡河辺町（現秋田市）石坂台Ⅶ遺跡S N24炭焼窯。立地：台地南端の緩斜面。規模：1030×185cm。平面形：不明、不整な溝状？付属施設：窯体の南側に幅40～100cm程の土手状の高まりがあり、さらにその南側には幅2m程の平坦面が作られている。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：埋土は、2～3cm程の炭を多量に含み色調は黒色でもろい層、細かく砕けた炭と地山の細粒が混じりやや粘性を帯びた黒褐色を呈する層、窯体の上にかけてられた土と炭の細片が混じ

る黒色の層の3つで構成されている。3層とも横断面ではレンズ状の堆積層となって観察でき、炭の層は厚さ6～8cmを測る。底面西側2/3程度が高温であったため焼土化している。時期：近代。形態：炭焼きの一製炭法である「伏焼」遺構。文献：【秋田No.7】と同じ。

【秋田No.11】秋田県河辺郡河辺町（現秋田市）石坂台Ⅶ遺跡S N25炭焼窯。立地：台地南端の緩斜面。規模：530×130cm。平面形：不整な溝状？付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：検出の状況からS N25はS N24の構築・使用以前に作られ、S N24の構築・使用時には既に片づけられ、S N24の作業用の空間として利用されていたと推測。S N25よりもS N24が新しいが、同軸線上に構築されていること、この種の窯は本来1回限りのもので、継続して用いられたものではないことを考えると、S N24・25は同一地点での2回の作業結果を示すものである。

また、両方の窯ともこの南側の傾斜面が、幅2m程で削平されて平坦面となっている。これは現材である伐採後のナラ・ブナ等の薪を積み上げていくような作業空間として窯体の構築時に先んじられたものと推測できる。時期：近代。形態：伏せ焼き。文献：【秋田No.7】と同じ。

【秋田No.12】秋田県河辺郡雄和町（現秋田市）滝ノ沢Ⅱ遺跡S N01炭焼窯。立地：丘陵平坦面。規模：800×130～140cm。平面形：長楕円形。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：S N01～04は、ほぼ2.1～2.6mの間隔をおいて並列する。長軸方向は、北西－南東方向である。4基はいずれも床面に焼土・炭化物の広がり認められ、埋土中にも多量の炭化物が堆積している。時期：近代。形態：伏せ焼き。文献：『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ 石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡』秋田県文調報第150集、1986年。※『秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内発掘調査報告書 滝ノ沢Ⅱ遺跡』秋田県文調報第92集、1982年では「これは戦中から戦後にかけて地元住民が使用した簡便な炭焼用の施設であり、本報告に記載しなかった」とされたが、石坂台Ⅳ遺跡で3基、石坂台Ⅶ遺跡で2基検出された炭焼窯の報告（第150集）に際して、掲載・報告された。

【秋田No.13】秋田県河辺郡雄和町（現秋田市）滝ノ沢Ⅱ遺跡S N02炭焼窯。立地：丘陵平坦面。規模：790×140～150cm。平面形：長楕円形。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：なし。時期：近代。形態：伏せ焼き。文献：【秋田No.12】と同じ。

【秋田No.14】秋田県河辺郡雄和町（現秋田市）滝ノ沢Ⅱ遺跡S N03炭焼窯。立地：丘陵平坦面。規模：820×140～170cm。平面形：長楕円形。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：なし。時期：近代。形態：伏せ焼き。文献：【秋田No.12】と同じ。

【秋田No.15】秋田県河辺郡雄和町（現秋田市）滝ノ沢Ⅱ遺跡S N03炭焼窯。立地：丘陵平坦面。規模：920×130～160cm。平面形：長楕円形。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：なし。時期：近代。形態：伏せ焼き。文献：【秋田No.12】と同じ。

【秋田No.16】秋田県河辺郡雄和町（現秋田市）滝ノ沢Ⅱ遺跡S N05炭焼窯。立地：丘陵平坦面。規模：400×170cm。平面形：隅丸長方形。付属施設：なし。関連施設：なし。出土遺物：なし。備考：西壁中央に奥行40cm程の半円形の突出部が認められる。床面や壁溝には熱を受け赤変している部分は確認されなかったが、形態と埋土に多量の炭化物が堆積していることから炭焼窯と理解することができる。時期：近代。形態：伏せ焼き。文献：【秋田No.12】と同じ。

4 秋田県における白炭生産と白炭窯の特徴

ここでは、これまで概観してきた統計資料、民俗学的調査事例、考古学的調査事例から、近・現代の秋田県の炭焼きと炭窯について、特徴的な白炭生産と白炭窯を中心にまとめてみたい。その際、岩

手県との差異にも留意する。

(1) 歴史的背景

秋田県では、近世において鉾山の存在と豊かな森林資源をもとに木炭生産が進められたという歴史的な背景があった。さらに、近代の白炭生産においては、大正6年(1917)に製炭師として秋田県に招聘された吉田頼秋氏の業績に拠るところが大きい。

(2) 統計資料

白炭生産が盛んであることは統計資料からも確認できる。炭窯の内訳も白炭窯の割合が高いと推測される。白炭生産の割合は、大正時代が約8～9割を占め、昭和時代も戦前は8割ほどで推移する。戦後は減少傾向を辿り、昭和30年代には7割、昭和40年代には6割から5割にまで減少した。白炭生産が年々減少していったことに伴い、白炭窯の枚数も同様に減少の傾向を辿ったと推測される。

(3) 民俗学的調査事例

【秋田事例3・4】から、かつて白炭生産が中心で、高橋氏による調査が行われた1995年時点では黒炭に移行しつつあったことがわかる。統計資料の数値とも符合する結果である。白炭から黒炭に移行した理由が、作業に拘束される時間などの負担の大きさにあるという証言【秋田事例4】にも留意しておきたい。岩手県側でも同様の証言がある(【事例1】八幡平市安代地区の事例)。

炭窯の構造的には、【秋田事例3・4・5】など点火室(焚口)と別に炭材の出入り口を脇に設ける吉田式黒炭窯独自の特徴を持つ。この特徴は、炭窯の構造的特徴を記した『炭窯百態』にも記載されている。

(4) 考古学的調査事例

確認された事例は、平面形が円形を基調とし、壁面や底面に石組や石敷の痕跡が確認できる吉田式白炭窯の構造である。6例中3例【秋田No.2・5・6】が白炭窯の調査事例であり、白炭生産が盛行した地域的な特徴を反映している。【秋田No.6】など丁寧に地下施設をつくり、排水・排湿・保温に配慮した築窯の工夫の跡も確認できる(註14)。

また築窯された炭窯とともに、より簡易な炭焼き法の伏せ焼きが行われた形跡【秋田No.7～16】がある。前近代からの系譜を持つ炭焼き・炭窯の存在は、岩手県内の調査でも留意すべき点である。

5. 岩手県における近・現代の白炭窯の系譜

(1) 歴史的背景

岩手県の近代の木炭生産では、明治39年(1906)に製炭師として招聘された榎崎圭三氏の業績に拠るところが大きい。ただし、榎崎窯は、もともと中国地方(榎崎氏は広島県出身)の主たる森林資源のクヌギの効率的な使用を目的とした製炭法であり、ナラの大木を使用する岩手県の製炭法には合致しなかった。このことは、その後の岩手県で炭窯の改良が積み重ねられる要因となった(註15)。

(2) 統計資料

近代の岩手県では黒炭窯を主とした木炭(黒炭)生産が行われた一方で、全体の1割ほどの割合で白炭窯による白炭生産が行われていた(註16)。また、白炭生産は、秋田県境寄りの奥羽山系の地域に著しく偏って分布し、田山・雫石・川尻・胆沢など秋田県とのルート上に位置する地域において特にその傾向が顕著である。岩手県の奥羽山系における白炭生産については、全国の炭焼き・炭窯を概観した岸本 1998でも「この地方(岩手の木炭の項)は現在も奥羽山脈沿いで良質な白炭をやっている。」(pp152)と触れられているが、同書にその根拠は提示されていない。しかし、先に触れた岩手県・田山・雫石などの統計資料で確認できる白炭窯の枚数、地域の証言から、岩手県内で秋田県境寄りの奥羽山系の地域に白炭窯が多いという実態は、事実と捉えてよさそうである。

(3) 民俗学的調査事例

岩手県で白炭窯が多く分布する奥羽山系のいくつかの地域で、白炭窯が盛行していた証言を確認することができた。しかし、その理由について直接的に言及したものは確認できなかった。改めて、白炭生産が盛行した事実とその背景について、考えていく必要がある。地理的な繋がりや歴史的背景から、現在の県境を跨いで地域的な繋がりが見られる事例として、八幡平市安代地区（旧安代町）田山と秋田県の鹿角の関係は、すでに確認したところである。

ここでは、秋田県側と岩手県奥羽山系の地域との繋がりを示す民俗的事象の一例を改めて確認する。「白木野人形送り（湯田町）」の特質をまとめた千葉周秋氏は、「このような祭りは湯田町内では下前、野々宿、細内、上左草、桂子沢、長松、本内、本屋敷、ダムで沈んだ杉名沢で行われていた。近年下前（下前厄払い人形送り）、上佐草（佐草の人形送り）の集落で復活した。しかし湯田町の北隣の沢内村ではこのような行事は行われていない。西隣の秋田県で行われている。」と指摘する（註17）。「白木野人形送り（厄払い祭り）」（西和賀町無形民俗文化財）に類似する祭り・行事が和賀川上流域の沢内村には無く、秋田県側で行われているとの指摘は重要である。秋田県側の祭り・行事を見ると、湯田町（現西和賀町）に隣接する横手市の「厄神立て（旧大雄村藤巻）」、「鹿島送り（旧平賀町浅舞）」、湯沢市の「岩崎の鹿島まつり」、能代市の「鐘馗様の祭り（小掛の鐘馗様）」など多くの地域に藁人形を作って祀る厄払い祭りが認められる（註18）。その系譜や関連性は未確認であるが、湯田町の「白木野人形送り（厄払い祭り）」は秋田県の祭りに系譜をもつ可能性が高い。

湯田町で盛んに行われていた白炭生産も、上述した「白木野人形送り（厄払い祭り）」のように秋田県の影響を受けて成立した可能性がある。そして、他の秋田県境寄りの奥羽山系の地域における白炭窯による白炭生産も秋田県の影響を受けていたとすれば、秋田県と岩手県の奥羽山系の地域における炭焼き・炭窯の事例も、地域間で類似する民俗的事象の一例として把握することができる。

(4) 考古学的調査事例

確認された3つの事例、雫石町1例、（現奥州市）胆沢町2例は、いずれも白炭生産が盛んであった奥羽山系の地域である。雫石町の【No.20】の事例は、壁面・底面に石組・石敷を伴う白炭窯の特徴を持つ事例といえる。他の事例は、岩手県における既存の黒炭窯の形態に近い。少ない事例で即断は避けたいが、既存の黒炭窯の形態を維持しながら石組など白炭窯の構造的特徴を部分的に取り入れた折衷ともいえる白炭窯と理解するのが、実態に近いと推測する。今後は、吉田式白炭窯と同定される炭窯跡が調査される可能性、特に調査事例のない田山での調査事例の増加に期待したい。

6. まとめ

近代以降、秋田県では白炭生産が主流で、大正時代に入り、改良窯を奨励して築窯するに際し、吉田頼秋氏を招聘した。岩手県では明治時代末に榑崎圭三氏を招聘しており、このことが、その後の両県の木炭生産の種別、築窯の方向性を決定づけたと考えられる。一方で、主に黒炭生産であった岩手県においても秋田県に地理的に近い奥羽山系の地域においては、白炭生産が盛んだった秋田県の影響を受けて、白炭窯の特徴を取り入れた炭窯が築窯され、白炭が盛んに生産されたと推測される。

しかし、白炭窯による白炭生産については、岩手県や秋田県境寄りの奥羽山系に位置する各自治体が主導的に技術を導入・奨励した形跡を確認することができなかった。この点は引き続き追跡が必要であるが、もし技術の伝播の底流にあるものが、権力を有する上（地域行政）からの枠組みに拠るものではなく、自主的に育まれてきた地域的な繋がり（強さ）に拠るものであったとするならば、そこには、在地において案外に逞しく主体的に生きてきた民衆（地域住民）の姿が見えてくる。

註

- (1)阿部 2021 掲載の第 1 表 (pp67) を白炭窯の内容に絞って編集した。表の典拠などは、阿部 2021 を参照されたい。
- (2)『二戸郡誌』掲載「昭和 30 年度町村別四半期別炭窯数」(pp604) を編集して掲載した。
- (3)岩手県立博物館 1986『安代の民俗』「第 3 章 生業、2 山樵 (春木と木炭)」(pp39 ~ 46)。
- (4)『鹿角市史 第 4 巻』「序説 鹿角の風土と文化、三 近世、四 近代」(pp25 ~ 26)。
- (5)岩手県立博物館 1986『安代の民俗』「2 山樵 (春木と木炭)」(pp39 ~ 46)。同 1987「特論編 I 山村の生業、2. 山村の生業、(3) 春木とヤマゴ (山子)」(pp11 ~ 12)。『安代町史 (下巻)』「第 8 編 現代、第五節 林業、四 炭焼き」(pp714 ~ 715)。『安代町史 (民俗編)』「第三章 地域の産業、第二節 山樵 (春木と木炭)、8 炭焼き」(pp248 ~ 249)。
- (6)『雫石町史』掲載「表 (4) 御明神村木炭生産状況」(pp875) を編集して掲載した。現在の雫石町は、昭和 30 年 (1955) に雫石町、御所村、御明神村、西山村の一町三か村が合併して誕生した。
- (7)山田敏子監修 2007『安代の民俗誌』「第 4 章 生業、第 3 節 林業、2 製炭」(pp132 ~ 142)。
- (8)『雫石町史』「第四節 林産業、二 御明神村の木炭、三 西山村の製炭」(pp872 ~ 880)。
- (9)『秋田県林業史 下巻』は、明治以降、昭和 45 年 (近・現代) までを取り扱っている。同書は 1984 年に再刊されている。
- (10)本文の収集について、直江康雄氏にご協力いただいた。記してお礼申し上げたい。
- (11)吉田頼秋氏については秋田県立博物館 1995 の「調査リポート 吉田頼秋氏を訪ねて」に詳しい。碑文の内容は同文献に拠る。『山内村史 下巻』では、「村の石碑」(pp935 ~ 938) で同碑の所在地・由来・造立・規模について記している。
- (12)『鹿角市史 第 3 巻下』「第 7 章 大正・昭和前期の産業、第二節 畜産と林業」(pp227)。
- (13)『十和田の民俗 (上)』「第三章 生産生業、第四節 林業、二 炭焼」(pp114 ~ 116)。
- (14)岩手県で中世城館の堀跡の窪みを利用して築窯された炭窯に久慈市山根館跡 2 号炭窯跡 (阿部 2021 **[No. 56]**) があるが、窯底の施設に特別な工夫は確認されていない。**[秋田No.6]** の窯底の施設の工夫は、白炭生産に起因するものと考えられる。
- (15)阿部 2018。岩手県における檜崎窯以降の炭窯の形態の変遷については、阿部 2021 を参照のこと。
- (16)『岩手県木炭協会 50 年のあゆみ』掲載の資料「昭和 30 年度以降支部連別炭窯数」に拠ると、昭和 30 年 (1955) の白炭窯 1,893 枚 (8.9%)、黒炭窯 19,441 枚 (91.1%)、計 21,334 枚 (100.0%)。平成 13 (2001) 年の白炭窯 18 枚 (3.0%)、黒炭窯 563 枚 (97.0%)、計 581 枚 (100.0%)。昭和から平成かけて白炭窯の枚数・割合ともに減少していることがわかる。
- (17)「白木の人形送り (湯田町)」は、厄病祭り、人形送り、厄払い人形祭り等といわれ、正月十九日に行われる。湯田町白木野地区公民館で人形が作られ、その人形が地区内を練り歩き、西隣の越中畑地区の境に祭られる。千葉 2000 (pp48 ~ 51)。
- (18)秋田県教育委員会 2014。悪疫から村を守るために村境・路傍に祀られる藁人形は、「人形道祖人」とも呼ばれている。

引用・参考文献

- 秋田県編集・発行 1975『秋田県林業史 下巻』
- 秋田県教育委員会 2014『秋田県の祭り・行事 (改定版)』秋田文化出版
- 秋田県立博物館 1995「企画展 炭の民俗誌 解説資料」
- 安代町史編さん委員会編集、八幡平市発行 2009『安代町史 (民俗編)』
- 安代町史編さん委員会編集、八幡平市発行 2011『安代町史 (下巻)』
- 阿部勝則 2016「岩手県における近・現代遺構の検討－炭窯跡について－」『紀要』第 35 号。(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (以下、「岩手県埋文」と略記する。)
- 阿部勝則 2018「書評 畠山 剛著『炭焼きの二十世紀－書置きとしての歴史から未来へ－』(彩流社 2003 年)」『紀要』第 37 号。岩手県埋文
- 阿部勝則 2021「岩手県における近・現代の炭焼きと炭窯跡」『紀要』第 40 号。岩手県埋文
- 社団法人岩手県木炭協会編集・発行 2003『岩手県木炭協会 50 年のあゆみ』
- 岩手県立博物館 1986『安代町地域総合調査報告書 I 安代の民俗』岩手県立博物館調査報告書第 2 冊
- 岩手県立博物館 1987『安代町地域総合調査 安代の自然と文化』※『安代町地域総合調査報告書 II 安代の自然と文化』岩手県立博物館調査研究報告書第 4 冊、1987 と昭和 62 年度第 2 回企画展『安代の自然と文化展』1987 の合本。
- 鹿角市編集・発行 1993『鹿角市史 第 3 巻下』
- 鹿角市編集・発行 1996『鹿角市史 第 4 巻』
- 鹿角市総務部市史編さん室編集・鹿角市発行 1992『十和田の民俗 (上)』鹿角市民俗調査報告書第三集 (平成二年度調査)
- 岸本定吉 1998『炭』創森社
- 山内村郷土史編纂委員会編集、山内村発行 1990『山内村史 下巻』
- 雫石町史編纂委員会編集、雫石町発行 1979『雫石町史』
- 高橋 正 1995「秋田の炭焼き」『秋田県立博物館研究報告』第 20 号、秋田県立博物館
- 千葉周秋 2000「白木野人形送り (湯田町)」『岩手の祭り・行事調査報告書』岩手県教育委員会
- 二戸郡誌編集委員会編集・発行 1968『二戸郡誌』
- 畠山 剛 2003『炭焼きの二十世紀－書置きとしての歴史から未来へ－』彩流社
- 三浦伊八郎 1933『木炭講話 炭窯之部 炭窯百態』三浦書店
- 山田敏子監修 2007『安代の民俗誌 岩手県八幡平市安代地区』弘前大学人文学部民俗学実習調査報告書 I

東北北部における縄文時代草創期の爪形文系土器について

—板橋Ⅱ遺跡・鹿糠浜Ⅰ遺跡の出土事例の検討—

野 中 裕 貴

爪形文系土器は全国的にも出土事例の少ない土器であるが、近年の復興調査により、分布の空白域であった岩手県沿岸部において爪形文系土器の出土が確認されている。筆者が調査を担当した洋野町の板橋Ⅱ遺跡でも縄文時代草創期の爪形文系土器の破片資料が4点出土しており、観察の機会を得た。そこで、本稿では、東北北部の爪形文系土器を集成し、整理することで地域的傾向を確認することを一つの目的とし、得られた傾向と洋野町内の2遺跡から出土した爪形文系土器について比較検討を行うこととした。検討にあたって、土器の特徴以外にも火山灰との層位関係や¹⁴C年代測定データについても東北北部の爪形文系土器の地域的傾向について捉えることができた。また、今まで類例のなかった岩手県沿岸部の出土事例についても言及することができた。

1. はじめに

爪形文系土器は、主にヒトの爪や様々な工具による刺突や押圧、摘み出しなどによる爪形の文様を特徴としており、編年学的に縄文時代草創期中葉に位置付けられた土器様式である(萩谷 2008)。その分布域は、北は北海道から南は九州南部までと広大であるが、地域間で分布密度に差があることに加え、その大半が破片資料で、全体の器形が分かる資料も限られる。そのため、地域間での対比や列島全体を含めた編年には至っておらず、未だに多くの謎に包まれている土器でもある。

全国的にも出土事例が少ない土器だが、筆者が調査を担当した洋野町の板橋Ⅱ遺跡では、爪形文系土器の破片資料が4点出土し、発掘調査報告書作成にあたって土器観察の機会を得た。また、周辺の類例を調べる中で、近年の復興調査に伴い、この他にも岩手県沿岸部の遺跡において爪形文系土器として報告された資料の存在を知った。従来までの岩手県内の出土事例は内陸部のみに限られていたが、分布の空白域であった沿岸部に出土事例が確認できたことで資料数の若干の増加がみられる。

そこで、本稿では、東北北部(青森・秋田・岩手の3県)の各遺跡から出土した爪形文系土器について資料集成を行い、本土器群の特徴や出土傾向について改めて整理することとした。これにより、現在までの資料の蓄積状況や地域的な傾向が看取できるのか確認することを一つの目的とする。また、板橋Ⅱ遺跡及び鹿糠浜Ⅰ遺跡の出土資料については実際の観察によって得られた情報を元に得られた傾向との比較検討を行い、考察を加えたいと考える。

2. 爪形文系土器研究の略史と編年上の問題点

爪形文系土器が編年学的に位置づけられた発端は、1955年から1960年代初頭にかけて行われた山形県高島町洞穴群(柏倉・加藤 1967)や新潟県小瀬ヶ沢洞窟(中村 1960)をはじめとした洞穴遺跡の発掘調査で、縄文時代早期土器群の出土層位よりも下位の層位で爪形文の施された土器の出土が報告されたことによる。さらに、1960年の長崎県福井洞穴(鎌木・芹沢 1965)の調査で、層位的に早期の土器よりも古い土器であることが報告され、編年上の位置付けはより確たるものとなった。その後、小林達雄氏や山内清男氏らにより爪形文系土器は隆線文土器に後続し、多縄文土器に先行する土器として編年案が示された(小林 1962、山内 1969)。1980年代に入ると、中島宏氏が埼玉県北部の縄文時代草創期資料の集成を行う中で、爪形文系土器と多縄文土器の共伴事例を紹介し、両者には共通点があり、最終的に爪形文系土器が多縄文土器の文様要素に収束する可能性を指摘した(中島 1981)。これ

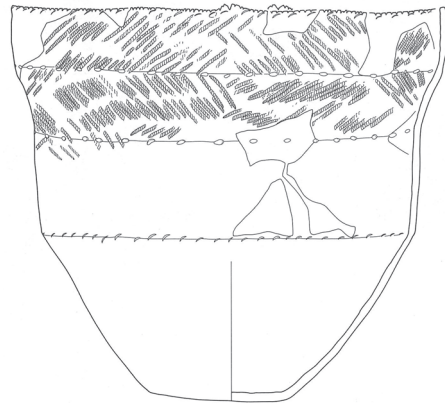
により、爪形文系土器が単独で存在する時期はないのではないかという仮説が提唱された。その後、埼玉県宮林遺跡(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985)調査で竪穴状遺構から両者の共伴事例が報告され、これを皮切りに研究者の間で爪形文系土器が単独で存在する時期が存在するか否かで立場が分かれた爪形文土器様式存否論争が起きている。この問題は現在に至っても未だに解決の糸口を得ていないが、施文手法や文様要素の共通点から両者が近接ないし併行関係にあることが認知されている。

3. 東北北部における爪形文系土器の分布と様相

東北北部における爪形文系土器の分布は限られており、その中でも青森県階上町と岩手県洋野町の境界にまたがる階上岳周辺に比較的多く集中していることが判明している(第3図)。しかしながら、中には破片資料が遺構外から数点出土したのみの遺跡が多く、ある程度まとまった資料が得られた遺跡は数少ない。また、多縄文土器との遺構内での共伴関係が確認できた事例は八戸市櫛引遺跡^{くしひき}での竪穴住居と土坑からの出土例(第1図)のみで、事例数もごく僅かである。さらには、先述の多縄文土器との編年上の問題点に加えて、当該地域においては、爪形文が施された土器の中には平川市碓ヶ関白沢遺跡^{しらさわ}出土資料(第5図5~14)のように近年の研究により縄文時代早期初頭に位置付けられる無文土器の範疇に属する可能性があると考えられている資料が少なからず存在することが判明している。これらの土器と爪形文系土器との関係性の解明がさらなる課題となっている。

縄文時代早期初頭の無文土器については滝沢市内遺跡出土の無文土器群を集成した井上雅孝氏の論考(井上 2009)の中でその特徴が詳細に述べられている。その中で、井上氏は滝沢市内の遺跡で、爪形文・刺突文土器と共に無文土器が同一層位から出土したことに着目し、これらの土器が共伴関係にあると捉え、滝沢市の室小路15遺跡^{むろこうじ}を標識資料として「室小路式」もしくは「室小路段階」という土器群を提唱している(第2図)。さらに、白沢遺跡出土資料と「室小路式」との間に器形などにおいて共通点が見受けられることから、爪形文系土器より無文土器群が成立する可能性を指摘している。また、八戸市潟野遺跡でも類似資料が出土しており、同土器群の分布がさらに広がることが判明している。両者の関係性については今後も追及する必要があるものということを理解しておきたい。

多縄文土器(復元)(S=1/5)



爪形文土器(S=1/3)

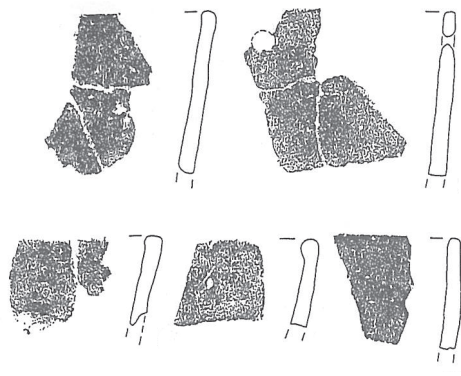


第1図 櫛引遺跡 草創期1号土坑出土資料

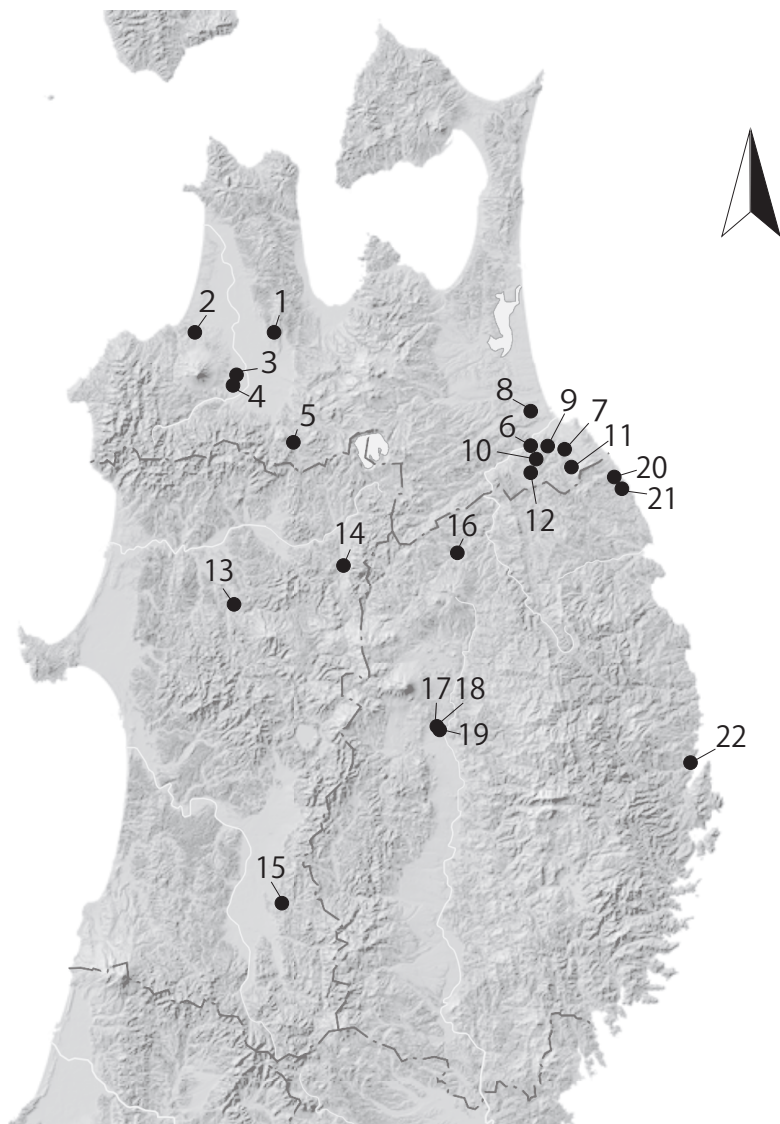
爪形刺突文土器(S=1/3)



無文土器(S=1/3)



第2図 室小路15遺跡出土資料



※国土地理院地図 Vector を下図に使用し、作図。

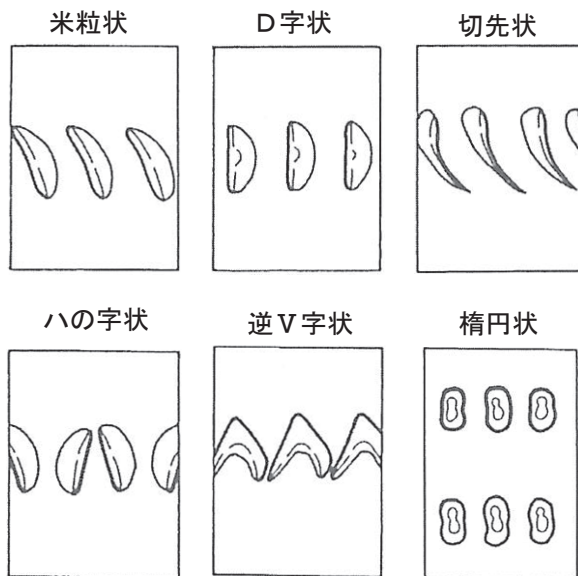
第3図 東北部の爪形文系土器の出土遺跡位置

第1表 東北部における爪形文系土器出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	遺跡の立地	出土状況	番号	遺跡名	所在地	遺跡の立地	出土状況
1	桜ヶ峰 (1)	青森県五所川原市	段丘上 (標高70m)	遺構外 遺物集中地点 (縄文早期の土器混在)	12	駒ヶ沢 黄葉	青森県八戸市南郷	丘陵上 (標高210m)	竪穴状遺構及び遺構外 暗褐色ローム層 (十和田南部火山灰層下層)
2	かまどく 八重菊 (1)	青森県つがる市森田町	段丘上 (標高40m)	遺構外 にふい黄褐色土 (縄文早期、中~晩期の土器混在)	13	桂の沢	秋田県北秋田市森吉	段丘上 (標高100m)	遺構外 黒褐色土
3	とっこ 独狐	青森県弘前市	段丘上 (標高30m)	遺構外	14	あすかたい 飛鳥平	秋田県鹿角市八幡平	段丘上 (標高210m)	遺構外
4	新寺町	青森県弘前市	段丘上 (標高40~50m)	遺構外	15	岩瀬	秋田県横手市山内	河岸段丘上 (標高100m)	石器集中部周辺
5	しろさわ 白沢	青森県平川市碓ヶ間	丘陵上 (標高190m)	遺構外 黒褐色土 (軽石粒多量含む)	16	コアスカ館	岩手県二戸市浄法寺町	丘陵上	遺構外か (十和田ノ倉火山灰層中の記載あり)
6	くしりき 柳引	青森県八戸市	河岸段丘上 (標高20~110m)	竪穴住居、土坑と遺構外 褐~黄褐色土層 (十和田南部火山灰と十和田二ノ倉火山灰の間の層)	17	大新町	岩手県盛岡市	丘陵台地上 (標高130~140m)	遺構外 褐色火山灰 (小岩井軽石層上層)
7	うしごろお 牛ヶ沢 (4)	青森県八戸市	丘陵上 (標高50~100m)	遺構外 黒褐色土 (黄褐色浮石粒含む)	18	大館町	岩手県盛岡市	丘陵台地上 (標高130~140m)	遺構外
8	和野前山	青森県八戸市	段丘上 (標高20m)	遺構外 黒褐~暗褐色土 (黄褐色浮石粒含む)	19	安倍館	岩手県盛岡市	河岸段丘上 (標高140m)	SD801 埋土上部 (流れ込み)
9	尾川中居	青森県八戸市	河岸段丘上 (標高10~20m)	遺構外 黒褐色土 (黄褐色浮石粒含む)	20	板橋Ⅱ	岩手県九戸郡洋野町	段丘上 (標高60m)	遺構外 暗褐~黄褐色土 (南部浮石層下層)
10	かみんたい 鴨平 (2)	青森県八戸市	丘陵上 (標高170~180m)	遺構外 明褐色土 (十和田二ノ倉火山灰含む)	21	鹿糠浜Ⅰ	岩手県九戸郡洋野町	段丘上 (標高50~60m)	遺構外 (捨て場)
11	あまた 滝端	青森県三戸郡階上町	段丘上 (標高150~160m)	竪穴状遺構、集石遺構付近 黄褐色ローム層 (十和田南部火山灰下層)	22	日の出町Ⅱ	岩手県宮古市	丘陵上 (標高100~120m)	遺構外 pit108付近

4. 出土事例と傾向

前節では東北北部における爪形文系土器の分布と様相について簡単に述べてきたが、ここでは、それぞれの報告に基づいて縄文時代草創期の爪形文系土器として報告された（可能性があると考えられたものも含む）3県の出土事例を概観し、地域的な傾向について確認する。爪形文の記載については大新町遺跡での爪形文の基本形分類（米粒状・D字状・切先状・ハの字状・逆V字状・楕円状）（盛岡市教育委員会 1986）を参考に文様構成がどのように展開するかを記載した。各遺跡の所在地については第3図と第1表に示したとおりである。出土資料は第5・6図に集成しているので合わせて参照されたい。なお、板橋Ⅱ遺跡及び鹿糠浜Ⅰ遺跡の出土資料は第7節で詳細に検討を加えることとしたい。



第4図 大新町遺跡における爪形文の基本形分類
（盛岡市教育委員会 1986 より）

(1) 出土事例

〈青森県〉

桜ヶ峰（1）遺跡（青森県五所川原市）（第5図-1：青森県埋蔵文化財調査センター 2001）

丘陵頂部の遺物集中地点（遺構外）より縄文時代早期の土器に混在して口縁部片1点が出土している。口縁部は平縁で緩やかに外反する。口唇部はやや鋭角的である。器厚は7mm程。胎土は砂粒・石英を多量に含む。焼成は軟質で脆い。文様は口唇部の直下から右傾するD字状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施される。

八重菊（1）遺跡（青森県つがる市森田町）（第5図-2：森田村教育委員会 2003）

遺物包含層より口縁部片1点が出土している。口縁部は平縁でやや内湾気味である。口唇部は丸みを帯びる。器厚は7mm程。文様は口縁上部に横向きの米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、2列施される。胴部には斜行する沈線が2条施される。

独狐遺跡（青森県弘前市）（第5図-3：弘前市教育委員会 1998）

遺構外より胴部片1点が出土している。器厚は6mm程。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で、極めて堅緻。文様は左傾する米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施される。

新寺町遺跡（青森県弘前市）（第5図-4：弘前市教育委員会 2009）

遺構外より胴部片1点が出土している。器厚は6mm程。胎土は石英・雲母・砂粒を含む。文様は左傾する米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施される。調査担当者の観察によると、爪形文付近に1mm程の刺突が確認でき、爪形文の施文位置を定めた刺突の可能性があると考えられている。

白沢遺跡（青森県平川市碓ヶ関）（第5図-5～14：碓ヶ関村教育委員会 2002）

遺構外の黒褐色土（軽石粒多量に含む）より50点程の爪形文土器が出土している。個体数は少なくとも10個体あると推定されている。口縁部は平縁もしくは小波状を成し、ほぼ直立するものが大半である。口唇部は丸みを帯びるもの（5・6）と平坦に成形され、断面形が角張るもの（8・11）がある。底部は平底（14）があるのが特筆される。器厚は4～5mm程。胎土は小礫・石英・長石などを含むものが多く、一部は金雲母を多量に含む。焼成は良好で堅緻。内面調整はミガキが施されるものが多い。文様はバリエーションに富み、米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施されるもの

(5～7、14)、爪形文列によって文様を構成するもの(11・12)、横向き爪形文と刺突文の組み合わせ(13)、米粒状爪形文と沈線文の組み合わせ(8～10)などがある。爪形文土器とは別に同層位より無文土器80点が出土していることが注目される。

^{くしひき}櫛引遺跡(青森県八戸市)(第5図-15～24:青森県埋蔵文化財調査センター 1999)

縄文時代草創期の竪穴住居と土坑内からと遺構外より39点の胴部片が出土している。遺構検出・遺物の出土層位は十和田南部火山灰を含む褐色土層と下位の十和田二ノ倉火山灰を含む黄褐色土層の間である。器厚は3～6mm程。胎土は細砂粒を含む他、一部は金雲母を含む。内面調整はナデが施されるものがある。文様は米粒状爪形文が横位に連続して刺突されるもの(15～18)、羽状に刺突されるもの(19～24)があり、いずれも多段に施される。施文間隔には疎密がみられる。遺構内からは多縄文土器が相伴したことが注目される。

^{うしがきわ}牛ヶ沢(4)遺跡(青森県八戸市)(第5図-25・26:八戸市教育委員会 2004)

遺構外の黒褐色土(黄褐色浮石粒含む)より縄文時代早期の土器に混在して胴部片2点が出土している。器厚は3～4mm程。26は胎土に金雲母を多量に含む。焼成は良好。文様はいずれも右傾する細身の米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施される。

和野前山遺跡(青森県八戸市)(第5図-27:青森県埋蔵文化財調査センター 1984)

遺構外の黒褐色～暗褐色土(黄褐色浮石粒含む)より縄文時代早期末～前期初頭の土器に混在して胴部片1点が出土している。器厚は4mm程。胎土は微細な砂粒を含む。繊維は含まない。焼成は良好で、堅緻。文様は右傾する細身の米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施文される。

是川中居遺跡(青森県八戸市)(第5図-28:八戸市教育委員会 1999)

遺構外の黒褐色土(黄褐色浮石粒含む)より縄文時代早期の土器に混在して胴部片1点が出土している。器厚は5mm程。胎土は砂粒の混入が少ないが、3～5mm大の小礫を含む。文様はいずれも右傾する細身の米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施される。

^{かもたい}鴨平(2)遺跡(青森県八戸市)(第5図-29～37:青森県埋蔵文化財調査センター 1983)

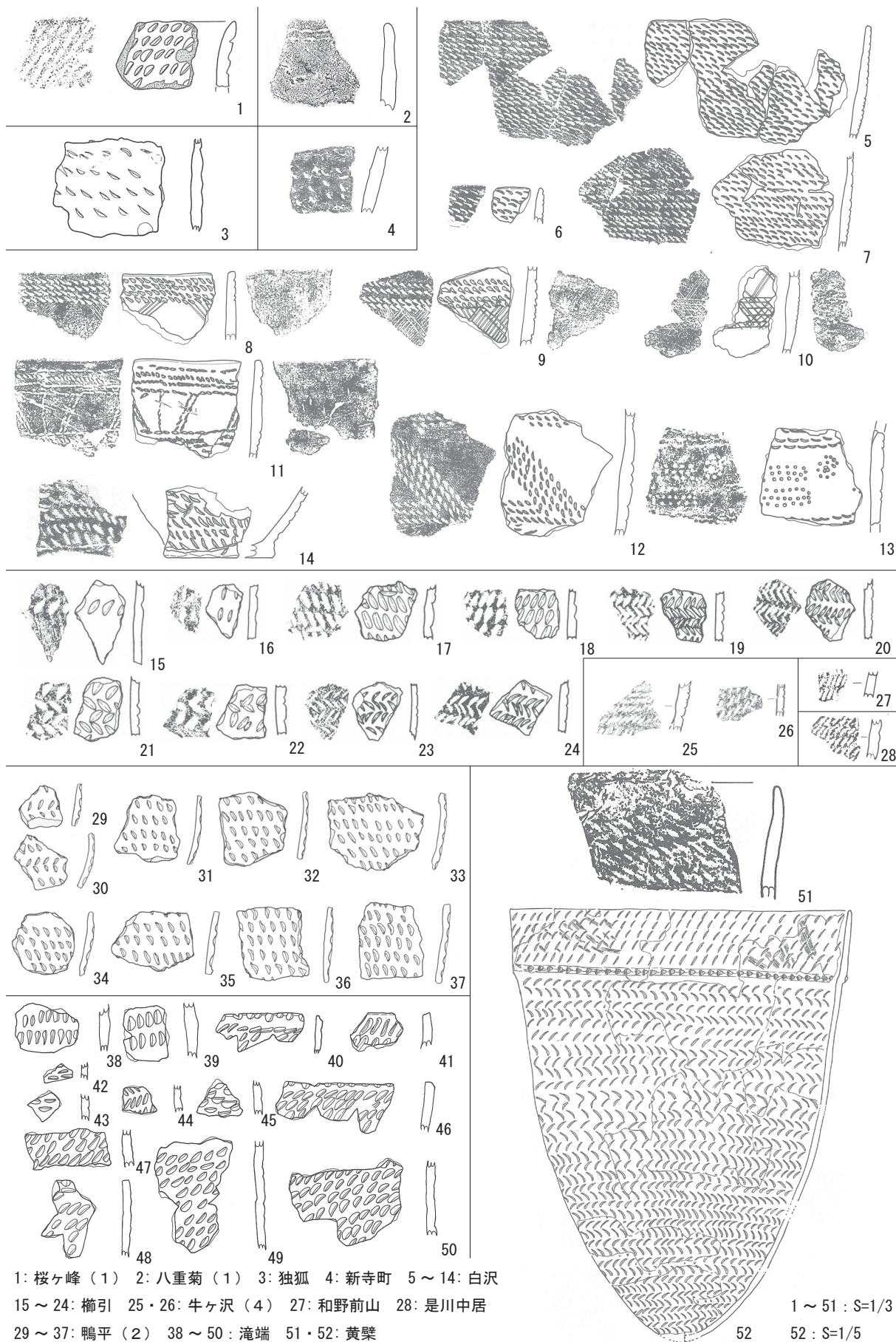
遺構外の十和田二ノ倉火山灰を含んだ明褐色土層より100点以上が出土した。報告書掲載資料はいずれも胴部片である。器厚は3～4mm程。胎土に金雲母を多量に含む。文様はD字状爪形文が横位に連続して刺突されるもの(31～37)、羽状に刺突されるもの(29・30)があり、いずれも多段に施される。34は円盤状土製品の可能性もあると考えられている。

^{たきはた}滝端遺跡(青森県三戸郡階上町)(第5図-38～50:階上町教育委員会 2000)

縄文時代草創期の竪穴状遺構と集石遺構付近より42点が出土している。検出遺構・遺物の出土層位は十和田南部火山灰層から20cm程下位の黄褐色ローム層中である。口縁部は平縁もしくは小波状を成し、ほぼ直立するものと若干内湾するものがある。口唇部は外縁から内縁に向かって削ぐもの(40・46)と平坦に成形され、断面形が角張るもの(41・48)がある。器厚は3～6mm程。胎土に若干の砂礫を含むが、概ね精緻。焼成は良好である。内面調整はナデが施されるものがある。文様は縦向きのD字状爪形文が横位に連続して刺突されるもの(38・39)、横向きのD字状爪形文が刺突されるもの(42・43・45)、右傾するD字状爪形文が同一方向に刺突されるもの(40・41・46～50)、羽状に刺突されるもの(44)があり、いずれも多段に施される。

^{きわだ}黄檗遺跡(青森県八戸市南郷区)(第5図-51・52:南郷村教育委員会 2001)

5基検出した縄文時代草創期の竪穴状遺構の内、3基の埋土及びその周囲より3個体237点が出土している。遺構検出・遺物の出土層位は十和田南部火山灰下位の暗褐色ローム層(黄橙色浮石粒少量含む)である。出土した土器の大半が同一個体で、全体の2分の1にあたることから推定復元図



第5図 東北北部の爪形文系土器 (青森)

(52) が図示されている。復元土器は推定口径27cm、器高36cmの砲弾形の尖底深鉢である。口縁部と胴部の間には段を有する。口縁部は平縁ではほぼ直立する。口唇部は丸みを帯びる。器厚は3mm程。胎土は金雲母を多量に含んで脆い。文様は部位毎に3種類が施されており、口縁部は左傾する細身の米粒状爪形文、段の部分には縦向きのD字状爪形文、胴部から底部には切先状爪形文が羽状に施されている。51は別個体の口縁部である。平縁でやや内湾気味に立ち上がる。文様は左傾する米粒状爪形文が横位に連続して刺突され、多段に施文される。この他に平底の無文土器1点が同層位から出土している。

〈秋田県〉

桂の沢遺跡（秋田県北秋田市森吉）（第6図-53~59：秋田県教育委員会 1994）

遺構外より出土している。出土点数は不明で、口縁部片3点、胴部片20点が報告書掲載されている。口縁部は平縁ではほぼ直立する。口唇部は丸みを帯びるもの(55)や内削ぎ(53)、外削ぎ(54)のものがある。器厚は6~8mm程。胎土は砂粒が少なく、精緻。焼成は良好である。文様は縦向きの米粒状爪形文が横位に連続して刺突されるもの(54・55)、右傾する米粒状爪形文が同一方向に施文されるもの(56~59)があり、いずれも多段に施される。

飛鳥平遺跡あすかたい（秋田県角館市八幡平）（第6図-60~63：秋田県教育委員会 1982）

遺構外より胴縁部片4点が出土している。器厚は4~6mm程。文様は沈線とともに左傾する細身の米粒状爪形文が施されるもの(60・61)と沈線と細身の米粒状爪形文が羽状に刺突されるもの(62・63)があり、いずれも多段に施される。

岩瀬遺跡（秋田県横手市山内）（第6図-64~66：秋田県教育委員会 1996）

石器集中の周辺から口縁部片1点、胴部片3点が出土している。内、胴部片3点は同一個体である。器厚は4mm程。焼成は良好で、堅緻。口縁部は平縁とみられ、ほぼ直立する。口唇部は平坦に成形される。64は縦位に爪形文のような文様痕跡が施される。65・66はハの字状の爪形文が連続して施される。中にはハの字の右側がつながり、直線状に見える2個1組のモチーフがあり、この単位で横位の帯状を成す可能性が指摘されている。また、同じ場所からは無文土器も出土している。

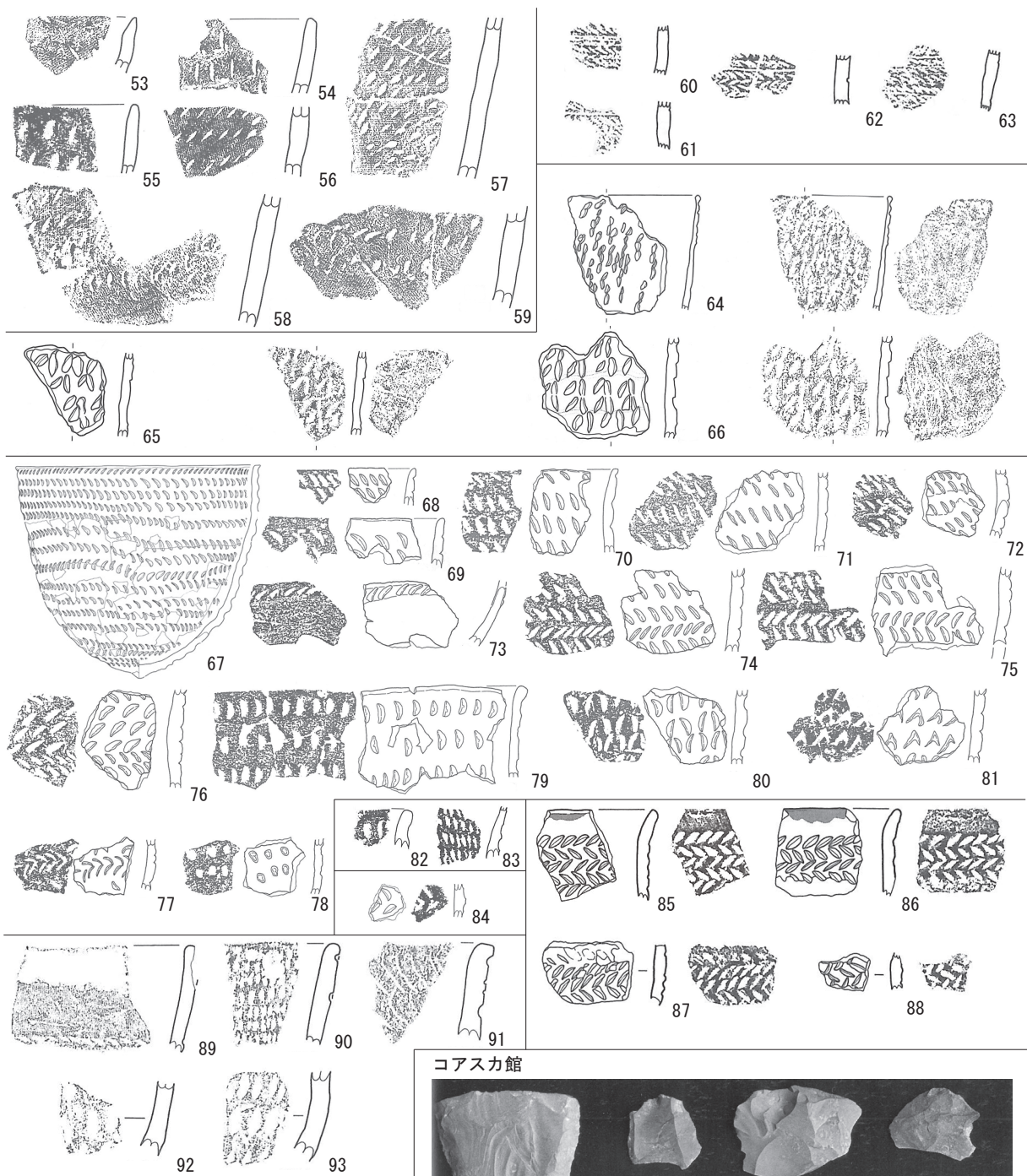
〈岩手県〉

コアスガ館遺跡（岩手県二戸市浄法寺町）（第6図-写真：岩手日報社出版部 2000）

十和田二ノ倉火山灰層中より石器類と共に出土したとの記載がある(岩手日報社出版部 2000)。出土点数は不明であるが、写真を見る限り、10点の資料が確認でき、内2点は口縁部片のようである。共伴する遺物として槍先形尖頭器(第6図写真左上)や剥片類、石皿、磨石が挙げられている。薄手のつくりのようで、胎土には金雲母を含む。文様はいずれの資料も米粒状とみられる爪形文が羽状に連続して刺突され、多段に施される。

大新町遺跡（岩手県盛岡市）（第6図-67~81：盛岡市教育委員会 1986・1987）

第19次調査時に2077片もの爪形文土器が出土している。出土層位は小岩井軽石層の上部に堆積する褐色火山灰層中である。第21次調査時には、1個体分の土器片が出土し、全体の器形が復元され、復元図が図示されている(67)。復元土器は推定口径19.3cm、器高16.7cmのボウル形の尖底深鉢である。口縁部は平縁で、ほぼ直立する。口唇部は平坦に成形される。器厚は3mm程。胎土は緻密で、石英、雲母を含む。焼成は良好で、堅緻。文様は左傾する米粒状爪形文の多段施文を基本に口縁部付近・胴部・底部付近に右傾する米粒状爪形文がそれぞれ1列施されている。他の破片資料も口縁部がやや外反するものがある程度で、器形や胎土については概ね復元土器と似た様相となっているが、文様はいくつか種類が見られる。基本は米粒状もしくはD字状爪形文を左傾・右傾・縦向きの方向にと



53 ~ 66, 68 ~ 94 : S=1/3 94

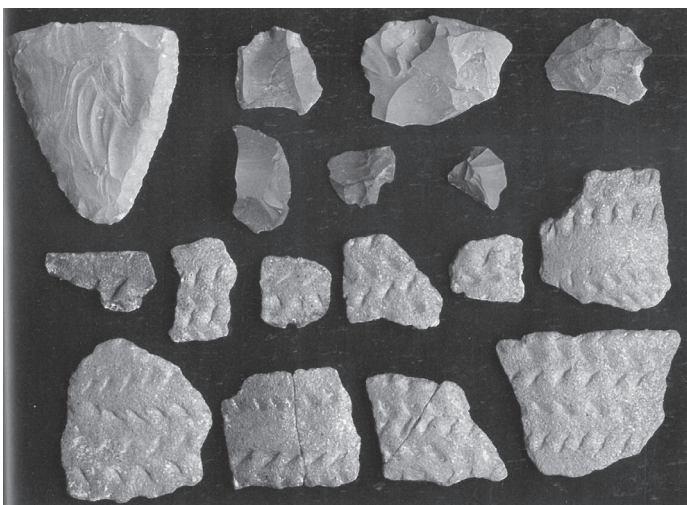
67 : S=1/5

53 ~ 59: 桂の沢 60 ~ 63: 飛鳥平 64 ~ 66: 岩瀬

67 ~ 81: 大新町 82・83: 大館町 84: 安倍館

85 ~ 88: 板橋Ⅱ 89 ~ 93: 鹿糠浜Ⅰ 94: 日の出町Ⅱ

コアスカ館



写真は岩手日報社出版部 2000『いわて未来への遺産 遺跡は語る 旧石器～古墳時代』より加工・転載。

第6図 東北部の爪形文系土器（秋田・岩手）

り、横位に連続して刺突し、多段の構成としている土器が多い。中には、羽状に刺突されるもの（74～77）、ハの字状に刺突されるもの（80）、逆V字状に施文されるもの（81）、楕円状に施文されるもの（78）などが認められる。

大館町遺跡（岩手県盛岡市）（第6図-82・83：盛岡市教育委員会 1997）

第54次調査時に遺構外より口縁部片1点、胴部片1点が出土している。82の口唇部は平坦に成形されており、口縁部は緩やかに外反する。器厚は4mm程。文様は82・83ともに左傾する米粒状爪形文が横位に連続して刺突される。83は多段に施される。

安倍館遺跡（岩手県盛岡市）（第6図-84：盛岡市教育委員会 1987）

第7次調査時に溝SD801（近代以降）の埋土上部より胴部片1点が出土している。同一層に他の時代の遺物が混在することから流れ込みと考えられる。器厚は4～6mm程。文様はD字状爪形文が羽状に連続して刺突される。

日の出町Ⅱ遺跡（岩手県宮古市）（第6図-94：宮古市教育委員会 2018）

遺構外より口縁～胴部片1点が出土している。やや外側に開いて立ち上がる深鉢形の器形で、口縁部は小波状を成す。口唇部は丸みを帯びる。器厚は7mm程。文様は口唇部の直下から細身の米粒状爪形文が横向きと右傾を1列ずつ組み合わせた段が2段、その下に横向き2段が刺突されており、さらにその下は無文となっている。内面にはススが付着する。なお、「室小路式」に類似した縄文時代早期初頭と考えられる刺突文の施された土器と無文土器も出土している。

（2）地域的傾向

それぞれの遺跡における出土事例を基に看取される傾向について特徴ごとに下記に整理する。

器形

黄檗遺跡及び大新町遺跡出土の土器復元例が示すように尖底の深鉢形が主な器形と考えられる。口縁部は平縁もしくは小波状を成し、直立気味かやや外反するものが多い。口唇部は丸みを帯びるものや平坦に成形されるものがある。なお、黄檗遺跡の土器復元例のように口縁部と胴部の間に段を有しているものもある。底部は尖底が基本となると思われるが、白沢遺跡では平底も見受けられる。器厚は3～6mm前後のものも多く、薄手のつくりとなるものが多い。

胎土・焼成

精選された粘土を使用しているためか、精緻なものが多い。胎土中に石英や砂粒を含む事例が見られる他、金雲母を含む事例が比較的多く見受けられる。また、繊維を含まないものが大半である。焼成は良好で堅くしまるものが多い。

文様

施文角度や施文の向きにより細分できる可能性があるが、基本的には米粒状もしくはD字状の爪形文を同一方向か上下で異方向に刺突し、羽状展開させたものを横位多段に施文するものが多い。施文原体としては生体爪以外にもヘラ状工具を用いた可能性があるものも存在する。施文間隔については個体差があるものの、比較的密に施文するケースが多い。また、羽状に施文する場合は上下で切り合う箇所が観察できる場合もあり、施文の順番が分かるものもある。この他に岩瀬遺跡、大新町遺跡ではハの字状の爪形文も見られる。この施文手法は前段階である隆起線文系土器に併用されることもあり、古段階の系譜を継いだ要素であることが指摘されている（盛岡市教育委員会 1986）。白沢遺跡出土例に関しては他の遺跡では見られない爪形文列による幾何学的な文様や爪形文と沈線文や刺突文の組み合わせなどが見られ、その種類も豊富である点が特筆される。

5. 出土層位と火山灰との関係性

東北北部の各遺跡で確認されている爪形文系土器の出土層位については更新世末期以降に降下した十和田カルデラや岩手山・秋田駒ヶ岳を給源とする火山灰との間で層位関係が明らかになりつつある。年代の指標となる火山灰と出土遺物との層位関係の把握は地域間での対比において有用であり、両者の層位関係の解明は遺物の年代を紐解く上でも重要な情報の1つとして理解されている。下記では今までに火山灰と爪形文系土器の出土層位の間を把握することができた八戸市周辺域と盛岡市周辺域の遺跡を例に挙げ、それぞれの状況について詳述する。

(1) 八戸市周辺域

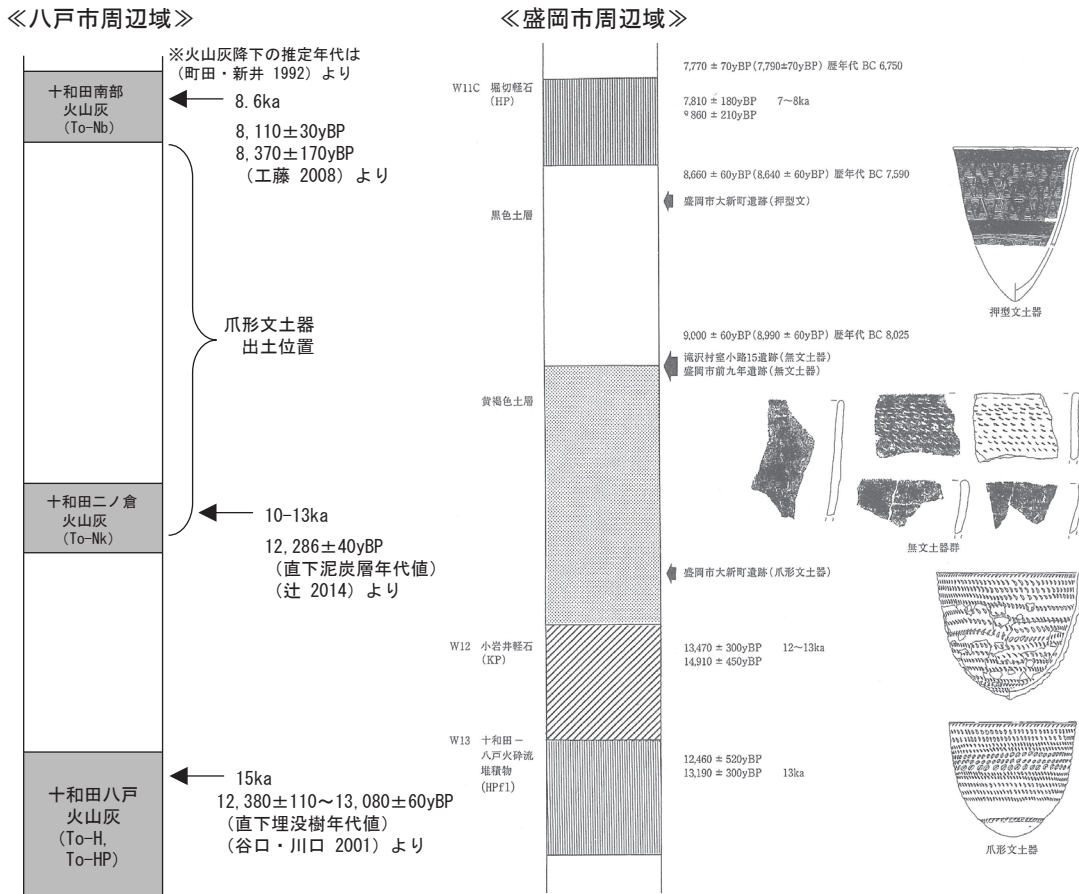
八戸市周辺域には更新世から完新世において複数回に亘って十和田カルデラから噴出した数種類のテフラが確認されており、この中の十和田二ノ倉火山灰、十和田南部火山灰と爪形文系土器の出土層位の位置関係に一定の傾向が見出されている。降下年代としては更新世末期以降に降下した十和田八戸火山灰が約15,000年前、十和田二ノ倉火山灰が約13,000～10,000年前、十和田南部火山灰が約8,600年前と推定されており(町田・新井 1992)、東北北部の遺跡の年代指標として用いられてきた(註1)。

これらの火山灰との関係性を含めて明確に爪形文系土器の出土層位が確認された遺跡は同市に所在する櫛引遺跡、鴨平(2)遺跡、黄檗遺跡、階上町の滝端遺跡の4遺跡が挙げられる。この内、櫛引遺跡では十和田二ノ倉火山灰と十和田南部火山灰の間層からの出土、鴨平(2)遺跡では十和田二ノ倉火山灰をブロック状に含む層からの出土、黄檗遺跡と滝端遺跡では十和田南部火山灰の直下、下層からそれぞれ出土が確認されている。なお、報告書が未刊行のため確かめる術はないものの、二戸市浄法寺町に所在するコアスカ館遺跡では十和田二ノ倉火山灰層中より出土したとの記載があり(岩手日報社出版部 2000)、八戸市周辺域の遺跡の出土状況と概ね似た様相を呈している。以上を踏まえたうえで、簡略的な出土層位の模式図を示した(第7図左)。整理すると、爪形文系土器と十和田二ノ倉火山灰層との関係は未確定であるものの、十和田二ノ倉火山灰層中を含めて出土層位は上層にあると考えられ、少なくとも十和田南部火山灰より下層から出土する土器であるということが言える。

(2) 盛岡市周辺域

盛岡市周辺域には先述した十和田カルデラから噴出した火山灰に加えて岩手山・秋田駒ヶ岳を給源とする分火山灰が確認されている。分火山灰は岩手山南麓から南東麓にかけて分布しており、雫石川北岸や滝沢市の洪積台地縁辺に堆積が確認されている。更新世末期から完新世にかけて複数回の降下が認められることから15のユニット(層単位)に層序区分されており、その大半は岩手山が給源であるが、堀切軽石、柳沢軽石、小岩井軽石については秋田駒ヶ岳が給源となっている。降下年代としては堀切軽石が約7,000～8,000年前、柳沢軽石が約11,000年前、小岩井軽石が約11,000～13,000年前と推定されている(滝沢村教育委員会 2000)。

これらの火山灰が堆積する地域に立地する大新町遺跡や滝沢市の室小路15遺跡の出土遺物との層位的な対比が井上雅孝氏や神原雄一郎氏によって行われている(井上 2009、神原 2009)。対比の結果、大新町遺跡では小岩井軽石より上層の褐色土から爪形文系土器が出土し、さらにその上層の暗褐色土から縄文時代早期初頭の無文土器、縄文時代早期前葉の押型文土器の出土が確認された。室小路15遺跡では堀切軽石より下層の黒色土と黄褐色土層より縄文時代早期初頭の無文土器の出土が確認されている。この結果から爪形文系土器は小岩井軽石より上層から出土し、刺突文や無文土器を伴う無文土器群や押型文土器はこれよりもさらに上層から出土することが明白となった(第7図右)。このことから爪形文系土器は小岩井軽石よりも新しく、縄文時代早期初頭の無文土器群や押型文土器よりも古い年代の土器であることが層位的に判明している。



第7図 八戸市・盛岡市周辺域の層位模式図

6. ¹⁴C年代測定データについて

前節では、火山灰との層位関係から爪形文系土器の出土層位の傾向について概観してきたが、爪形文系土器の¹⁴C年代測定データについてもここで触れておきたい。爪形文系土器についての¹⁴C年代測定データの蓄積は全国的にも十分とは言えない状況にある。まして、出土事例の僅少な東北北部においてはことさら言うに及ばない。そのような中でも現在までに黄檗遺跡、滝端遺跡、白沢遺跡の3遺跡で測定データが得られている。土器付着炭化物による直接的な測定データが得られているのは白沢遺跡のみで、他の2遺跡で測定試料に用いたのは爪形文系土器が出土した遺構内などから採取した炭化材や炭化物である。これと同様の状況は、かねてから問題となっている多縄文土器についても当てはまり、こちらも測定データが得られているのは東北北部では櫛引遺跡のみという状況である。第2表にそれぞれの遺跡から得られた測定データを示しているので参照されたい。参考までに櫛引遺跡で得られた測定データも併せて掲載している。

測定データを見ると、遺構内から得られた炭化物や炭化材を測定試料とした黄檗遺跡で12,360 ± 50yrBP、滝端遺跡で10,260 ± 40yrBP、櫛引遺跡で10,030 ± 50yrBPの年代値が得られている(註2)。一方、白沢遺跡出土の4点の爪形文系土器の付着炭化物から得られた年代値は9,080 ± 60yrBP、9,030 ± 60yrBP、9,410 ± 50yrBP、9,020 ± 40yrBPをそれぞれ示してい

第2表 各遺跡の¹⁴C年代測定データ

遺跡名	測定試料	共伴もしくは周辺からの出土遺物	測定コード	補正 ¹⁴ C年代値 (yrBP)
黄檗	竪穴遺構内の炭化材	爪形文系土器	Beta-148515	12,360 ± 50
滝端	集石遺構の炭化物	爪形文系土器	Beta-138898	10,260 ± 40
白沢	爪形文土器付着炭化物	—	Beta-163735	9,080 ± 60
白沢	爪形文土器付着炭化物	—	Beta-163736	9,030 ± 60
白沢	爪形文土器付着炭化物	—	Beta-163737	9,410 ± 50
白沢	爪形文土器付着炭化物	—	Beta-163738	9,020 ± 40
櫛引	土坑内の炭化物	多縄文土器	Beta-113349	10,030 ± 50

※測定データは各遺跡報告書による。

る。年代値としては黄檗遺跡が最も古く、白沢遺跡が最も新しい値を示しており、その差は約3,000年程の開きがあることが分かる。年代観としては概ね9,000～12,000年前と捉えられるが、いずれの年代値も前節で確認したテフラとの層位関係と大きく齟齬はない。また、白沢遺跡出土の爪形文土器は前述したとおり、縄文時代早期初頭の無文土器群の範疇に入る可能性が指摘されていたが、約9,000年前という年代値とも矛盾しない。多縄文土器との関係においては、櫛引遺跡で得られた年代値と滝端遺跡で得られた年代値で近似する値が得られており、比較すると約250年程の差に留まる。

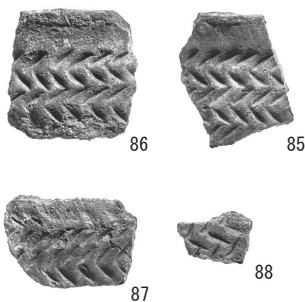
7. 板橋Ⅱ遺跡・鹿糠浜Ⅰ遺跡出土資料の検討

さて、前述の内容を基に板橋Ⅱ遺跡・鹿糠浜Ⅰ遺跡から出土した爪形文系土器について検討する。

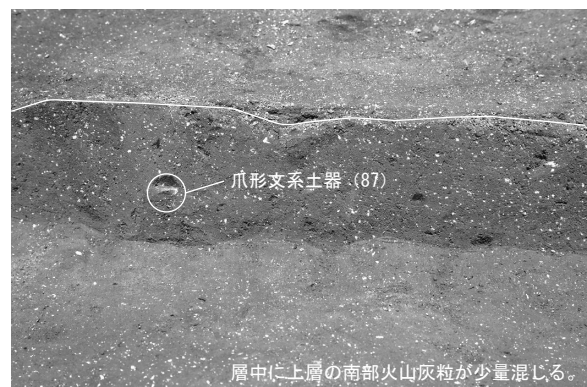
(1) 出土資料の特徴

板橋Ⅱ遺跡（岩手県九戸郡洋野町）（第6図-85～88：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2021）

丘陵頂部付近と南側斜面谷部（遺構外）の南部火山灰層下層の暗褐～黄褐色土より口縁部片2点、胴部片2点が出土している。口縁部は平縁で緩やかに外反する。口唇部は平坦に成形されるもの（85）と丸みを帯びるもの（86）がある。器厚は5～6mm前後で、薄手のつくりである。胎土は精緻で石英やチャートを含む他、85は海綿骨針を含む。繊維は含まない。焼成は良好で堅くしまる。内面にはナデと考えられる調整が施される。文様はいずれも米粒状爪形文を上下で異方向に刺突し、羽状展開させたものを横位多段に施文する。87は他と異なり、右傾の刺突列が2列続く箇所が見られる。刺突の幅は2～3mm程、長さは6～9mm程で、2～4mm程の間隔で施文される。出土層位は風倒木痕から出土した85を除いていずれも南部火山灰下層で、地域的な傾向とも整合的である。86・87の2点については土器付着炭化物の¹⁴C年代測定を実施している。第3表にそれぞれの測定データを示す。測定値を見ると、¹⁴C年代値としては86が11,380±40、87が11,230±40の年代値が得られている。暦年較正年代（1σ）では86が11,319calBC-11,224calBC、87が11,174calBC-11,116calBCを示しており、前節で確認した概ね9,000～12,000年前という年代観の範疇に収まる結果と言える。



板橋Ⅱ遺跡 爪形文系土器



爪形文系土器出土状況

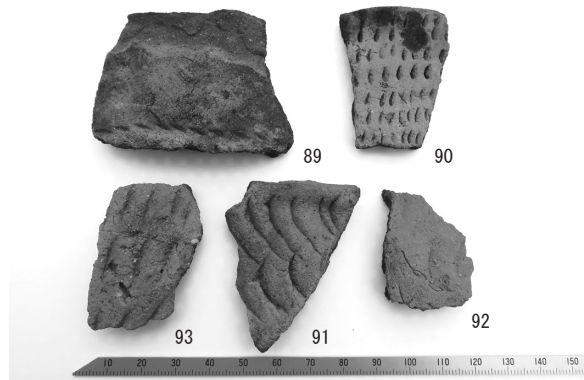
第3表 板橋Ⅱ遺跡出土爪形文系土器の¹⁴C年代測定データ

土器番号	測定試料	出土地点	測定コード	¹⁴ C年代値 (yrBP)	1σ暦年代範囲
86	土器付着炭化物	調査区中央深堀トレンチ V層	IAAA-191268	11,380±40	11,319calBC-11,224calBC
87	土器付着炭化物	調査区中央深堀トレンチ V層	IAAA-191269	11,230±40	11,174calBC-11,116calBC

鹿糠浜Ⅰ遺跡（岩手県九戸郡洋野町）（第6図-89～93：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2021）

丘陵南斜面の遺物包含層（捨て場）の黒褐色土（軽石点在）より縄文時代前期初頭の土器に混在して口縁部片3点、胴部片2点が出土している。口縁部は平縁でほぼ直立するが、91のみ僅かに外

反する。口唇部は平坦に成形されるもの(91)と丸みを帯びるもの(90)がある。器厚は7~9mm程で、板橋Ⅱ遺跡出土土器と比較すると、やや厚手のつくりである。胎土は石英やチャートの他、89は雲母、90・93は海綿骨針を含む。いずれも繊維脱痕が観察できる。焼成はやや不良だが、脆い印象は受けない。内面にはナデと考えられる調整が施される。文様は2種類がある。89は口縁部の無文帯を経て、胴部に左傾する米粒状爪形文が横位に刺突される。90・92・93は米粒状爪形文が多段に施文されるが、92・93は刺突の幅が5mm程で、他と比較してやや幅広である。91は左傾する切先状爪形文が多段に施文される。



鹿糠浜Ⅰ遺跡 爪形文系土器
(筆者がコンパクトデジカメで撮影)

(2) 検討結果

板橋Ⅱ遺跡出土の爪形文系土器はつくりや文様の特徴も地域的傾向に当てはまる。また、出土層位及び¹⁴C年代測定の結果も整合的と言える。鹿糠浜Ⅰ遺跡出土の爪形文系土器は文様については地域的傾向に当てはまるものの、やや厚手のつくりやいずれも胎土に繊維脱痕が観察できる点で異なる結果となった。鹿糠浜Ⅰ遺跡出土の土器は縄文時代早期以降の時期である可能性も考えられる。

8. おわりに

今回の検討において東北北部の爪形文系土器の地域的傾向について捉えることができた点や今まで類例のなかった岩手県沿岸部の出土事例についても言及できた点は意義があるものとする。また、板橋Ⅱ遺跡出土の爪形文系土器については全国的にも数少ない¹⁴C年代測定データの蓄積ができ、一定の成果を得た。しかしながら、課題点としては編年について言及できなかった点が挙げられる。資料が断片的であるが故に編年について言及するには今後も資料の蓄積が不可欠と感じる。また、多縄文土器や縄文時代早期初頭の無文土器群との関係性について今後も注視する必要がある。

出典

- 第4図 盛岡市教育委員会 1986『大館遺跡群(大新町遺跡・大館町遺跡) - 昭和60年度発掘調査概報 -』より加工・転載。
 第6図コアスカ館遺跡写真 岩手日報社出版部 2000『いわて未来への遺産 遺跡は語る 旧石器~古墳時代』より加工・転載。
 第7図右 井上雅孝 2009「岩手山降下火山灰と縄文土器 滝沢村出土の縄文土器と分火山灰の関係」より加工・転載。

註

- (1)近年の研究では、¹⁴C年代測定により、十和田南部火山灰は9,200年前、十和田二ノ倉火山灰は11,700~14,300年前、十和田八戸火山灰は15,200年前が推定されている(趙・佐瀬・濱田・長橋2018)。
 (2)板橋Ⅱ遺跡発掘調査報告書記載の黄檗遺跡、滝端遺跡の年代値に誤記があったため、本稿で訂正する。

引用・参考文献

- 〈報告書〉 ※岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書を岩文振埋報告書と略す。
 秋田県教育委員会 1982『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ - 鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡 -』
 秋田県文化財調査報告書第89集
 秋田県教育委員会 1994『桂の沢遺跡発掘調査報告書 - 小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査 -』
 秋田県文化財調査報告書第247集
 秋田県教育委員会 1996『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXⅡ - 岩瀬遺跡 -』秋田県文化財調査報告書第263集
 青森県埋蔵文化財調査センター 1983『鴨平(2)遺跡発掘調査報告書 - 東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

－ 青森県埋蔵文化財調査報告書第 73 集

- 青森県埋蔵文化財調査センター 1984『和野前山遺跡調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 82 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1999『櫛引遺跡－東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』
青森県埋蔵文化財調査報告書第 263 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2001『桜ヶ峰（1）遺跡－国道 101 号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－』
青森県埋蔵文化財調査報告書第 299 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2007『潟野遺跡Ⅱ－八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－』
青森県埋蔵文化財調査報告書第 431 集
- 碓ヶ関村教育委員会 2002『白沢遺跡－中碓ヶ関通常砂防事業に伴う試掘調査報告書－』碓ヶ関村文化財調査報告書第 3 集
- （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2021『鹿糠浜Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩文化振埋報告書第 727 集
- （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2021『花橋Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文化振埋報告書第 729 集
- （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原 国道 140 号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 滝沢村教育委員会 2000『岩手山の地質－火山灰が語る噴火史－』滝沢村文化財調査報告書第 32 集
- 中村孝三郎 1960『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・小片 保 1964『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
- 南郷村教育委員会 2001『黄檗遺跡－県営農業農村整備事業集道市野沢平 1 の建設事業に伴う発掘調査報告書－』
南郷村埋蔵文化財調査報告書第 3 集
- 階上町教育委員会 2000『滝端遺跡発掘調査報告書－県営南の郷中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
- 弘前市教育委員会 1998『独狐遺跡発掘調査報告書Ⅱ 民間開発に伴う発掘調査（青果冷蔵庫・出荷場等建設）』
- 弘前市教育委員会 2009『弘前市内遺跡発掘調査報告書 13 大久保（3）遺跡 新館遺跡 新寺町遺跡 詳細分布調査』
- 八戸市教育委員会 1999『是川中居遺跡－八戸市縄文学習館建設等に伴う発掘調査報告書－』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第 82 集
- 八戸市教育委員会 2004『牛ヶ沢（4）遺跡発掘調査報告書Ⅲ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 104 集
- 森田村教育委員会 2003『八重菊（1）遺跡Ⅲ・鶴喰（6）遺跡・鶴喰（9）遺跡』森田村緊急発掘調査報告書第 9 集
- 盛岡市教育委員会 1986『大館遺跡群（大新町遺跡・大館町遺跡）－昭和 60 年度発掘調査概報－』
- 盛岡市教育委員会 1987『安倍館・里館遺跡－昭和 61 年度発掘調査概報－』
- 盛岡市教育委員会 1987『大館遺跡群（大新町遺跡）－昭和 61 年度発掘調査概報－』
- 盛岡市教育委員会 1997『大館遺跡群（大館町遺跡）－平成 6・7 年度発掘調査概報－』
- 宮古市教育委員会 2018『日の出町Ⅱ遺跡－災害公営住宅整備事業（日の出町）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』宮古市埋蔵文化財調査報告書 97
- 〈論文・資料集等〉
- 青森県史編さん考古部会 2017『青森県史 資料編 考古 1 旧石器 縄文草創期～中期』
- 井上雅孝 2009「岩手山降下火山灰と縄文土器 滝沢村出土の縄文土器と分火山灰の関係」『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化』
- 岩手日報社出版部 2000『いわて未来への遺産 遺跡は語る 旧石器～古墳時代』
- 柏倉亮吉・加藤 稔 1967「山形県下の洞窟遺跡」『日本の洞穴遺跡』
- 鎌木義昌・芹沢長介 1965「長崎県福井岩陰－第 1 次発掘調査の概要－」『考古学集刊』3 巻 1 号
- 神原雄一郎 2009「盛岡における縄文時代草創期・早期の土器 大新町遺跡出土土器を中心とした盛岡の土器」『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化』
- 工藤 崇・佐々木 寿 2007「十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年」『地学雑誌』116
- 工藤 崇 2008「十和田火山、噴火エピソード E 及び G 噴出物の放射性炭素年代」『火山』第 53 巻第 6 号
- 小林謙一 2019『縄文時代の実年代講座』
- 小林達雄 1962「無土器から縄文文化の確立まで」『國學院大學 80 周年記念若木祭展示目録（上代文化別冊）』
- 谷口康浩・川口 潤 2001「長者久保・神子柴文化期における土器出現の ¹⁴C 年代」『第四紀研究』40
- 趙 哲済・佐瀬 隆・濱田 宏・長橋良隆 2018「岩手県沿岸部における遺跡の層序学的検討」『紀要』第 37 号（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 辻 誠一郎 2014「十和田二の倉火山灰の放射性炭素年代とその意義」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』第 3 号
- 中島 宏 1981「埼玉県北部の草創期土器群について」『土曜考古』3 号
- 西川博孝 2004「竹管文・爪形文の施文具」『考古学ジャーナル』523 号
- 萩谷千明 2008「爪形文系土器」『総覧 縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』
- 町田 洋・新井房夫 1992『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺』
- 松山 力・大池昭二 1986「十和田火山噴出物と火山活動」十和田科学博物館第 4 号
- 山内清男 1969「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』224 号
- 横浜市歴史博物館・（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 1996『縄文時代草創期資料集』

執筆者（論稿掲載順）

金子 昭彦（かねこ あきひこ）

（公財）岩手県文化振興事業団博物館

福島 正和（ふくしま まさかず）

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

阿部 勝則（あべ かつのり）

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

野中 裕貴（のなか ゆうき）

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

紀要 第41号

(令和3年度)

印刷 令和4年3月16日

発行 令和4年3月25日

発行 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印刷 有限会社ジロー印刷企画

〒020-0066 岩手県盛岡市上田2丁目17-4

電話 (019)651-6644

BULLETIN OF THE
RESEARCH INSTITUTE
FOR CULTURAL ARTIFACTS
VOL. 41

CONTENTS

Articles

Clay Figurines in the Tohoku Region of the Final Jomon Period(7)

– Material from sites yielding more than twenty clay figurines which were reported after (6) of these series –
KANeko, Akihiko

An Archaeological Study of Utilizing the Minor Grains in the Northern Tohoku Region during the Heian Period
FUKUSHIMA, Masakazu

A Study about the Genealogy of Hard White Charcoal Kilns in Iwate Prefecture in the Modern Period
ABE, Katsunori

Note

Potteries with Marks Pressed Fingernails in the Northern Tohoku Region in the Incipient Jomon Period
– Considerations of the Case Studies at Itabashi2 Site and Kanukahama1 Site –
NONAKA, Yuuki